資料 2

保護者説明資料

新しい南牧村立小・中学校の建設に向けて（抜粋）

平成 29 年 10 月

南牧村小中学校建設検討委員会

資料2

▽委員会での検討事項▽

1. 小中一貫教育制度の導入検討
　○小中一貫教育のかたち(学校種)
　　・義務教育学校・小中一貫型学校
　　・どういう教育を目指すのか

2. 建設地の選定　・どこで実施するのか

3. 開校時期　・いつから実施するのか

ここまでを全体協議
中間報告

以降、専門部会を設置

4. 小中一貫教育を実践するための施設検討
　○建設の基本コンセプト
　　・子ども達の様々な要望や動きに対応できる教室・スペースを重視した学校
　　・子ども達が様々な人達と触れ合い関わりあいができる学校
　　・子ども達が校舎からぬくもりや癒しを感じられる学校
　　・特別支援教育へ配慮した学校

5. カリキュラム・教育活動の提案
　　・教育ヴィジョンの構築、具体的なカリキュラム検討など

6. 子育て環境の検討
　①通学手段
　　・スクールバス・徒歩、危険個所の検討
　②放課後プラン
　　・児童クラブ
　　・バス待ち時間の利用(放課後活動の充実)

部会報告を
全体会で協議

7. 住民参加による学校運営の検討
　①住民参加の学校運営にするには
　　・住民の意見をくみ上げる仕組み
　　・住民の意識を高める活動
　　・住民参加による小中一貫教育づくり
　　・学校評価制度
　　・住民と共に締めくくる小学校(閉校行事)

最終報告

□委員会の検討内容とスケジュールのめやす□

○ 4月中「各校PTA総会」:事務局から概要説明、委員会開催について予告

○ 第1回: 5/23 委員会の発足/委嘱、正副委員長の選出
- ・委員会の設置趣旨及び役割と検討内容、議論の進め方
- ・説明:学校の現状と課題、児童生徒数の推移、学校づくり委員会の答申、保護者アンケート結果、ほか

○ 第2回:6/中旬
- ・学校教育ヴィジョン、小中一貫教育制度の導入について/南牧村にふさわしい小中一貫教育の姿
- ・建設地、建設時期、学校種について意見交換 ほか

○第3回:7/上旬
- ・建設地、建設時期、学校種の検討
- ・建設案(建設候補地)における課題

○第4回:7/下旬
- ・建設地、建設時期の検討
- ・建設案(建設候補地)における課題

○第5回:8/上旬
- ・建設地、建設時期の検討
- ・論点整理と中間報告に向けて意見集約

※ 住民懇談会の開催
中間報告の前or後に開催か
(保護者・住民対象)

○第6回:8/下旬 ・中間報告(建設地、建設時期、学校種)

【部会編成による検討】 以降随時

○第7回以降: / 各部会による検討・集約/全体会

⇩

☆☆ 議論のまとめ ☆☆

↓

村長へ報告

☆専門部会で検討することは☆

第1専門部会　小中一貫教育導入検討部会
○　小中一貫教育制度導入の具体的な検討 ・カリキュラムの検討など
第2専門部会　小中一貫教育を実践するための施設検討部会
○　建設の基本コンセプト ・子ども達の様々な要望や動きに対応できる教室・スペースを重視した学校 ・子ども達が様々な人達と触れ合い関わり合いが持てる学校 ～学習環境の向上に資する学校施設の複合化と学校を拠点とした地域振興を目指して～ ・子ども達が校舎からぬくもりや癒しを感じられる学校 ・特別支援教育へ配慮した学校 ・小規模校での小中一貫教育に適した施設づくり
第3専門部会　子育て環境検討部会
①　通学手段と安全確保 ・スクールバス・徒歩 ・危険個所の検討 ②　放課後プラン ・児童クラブ・放課後倶楽部 ・バス待ち時間の利用（放課後活動の充実）
第4専門部会　地域参加による学校運営検討部会
○　住民参加の学校運営 ・住民の意見をくみ上げる仕組み ・住民の意識を高める活動 ・住民参加による小中一貫教育づくり ・住民と共に締めくくる小学校（閉校行事）

資料3

南牧村の学校環境の課題

1．北　小

（1）学校教育の現状

◎施設・環境面

【学校施設として好ましい面】

・南向きの校舎で日中の日当たりもよく、風当たりも強くない。
・校庭が芝生であり、厳冬以外は一年を通して野外活動が可能である。
・校舎の構造がハモニカ型の三階建てであり、教室配置がシンプルで全体の間取りが把握しやすい。
・校庭で活動する子供たちの姿がどの部屋からもよく見える。
・行事等で体育館に移動しやすく、外からの対応も容易である。
・ランチルーム、プールが明るく、開放的である。
・保健室が南向きで明るく、居心地がよい。
・視聴覚室、図書室、音楽室、パソコンルームが絨毯張りで直に座ることができ、使い勝手がよい。
・校庭以外にも近隣に安全にマラソンをする道路があり便利である。
・小海分院に三校で一番近い。

【学校施設として好ましくない面】

・校舎北側に山腹が迫り、廊下が暗く、冬場の寒さがある。
・昇降口を入る児童の姿が見れるのが職員室の小窓だけである。
・2・3階のベランダは、活動の激しい子どもには心配である。
・低学年には3階まで上がり下りするのが大変。
・雨漏りなどの老朽化が激しい。
・国道から学校に入る交差点が、見通しが悪く危険である。

【使用可能教室】

普通教室6、理科室、音楽室、家庭科室、図書室、保健室、図工室、視聴覚室、パソコンルームが各1、余裕教室が無い。

◎運営面

・放課後、全校で使える自由時間が取れない。
・スクールバスは中学校との併用であり、登下校の時間設定が難しい。
・体験型学習の足として、バス運行が不可欠である。
・コミュニティスクール活動として、地域の皆さんに協力を得ているが、それぞれの地区を題材とした学習や地域に出かけての学習が少ない。
・任地居住でない教職員が多く、時間的に臨機応変の学校運営は難しい。
・佐久地区居住教員が多い（佐久の文化を理解している）

（2）今後予想される課題

・特別支援教室が必要

・児童数の減による児童会の運営

・体育（ゲーム形式）、運動会など行事の運営（種目、係）

・多様な意見発表や話し合い、グループ活動ができない。

・ＰＴＡ活動の制約

・教員配置（初任者、独身、若い）

２．南　小

（1）学校教育の現状

◎施設・環境面

【学校施設として好ましい面】

・校庭が広く、多目的な屋外活動が可能である。

・職員室から登下校する児童の姿がよく見ることができ、声掛けがしやすい。

・多目的スペースがあり、ミニ集会など体育館を使うまでもない活動に使える。

・玄関から続く廊下が展示スペースとして有効活用できる。

・変則的だが２階建てで、児童には安全。

・図書室が明るく、日当たりがよく最高の環境である。

【学校施設として好ましくない面】

・校庭で遊ぶ児童の姿が職員室や教室から全く見えない。

・教室配置が複雑で全体の把握がしづらい。

・普通教室棟は、１階建てで地形的に低く、廊下に階段があり、全体的に暗く開放感に乏しい。

・冬場の強風や寒さにより、屋外での活動が制限される。

・保健室は、職員室や教室から遠い。

【使用可能教室】

普通教室６、理科室、音楽室、家庭科室、図書室、保健室、図工室、視聴覚室、パソコンルームが各１、特別支援教室２であり、余裕教室が無い。

◎運営面

・徒歩通学の範囲が広く、通学上の心配がある。

・スクールバスは中学校との併用であり、登下校の時間設定が難しい。

・特別支援学級は２学級あり、支援を要する児童への対応ができる。

・任地居住の職員が多く、臨機応変の学校運営が可能である。

・体験型学習の足として、バス運行が不可欠である。

・晩秋から春先までの長期間、校外活動が制限される。

（2）今後予想される課題

・児童数の減による児童会の運営

・体育（ゲーム形式）、運動会など行事の運営（種目、係）

・多様な意見発表や話し合い、グループ活動ができない

・ＰＴＡ活動の制約

・教員配置（初任者、独身、若い）

３．中　学

（1）学校教育の現状

◎施設・環境面

【学校施設として好ましい面】

・山塊に囲まれ日当たりもよく、強風などの心配がない。

・グランドの排水がよく、雨が上がればすぐに使用できる。

・ランチルームと二階建ての体育館の構造が機能的であり、使い勝手がよく明るい。

【学校施設として好ましくない面】

・玄関は広いが、職員室から昇降口の生徒の姿がまったく見えない。

・管理棟は構造が閉鎖的で、会議室に窓が無く圧迫感がある。

・屋外プールは使用期間が短く、管理が大変である。

・駐車場が狭い。

・周囲の山林の手入れがされず、カラマツの成長により空が狭く、野生動物の出没がある。

・グランド前の道路が冬期間凍結し危険である。

・全体的に除雪がしづらい。

・雨漏りなどの老朽化が激しい。

【使用可能教室】

普通教室６、理科室、音楽室、技術科室、被服室、調理室、美術室、図書室、保健室、パソコン室、会議室が各１、特別支援教室２であり、余裕教室が無い。

◎運営面

・スクールバスの運行に合わせた日課設定が必要になる。

・生徒の拘束時間が長いが、学校で自由に使える時間が少ない。

・生徒会や部活動などの休日登校は家庭対応になる。

（2）今後予想される課題

・身に着けなければならない知識が多いが解決力が身につかない。

・教員数の減（１教科１教師）授業改善が図れない。

・免許外教科担当を置かざるをえない。

・部活動の運営

○三校共通として

・小人数の職員数により、職員１人が受け持つ係が多く負担が大きい。

・子供たちが少ない分、個別指導に手が回り、個々のメリットがある。

・手が入りすぎて、子ども達と教師の関係が難しくなることがある。

・スクールバスの利用による運動不足。

参考資料

学校別決算状況(H18～H27)

単位:千円

年度	学校	総決算額	人件費	人数等	工事費等	内容
18	北小	19,395	5,361	講1、用1		
	南小	276,534	8,369	講1、用1	254,555	体育館改修、プール
	中学	40,158	9,909	講3、用1		
19	北小	48,022	5,421	講1、用1、支0.2	28,823	校庭芝生化
	南小	117,120	8,965	講1、用1、支0.2	95,569	校長室、職員室改修
	中学	35,911	10,041	講3、用1		
20	北小	18,865	7,036	講1、用1、支1		
	南小	26,970	5,413	講1、用1、支1	2,697	プール熱交換機
	中学	55,690	12,712	講4、用1	20,740	プール、渡り廊下
21	北小	20,968	6,722	講1、用1、支1		
	南小	25,582	7,047	講1、用1、支2		
	中学	40,989	15,988	講4、用1	1,260	プール更衣室
22	北小	22,950	8,590	講1、用1、支3	2,093	地下タンク、プール
	南小	23,712	7,128	講1、用1、支2	2,400	体育館照明、放送機
	中学	41,465	16,314	講4、用1		
23	北小	23,988	7,619	講1、用1、支2	3,072	トイレ
	南小	34,688	7,753	講1、用1、支2	9,202	電源、トイレ
	中学	58,880	15,716	講4、用1	19,901	暖房、外壁
24	北小	23,804	8,076	講1、用1、支2	1,496	電源
	南小	26,558	8,452	講1、用1、支2	1,793	プールサイド
	中学	40,079	16,471	講4、用1		
25	北小	28,759	8,351	講1、用1、支2	4,075	トイレ内壁
	南小	64,067	8,103	講1、用1、支2	38,431	プール屋根、犬走り
	中学	46,825	15,041	講4、用1	9,303	プール、体育館屋根
26	北小	24,125	8,454	講1、用1、支2		
	南小	25,288	8,343	講1、用1、支2		
	中学	34,200	12,570	講3、用1		
27	北小	23,732	9,293	講1、用1、支2		

	南小	23,268	6,829	講1、用1、支2	691	音響
	中学	42,715	11,424	講3、用1	14,840	雨漏り修繕
計	北小	230,876	65,630		39,559	
	南小	620,519	69,573		405,338	
	中学	394,197	124,762		66,044	

北小:S56 年工事開始、S58年二期工事完了(築 34)

南小:S58 年工事開始、S59 年二期工事完了(築 33)

中学:S52 年工事開始、S54 年三期工事完了(築 38)

佐久管内町村別

小学校統計

	H16				H27					
町村名	小学校数	学級数	児童数	人口	小学校数	学級数	児童数	減少率	人口	減少率
南牧村	2	12	220	3,450	2	14	190	−13.6%	3,055	−11.4%
川上村	2	17	353	4,892	2	14	180	−49.0%	3,862	−21.1%
南相木村	1	6	79	1,484	1	6	58	−26.6%	1,027	−30.8%
北相木村	1	6	69	998	1	6	53	−23.2%	803	−19.5%
小海町	2	13	329	5,684	1	8	176	−46.5%	4,676	−17.7%
佐久穂町	4	37	810	13,238	1	19	517	−36.2%	11,355	−14.2%
御代田町	2	31	868	13,982	2	35	954	9.9%	15,018	7.4%
軽井沢町	3	39	1,024	16,970	6	95	975	−4.8%	19,605	15.5%
立科町	1	18	501	8,445	1	16	344	−31.3%	7,296	−13.6%

※学級数は特別支援学級を含む

児童生徒数将来推計

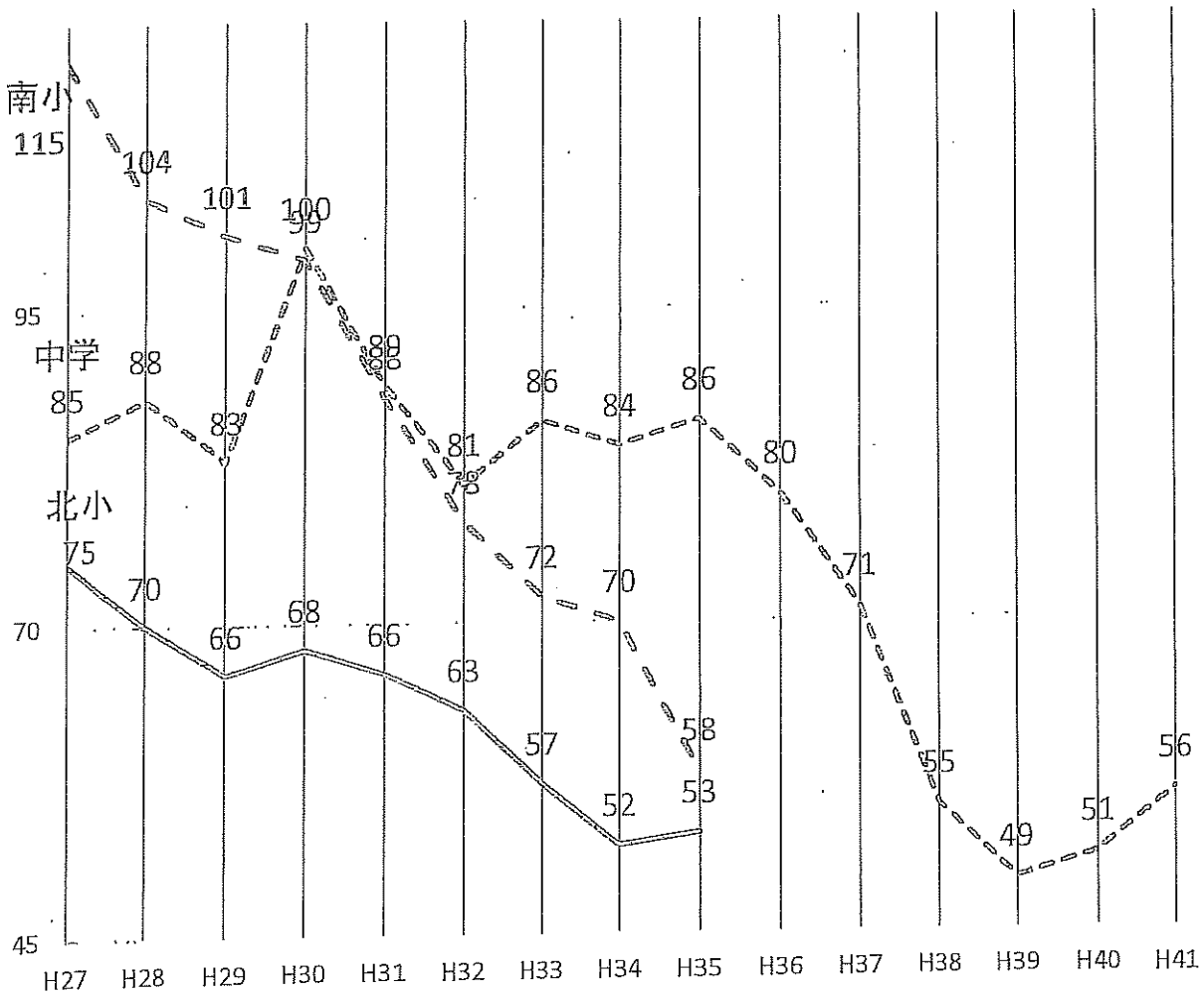
※ 平成28年度までの出生児数による数値（小学校はH35、中学はH41まで）

単位：人

学校名		28年度	29年度	30年度	31年度	32年度	33年度	34年度	35年度
南牧北小学校	入学児	12	7	14	9	7	8	7	8
	全校	70	66	68	66	63	57	52	53
南牧南小学校	入学児	14	20	13	8	4	13	12	8
	全校	104	101	99	88	78	72	70	58
小学校計	入学児	26	27	27	17	11	21	19	16
	全校	174	167	167	154	141	129	122	111
南牧中学校	入学生	39	33	28	28	25	33	26	27
	全校	88	83	100	89	81	86	84	86
児童生徒数計		262	250	267	243	222	215	206	197

学校名	36年度	37年度	38年度	39年度	40年度	41年度
南牧中学校	27	17	11	21	19	16
	80	71	55	49	51	56

学校別全児童生徒数の推計



平成２８年１２月２６日

南牧村長　大村 公之助　様

南牧村学校づくり委員会
委員長　林　崇　介

今後の南牧村立小・中学校の望ましい教育環境の在り方と
その実現に向けた方策について（答申）

平成28年5月30日付けで南牧村長から諮問を受けた標記の事項について、下記の意見を添えて次のとおり答申する。

答 申

「現在ある２校の小学校を統合し、統合小学校と中学校において
特色ある小中一貫教育を目指す。」

《答申の理由》

南牧村学校づくり委員会では、大村村長からの諮問を受け、委員会審議８回、先進地視察２回を開催し検討してきました。また専門的な見地からの意見を集約するために教育専門部会を発足し、今後の南牧村の教育にふさわしい教育ヴィジョンを検討しました。

全国的に進む少子化により、当村の児童・生徒数は現在262名であり、今後もさらに減少することが予想されています。２つの小学校で児童数10人未満の学年が見込まれるなどクラス活動や学校運営に懸念が持たれます。また、三校の校舎は、昭和50年代の同時期に建設され老朽化が進んでいます。

このような状況の中で、南牧村学校づくり委員会は、児童生徒にとってより良い教育環境とは何かを中心に検討してまいりました。児童の成長には、多くの人、多くの物事との関わりを通じて切磋琢磨し、社会性を培い、発達段階や関心の程度に応じた教科学習やクラブ活動等を通して、確かな学力と豊かな心を身につけていく必要があります。そのためには学級の人数は少なくとも15人以上が望ましいと考えます。自治体合併を望まず自立を選択した

南牧村にとって、学校規模の縮小は止むを得ないものでありますが、将来を見通した中で、現段階で最も望ましい教育環境と効率的な学校運営を合わせて検討した結果、小学校の統合と小中一貫教育の導入は最善の方策との結論に至りました。

よって、次の意見を付して答申といたします。

意 見

（1） 児童・生徒にとって最も望ましい教育環境を早急に実現するため、小中一貫教育の研究を深め、ふるさと学習などを中心とした南牧村の学校教育ヴィジョンが確実に実施されるよう努められたい。

（2） 統合にあたっては、新しい学校施設を建設されたい。

（3） 建設地は、既存の小・中学校敷地又は新設も含め、最も適切な場所を選定されたい。

（4） 児童・生徒の通学手段は、総合的に村が対策を講じられたい。

（5） 新たな学校は、放課後、自習ができるスペースや、児童クラブ等の多目的な施設を併設されたい。また、他の公共施設との複合化や住民の交流の場となるような学校を拠点とした地域コミュニティの形成に資するものとされたい。

（6） 厳しい冬期間、児童生徒が運動の機会を確保できる施設を造られたい。

（7） 学校が無くなる地域の振興に配慮されたい。

（8） 今後も住民、保護者の声を積極的に聴取し、丁寧な合意形成を図られたい。

以上

「南牧村の教育環境に関する保護者意向調査」結果集計

Ⅰ．調査の概要

保護者意向調査対象世帯・・・村内在住で平成28年12月31日時点でお子さんがいる世帯
対象世帯数３９６世帯（延べ児童数）

回答数・・・２２８世帯　　（多子世帯は複数回答有）

回答率・・・　５７．６％　　228／396

☆ 子供の属性別学校区別回答率

属 性	学校区等	対象数	回答数	回答率
未就園		６１	３１	50.8
保育園	南 牧	３０	１４	46.7
	野辺山	４１	２１	51.2
小学校	北 小	７０	４２	60.0
	南 小	１０４	４５	43.3
	小諸養護	１	０	0.0
中学校	南 牧	８８	５１	58.0
	小諸養護	１	０	0.0
分類不能			２４	
計		３９６	２２８	57.6

※保育園は年少～年長まで・未満児は未就園に分類

※小諸養護は基本情報２に選択肢が無いため回答率は0.0%と表記

☆ 回答者の内訳

基本情報１：お住まいの地区

海 尻	海ノ口	広 瀬	板 橋	野辺山	平 沢	未記載
24	61	27	26	63	25	2

基本情報３：お子さんの学年等

未就園・未満児	年 少	年 中	年 長	小１	小２	小３
31	9	5	20	8	14	13
小４	小５	小６	中１	中２	中３	分類不能
16	17	18	21	9	18	29

(表内数値はすべて%)

Ⅱ．調査結果

問１　現在お子さんが通っている学校の良いと思う点を次の選択肢から、特に良いと思う順番から３つ選び、その番号を解答欄に記入してください。

① きめ細やかな学習指導がされていて、子どもに必要な学力がついている
② 基礎的な学力の習得に加えて、より深い教育指導がなされている
③ 教師や友人との、濃密な人間関係がつくられている
④ 学校の行事や部活動・クラブ活動などにすべての子どもが積極的に参加できている
⑤ 特別支援教育の体制や内容が充実している
⑥ 南牧村や長野県の環境や歴史などのふるさとの特性を活かした教育がされている
⑦ 高校進学や就職までの将来を見とおした教育指導がなされている
⑧ 子どもの教育に必要な学校の施設が充実している
⑨ 学校の施設や通学方法の安全性に必要な気配りがされており、安心して通学させられる
⑩ 学校と地域の結びつきがしっかりしていて、お互いに信頼関係が築けている
⑪ 保護者どうしの関係が濃密で必要な情報を得られやすい
⑫ 特にない

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
一番いいところ	18	4	21	13	9	3	0	5	16	1	1	9
次にいいところ	7	8	17	6	10	12	0	6	13	11	5	5
その次にいいところ	10	4	9	10	10	10	0	5	9	13	5	15
計	12	5	16	10	10	8	0	6	13	7	4	9

回答の傾向と考察

選択のばらつきはあるが③、⑨、①の選択が目立つ。 ③少人数なことによる教師や友人との濃密な人間関係、①きめ細やかな学習指導ができていると評価していることが見うけられる。一方で⑦将来を見通した学習指導がされているの評価が皆無。

問２　現在お子さんが通っている学校のよくないと思う点を次の選択肢から、特に良くないと思う順番から３つ選び、その番号を解答欄に記入してください。

① 子どもに必要な学力がついていない
② 基礎的な学力の習得のほかに加えての、より深い教育指導がなされていない
③ 教師や友人との人間関係が固定化していて競争力や他者への思いが養えていない
④ 学校の行事や部活動・クラブ活動などが十分に行えていない
⑤ 特別支援教育の体制や内容が不十分である
⑥ 南牧村や長野県の環境や歴史などのふるさとの特性を活かした教育がされていない
⑦ 高校進学や就職までの将来を見とおした教育指導がなされていない
⑧ 子どもの教育に必要な学校の施設が充実していない
⑨ 学校の施設や通学方法の安全性に必要な気配りがされておらず、安心して通させられない
⑩ 学校と地域の結びつきが希薄であり、村の学校という感じがしない
⑪ 保護者どうしの関係が近すぎて窮屈さを感じる
⑫ 特にない

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
一番よくないところ	8	13	20	16	5	1	10	3	5	0	5	14
次によくないところ	3	9	14	16	3	13	13	10	6	4	6	3
その次によくないところ	2	5	12	8	4	5	21	6	5	6	15	11
計	5	9	16	14	4	6	14	6	5	3	8	10

回答の傾向と考察

③、④、⑦、②の選択が多い。③人間関係の固定化や競争力など、②基礎学習のほかのより深い教育指導ができていないとする指摘が多い。問１で小規模によりきめ細やかな指導ができていると評価するものと、できていないとする意見の両面があることが伺える。④は少人数により行事や部活動が十分行われていないとの考えが多い。⑦も問１と同様に中学卒業後を見通した就学指導ができていないとの指摘が多い。

問３　現在、小中学校の給食は中学校の給食センターでまとめて作らています。学校給食について満足されている点と不満な点を次の選択肢から３つ選び、その番号を解答欄に記入してください。

① 地元の食材を使ったメニューなどの地域性を活かした給食提供
② 食の安全に十分配慮した給食提供
③ 温かいものは温かく、冷たいものは冷たい適温で提供される給食
④ 食物アレルギーに配慮した給食
⑤ 子どもの成長に必要な栄養が十分に考えられた給食
⑥ おいしくて、子どもが毎日、楽しみにする給食
⑦ 食べ方や食事のマナー、食材・メニューから子どもたちがさまざまなことを学び取る食育・給食指導
⑧ 特にない

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
特に満足	39	10	6	0	13	29	1	2
次に満足	24	19	14	6	26	10	0	1
その次に満足	14	21	9	3	19	19	8	7
計	26	17	9	3	19	20	3	3
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
特に不満	1	5	15	13	2	8	8	48
次に不足	5	3	9	29	2	15	22	15
その次に不満	5	23	5	3	5	13	20	26
計	3	8	12	15	2	10	14	36

回答の傾向と考察

「満足な点」①、⑥、⑤、②の選択が多い。給食の基本である点に最低限満足して頂いているものと思われる。「不満な点」の選択にばらつきはあるが、不満なことは「⑧特にない」が一番多く安心できる。その一方で④食物アレルギーへの対応、⑦マナー指導、③温かい食事の提供に不満があり課題があると思われる。

問４　次の問４から問５は、保育園児や未就園児の保護者にお聞きします。お子さんが将来通学する村の小中学校に求めるものはなんですか。次の選択肢のうちで特に求める順番から３つ選び、その番号を解答欄に記入してください。

① 基礎的な学力をつけるための、きめ細やかな学習指導
② 基礎的な学力の習得に加えて、子どもの習熟度に応じた柔軟な学習体制の充実
③ 学校行事や部活動・クラブ活動などの充実
④ 特別支援教育の体制や内容の充実
⑤ 義務教育修了後の進学や・就職までの子どもたちの将来を見据えた教育体制
⑥ 南牧村や長野県の環境や歴史などのふるさとの特性を活かした教育
⑦ 子どもの教育に必要な学校の施設の充実
⑧ 学校の施設や通学方法の安全性にに必要な気配りがされており、安心して通学させられること
⑨ 子どもたちが南牧村で学んだことや経験したことに誇りを持ち、そこで学んだことやふるさとを自分の原点と思えるような学校
⑩ 学校と地域の結びつきがしっかりしていて地域に開かれた学校
⑪ 子どもたちの自律する心や困難に立ち向かう克己心をはぐくむ学校
⑫ 子どもたちにとって将来必要となる競争心や他者への思いをはぐくむ学校
⑬ 特にない

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬
特に求めるところ	17	33	4	2	2	2	0	10	9	1	11	8	1
次に求めるところ	5	15	16	1	15	3	4	7	4	8	10	12	0
その次に求めるところ	4	8	10	11	11	5	8	14	10	3	12	4	0
計	9	19	10	5	9	4	4	10	7	4	11	8	0

回答の傾向と考察

②基礎的な学力の習得に加え習熟度に応じた学習の充実を特に望んでいる。問２でも、深い学習ができていないとする選択があったことから課題といえる。⑤の将来を見据えた教育は、既就学世帯ほどでなく、⑪自立心、克己心が育める学校を望んでいる。

問５　現在、小中学校の給食は中学校の給食センターでまとめて作られています。お子さんが村の小中学校に進学されるにあたり、学校給食に求めるものはなんですか。次の選択肢の中から特に求める順番から３つ選び、その番号を解答欄に記入してください。

① 地元の食材を使ったメニューなどの地域性を活かした給食提供
② 食の安全に十分配慮した給食提供
③ 温かいものは温かく、冷たいものは冷たい適温で提供される給食
④ 食物アレルギーに配慮した給食
⑤ 子どもの成長に必要な栄養が十分に考えられた給食
⑥ おいしくて、子どもが毎日、楽しみにする給食
⑦ 食べ方や食事のマナー、食材・メニューから子どもたちがさまざまなことを学び取る食育・給食指導
⑧ 給食はなくてもいい。弁当を持たせればよい
⑨ 特にない

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
特に求めるところ	11	34	2	15	17	15	5	0	1
次に求めるところ	17	16	14	3	17	24	9	0	0
その次に求めるところ	15	9	14	7	13	25	17	0	0
計	14	20	10	8	16	21	10	0	1

回答の傾向と考察

⑧給食はいらない以外は、まんべんなく求められている。問３同様②⑤⑥は給食の基本。

問６　ここから全員に伺います。長野県は全国で唯一、義務教育段階での 35 人規模学級を実施していますが、南牧村の小中学校は、ほとんどの学級で 35 人を下回っていて、いわゆる小規模学級・小規模校となっています。初めのグラフのとおり、この傾向は今後どんどん進行していくことが明らかです。小規模校については、子どもたちにもたらすメリットとデメリットの両方が言われてもいます。この点について、あなたのお考えに当てはまるものを次の選択肢から３つ選び、その番号を解答欄に記入してください。

① 教師のきめ細やかな学習指導ができるので望ましい
② あらゆる場面で教師の目が届きやすく、子どもの安全が確保されるので望ましい
③ 人間関係が固定化してしまい、自立心や競争心がはぐくまれない
④ 配置される教員数が少なくなるので、より深い学習指導がむずかしくなる
⑤ 一人ひとり活躍の機会が多いので望ましい
⑥ 特別支援教育や個々のこどもの実情に沿った学習指導や生活指導ができる
⑦ 配置される教員数が少なくなるので、特別支援教育や個々のこどもの実情に沿った学習指導や生活指導が困難になる
⑧ 学校行事や部活動などが十分に行えない不安がある
⑨ 学校自体が存続できなくなる可能性があり不安を感じる
⑩ 学校に少人数とか大人数とかの規模は関係ない
⑪ 考えたことがない
⑫ あてはまるものはない

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
特に当てはまるもの	18	13	28	8	4	1	3	15	4	6	0	0
次に当てはまるもの	5	16	17	7	7	4	8	32	3	0	0	1
その次に当てはまるもの	9	4	14	11	7	8	5	24	9	5	0	4
計	11	11	20	9	6	4	5	23	5	4	0	2

回答の傾向と考察

⑧、③、①、②に選択が多い。課題として⑧行事・部活動が十分に行えない、③人間関係の固定化があり、利点として①きめ細やかな学習指導、②教師の目が届きやすいが上げられる。少人数ということは利点も難点もあることが伺える。

問７　現実的に子どもたちの数が減少していくことが明らかななかで、子どもたちにとってのよりよい教育環境を考えるための選択肢のひとつとして、小中学校の統廃合を検討することは避けては通れません。あなたのお考えに近いものを次の中から一つだけお選びください。

① 今の３校のままがよい
② 小学校のみ統合すべきだ
③ 小中学校を一つに統合して小中一貫教育をすべきだ
④ 保育園と小中学校を統合して保小中の一貫教育をすべきだ
⑤ 小学校は他町村の学校と統合すべきだ
⑥ 中学校は他町村の学校と統合すべきだ
⑦ 小学校も中学校も他町村の学校と統合すべきだ
⑧ あてはまるものはない
⑨ 興味がない

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
9	20	45	8	0	7	7	3	1

回答の傾向と考察

①現状の３校存続が９％であり、村内でのいずれかの形で統合（②③④）73％でかなり多い。一方で他町村との統合（⑥⑦）が 14％あるのは中学校部活動への不満が多いからであろうか。

問８　あなたは、小中一貫教育について知っていますか。

① 知っている　② よく分からないが聞いたことがある　③ 知らない

①	②	③
52	48	0

回答の傾向と考察

小中一貫を③知らないが皆無である。

問９　問８で①知っていると答えた方にのみお聞きします。
南牧村で小中一貫教育を導入した場合、効果があると思いますか。

① 効果がある　② わからない　③ 効果が無い

①	②	③
34	56	10

回答の傾向と考察

②わからないの選択が半数以上であるが①効果があるも 34％に上る。

問 10　あなたは、小中一貫教育について、詳しく説明を聞きたいと思いますか。

① 聞きたい　　② どちらでもよい　　③ 聞きたくない

①	②	③
67	31	2

回答の傾向と考察

①説明を聞きたいが多く、今後、説明会等で周知する必要があると思われる。

小中一貫教育の新たな展開（概論）

1　制度化の目的

全国で進められている小中連携、小中一貫教育の目的については、置かれている様々な状況から極めて多様である。一つには、少子化の進行や地域コミュニティの弱体化、核家族化の進行により児童生徒の人間関係が固定化しやすい中、小中連携、小中一貫教育の実施により、児童生徒が多様な教職員、児童生徒と関わる機会を増やすことで小学生の中学進学に対する不安感を軽減することを目的とする例がある。

中教審答申において、小中一貫教育の制度化の目的については、「小・中学校段階の教職員が９年間を通じて実現したい教育目標を共有し、一体的な組織体制の下、９年間一貫した系統的な教育課程を編成・実施することができる学校種を新たに設けるなどして、設置者が地域の実情を踏まえて小中一貫教育が有効であると判断した場合に、円滑かつ効果的に導入できる環境を整えることである。」とし、このことにより小中一貫教育の優れた取り組みの全国展開と既存の小・中学校における小中連携の高度化が促進され、

① 組織的・継続的な教育活動の徹底による教育効果の向上（学力・学習意欲の向上）

② 子どもたちの社会性の育成機能の向上

③ いわゆる「中１ギャップ」の緩和（不登校・いじめの減少等）をはじめとする生徒指導上の諸問題の減少等に資することとなり、義務教育全体の質の向上が期待されている。

2　新たな学校種の創設

① 義務教育学校

一人の校長の下、一つの教職員集団が９年間一貫した教育を行う新たな学校種を学校教育法に位置付ける　※「学校教育法等の一部を改正する法律」　平成 28 年４月１日施行

② 小中一貫型小学校・中学校（仮称）

それぞれ独立した小・中学校が義務教育学校に準じた形で一貫した教育を施すことができる　※いずれも小・中学校学校指導要領における内容項目をすべて取り扱う形で教育が行われるもの

3　教育課程

○ 上記いずれにおいても教育課程については、

① ９年間の教育目標の明確化

② 当該教育目標に即した教科等毎の９年間一貫した系統的な教育課程の編成・実施（年間指導計画の策定を含む）

また、現行の学習指導要領に基づくことを基本とした上で、独自教科の設定、指導内容の入れ替え・移行など一定の範囲で教育課程の特例が認められる。

○ 「中１ギャップ」や子供の発達の早期傾向など、地域の児童生徒が抱える教育課題に対応して９年間の教育課程において６－３以外にも４－３－２、５－４など柔軟な学年段階の

区切りを設定できる。

4　施設形態の分類

① 施設一体型：小学校と中学校の校舎の全部または一部が一体的に設置されている
（渡り廊下などでつながっているものを含む）

② 施設隣接型：小学校と中学校の校舎が同一敷地内又は隣接する敷地に別々に設置されている

③ 施設分離型：小学校と中学校の校舎が隣接していない異なる敷地に別々に設置されている

小中一貫教育の二つの類型

	義務教育学校	小中一貫型小・中学校（仮称）
修業年限	・９年 （但し転校の円滑化等のため、前半６年と後半３年の課程の区分は確保）	・小・中学校と同じ
教育課程	・９年間の教育目標の設定、９年間の系統性を確保した教育課程の編成 ・小・中の学習指導要領を準用した上で、一貫教育の実施に必要な教育課程の特例を創設（一貫校の軸となる新教科創設、指導事項の学年・学校段階の入れ替え・移行）	・９年間の教育目標の設定、９年間の系統性を確保した教育課程の編成 ・小・中の学習指導要領を適用した上で、一貫教育の実施に必要な教育課程の特例を創設（同左）
組織	・１人の校長 ・一つの教職員組織 ・教員は原則小・中免許を併有 （免許の併有を促進）	・学校毎に校長 ・学校毎に教職員組織 （学校間の総合調整担当を任命、学校運営協議会の合同設置、校長の併任等、一貫教育を担保する組織運営上の措置を実施） ・教員は各学校種に対応した免許を保有
施設	・施設の一体・分離を問わず設置可能	・施設の一体・分離を問わず設置可能

5　小中一貫教育の取組実施状況（文科省実態調査）

・取組件数：市町村数 211 市町村（約１割）

総 件 数：1,130 件（小学校 2,284 件、中学校 1,140 校）

・実施予定または検討中：166 市町村（約３割）

・国及び市町村の状況を注視している市町村：450 市町村（約３割）

・実施総件数 1,130 件の内訳

施設一体型 148 件（13%）施設隣接型 59 件（５%）施設分離型 882 件（78%）

その他（併存など）41 件（４%）

6　教育課程の特例の実施状況

・独自の教科等の創設 72%

・英語教育・外国語教育の導入 82%

・指導内容の前倒し 18%

7　乗り入れ指導の実施

小学校においては学級担任制であったものが、中学校においては教科担任制となる。

小学校教員の免許は全教科に対応した免許であるが、中学校教員は特定の教科に対応したものである。小・中学校教職員間で指導の在り方をよく相談し、認識を共有した上で乗り入れ指導を行い、小学校高学年段階等から教科担任制を一部導入したり、小学校から進学した生徒を見守りながら指導する取り組みが広く行われている。

乗り入れ指導は、児童生徒の不安の軽減、いわゆる「中１ギャップ」の解消、教員の他校種に対する理解増進、意識変革等を図る観点から効果がある。

8　地域と共にある学校として

地域コミュニティの衰退、三世代同居の減少、共働きやひとり親世帯の増加といった様々な背景の中で、家庭や地域における子供の社会育成機能が弱まっているとの指摘がある。

また、少子化にともない、単独の小学校では十分な集団規模を確保できない場合が多くなっている。こうした中で、異学年交流を活発化させたり、多くの教師が児童生徒に関わる体制を確保したり、地域の教育力を積極的に学校へ取り入れることへのニーズが高まっている。

今後、９年間を通して学校と地域が連携して子ども達の成長を見守るという考えに立って、小中一貫教育を実施する学校を地域ぐるみで支える場を確保することが重要であり、こうしたことが学校を拠点とした活力ある地域コミュニティの形成に資するものとなる。

また、学校施設は、災害時の避難所となることや、地域の核施設となることを視野に入れ、他の公共施設との複合化を図り、地域住民と共同利用ができる施設となることが有効となる。

望ましい教育環境の実現に向けて

「学校のあり方 Q＆A集」

教育ヴィジョン

「南牧村の学校教育（試案）」

南牧村教育委員会

Ｑ１　今、南牧村において学校のあり方を検討する理由はなんですか。

Ａ１　全国的な教育事情と南牧村の教育事情の二つの面から考えられます。

①　最初に、教育をめぐる全国的な流れから説明します。少子化に伴い全国の自治体では、例外が無いほどに学校規模が縮小しています。学校規模というのは、一般的には学級の数とそれに伴う職員数のことをいいます。その学級の数は、子ども達の数によって決まります。国の法律（標準法）では、小学校１年生35名で１学級、小学校２年生以上中学３年生まで40名で１学級となります。小学校２年生で41名いれば２学級とカウントされ、国の財政措置を受けます。そして先生は、この学級数に応じて配置されます。これを国基準といいます。長い間、これは絶対守らなければならない基準でしたが、国の規制緩和により、各都道府県の裁量で弾力的に運用することが認められるようになりました。１学級の基準を35人にすることが認められ、長野県ではこれを採用しています。これを県基準と呼んでいます。注意することは、法律は変わっていませんので、国基準は変わっていないということです。したがって国の財政措置は国基準で算定され、学級が増えたことによる国の財政負担は増額されません。あくまでも県基準を設けたその県のやりくりでということになります。

次に、財政的な面から学校の運営を考えます。学校の運営にかかるお金は、国、県、市町村から支出されます。国からのお金は、施設建設（主に校舎）に係る半分、国基準に基づいて配置される教員の給料の三分の一負担が主なものです。交付金の中に、算定基準によって受け取るお金もありますが、純然たる教育費とは言えません。県からのお金は、基準に従って配置された教員給与の三分の二負担が主なものです。他に学校で行う特別な事業に対する補助金がありますが、大きい金額ではありません。市町村からのお金は、施設建設（校舎建設）の半分と一年間学校を維持していくためのランニングコスト（市町村費講師や用務員の給料も含まれます）が主なものです。施設の修繕などに大きなお金がかかっても、基本は市町村の自費負担ということになります。私たちは市町村から出る教育費しか見れませんので、校舎の改築でもしない限り、そんなに教育費がかかっていないように見えますが、その裏では国や県からたくさんのお金が出ているのです。学校が小さくなればなるほど、国や県の出す割合は大きくなります。経費節約のために、小さな学校には校長や教頭を置かないということはできません。学校の設置基準というものがあり、どうしても置かなければならないのです。しかも法律上の学校の設置者は市町村です。ですから国として学校規模が小さいことを理由にして統廃合を進めるということはできません。財政的な視点から学校のあり方の検討を求めることは当然です。国の予算が話題になるとき、教員数の削減が財務省から出されるのもそういった理由からです。

②　次に、南牧村の教育事情を考えてみましょう。

10数年前に小学校の統合が検討されたことがありました。理由は、少子化に伴う学校の再編というものでした。実現はしませんでしたが、教育委員会としては統合が望ましいという結論を出し、検討を続けるというものでした。当時、統合が実現すれば、

北小、南小を合わせるので各学年２学級になると考える人もいたようですが、国の基準でも南北合わせて学級数が２つになる学年は１つから３つでした。したがって教室の増築は、最大で４室で間に合いました。しかし、平成28年度からは南北合わせても県基準でも２学級になる学年はありません。つまり、小学校を１校にしても１学年１学級、合計６学級の学校規模ということです。これは経費面だけでみると、特別な工事などが無くても、両校で５千万円近くかかっている支出を半分に減らすことが可能になります。また、両校とも築30年余を過ぎている状況であり、かなりの維持管理費が必要になっています。何年後に建て替えができるかどうかも大きな課題となります。さらに、少子化対策について義務教育のハード面だけでなくソフト面をどうするかについて、市町村の責任が問われる時代になっているということです。従来の義務教育では、全国津々浦々どこでも義務教育は文科省の基準に従い、例外を作らない内容の教育が実施されてきました。それが日本の義務教育の水準を上げることに貢献してきた事実は否定できません。しかし、少子化対策と地方創生の方策として、子育てや学校教育も大きな部分を占めているということで、様々な施策や取組みがされるようになりました。「地域の子どもは地域で育てる」ことを基本とし、地域が学校教育に大きく関与することが奨励されるようになりました。学校教育の計画、実施、評価、学校支援の分野において地域住民の意思を反映しなくてはなりません。現在、村の三校では、それぞれ校長を中心とした学校運営が行われていますが、教育委員会としては、指導、承認、支援などの場面で関わりを強めていますが、教育内容については相談に乗る程度で、学校にお任せ状態です。「どういう教育内容を実施することで、どういう子供を育てるか」を明確にして、その教育内容と実施結果について村民の審判を受けるシステムが必要となります。このことは、学校の姿がどういう形であれ取り入れなければならないことですが、現在のような学校体制では難しいということです。

さらに、小学校の問題だけに言及してきましたが、少子化の影響は中学校教育において顕著に出てきます。平成26年度に生まれた子供たちが、中学校に入学するときは、中学校全体で49人となることが予想されます。当然、学級は各学年１学級、全体で３学級規模の学校になります。県から配置される教員は７名です。中学校では、国語、数学、社会、理科、音楽、体育、美術、家庭、技術、英語の10教科の授業があり、10教科の免許を持った教師が必要ということになります。また、各学科で１週間当たりの授業時数が大きく異なります。英語では、３学年全部で12時間になります。一方、音楽や美術は3.5時間です。英語と美術の２つの教員免許を持った先生がいれば都合がいいわけですが、ほとんどいません。結果として、特別な許可を得て免許の無い先生が教科を教えることが当たり前になってしまいます。少子化は、小学校の学校規模の問題であると同時に、中学校の学校運営の問題でもあるのです。

Ｑ２　学校のあり方を考える必要性については分かりましたが、学校のあり方としてどのような形が考えられますか。

Ａ２　義務教育のあり方を考える時期に来ていることは分かってもらえたと思いますが、「こういう形にする」という結論ありきではありません。文科省も法令(学校教育法、学校教育法施行令等)を変えたわけではありません。ただ従来のように文科省の例外のない指示によって学校を考える、ということはなくなったということです。いくつかある選択肢の中から設置者である市町村の責任で選択しなさいということです。どういう形になるにせよ地域住民の合意形成を図り、納得のいく形でこれからの学校の姿を提示する必要があります。そこで、村として考えられるハードとしての「学校のあり方」を挙げてみます。

① 従来の小学校２校、中学校１校体制を維持する。･･･今までと変わりません。子ども達の数が少なくなり、複式学級になったらという心配もありますが、長野県では４名以下の学年が続けてできない限り、その心配はありません。（国基準では８名）６学級規模の２つの学校が存続するということです。中学校は前述の教員配置の問題の他に、部活動や行事の運営に影響が出ます。

② ２つの小学校を統合し、小学校１、中学校１の体制にする。･･･統合しても学級の数は変わりませんので、北小の校舎を使うか、南小を使うか新しい校舎を建設するのかの判断が必要です。中学校は①と同じ。

③ ２つの小学校と１つの中学校を一か所に集め、小中一貫教育の義務教育学校又は小中一貫型学校の体制にする。･･･施設一体型の義務教育学校にするには、いずれかに施設を集中させる必要があります。どこに集中させるかによらず新増築の必要性が出てきます。

① と② については判断だけの問題です。

次に、小中一貫教育について説明をします。

Ｑ３　小中一貫教育において、「一貫」とはどういう意味ですか。

Ａ３　教育における一貫については、２つの意味があります。一つは、従来の小学校６年間と中学校３年間を合わせ、「９年間を通して教育を考える」という意味と、もう一つは、小学校と中学校が、「同じ歩調で教育にあたる」という意味です。

Ｑ４　「９年間を通して」について、具体的に説明してください。

Ａ４　小中学校で学習する内容や授業時間は、「学習指導要領」という国の基準で決められています。これは小学校、中学校共に日本中どこの学校も（私立学校を含め）同じです。独自の内容や授業時間、方法で教育活動をすることはできません。小中一貫教育を採用しても原則同じです。

小中一貫教育の採用でどこが違ってくるのかといえば、従来のように学年の区切りや小学校と中学校の区切りで学習を考えるのでなく、９年間のまとまりで考えるようになることが大きな違いです。これにより、各学年で学習する内容の関連性や系統性が、長期的な

視点で見えるようになります。例えば、算数、数学などは、足し算、引き算から中学校の関数まで、相互に関連しながら段々と積み上げられていく学習ですが、子ども達がある段階でつまずいた場合、本来ならその時に繰り返して学習し手当てしなければならないですが、小学校の期間の中で学習を完結することが優先してしまうので、不十分な理解のまま、先に進んでしまいます。中学校の数学の時間に、小学校の算数の内容を復習することはありますが、十分な時間をかけて扱うことはありません。結果として、つまずきが積み重なって高校の数学の授業で、小学校で学習した分数の勉強をするというようなことも出てきてしまいます。基礎となる学習をしっかり定着させるには、先を見通しての繰り返しの学習が大切になります。また、先を見通して指導することにより、先生も学習内容に軽重をつけて教えることもできます。さらに、小学校の高学年になれば、現在のように音楽、理科、家庭科以外のすべての教科を担任が教える学級担任制でなく、各教科の専門家である中学の先生が担当する教科担任制を小学校で採用することもできます。

このように小中一貫教育では、どの教科も小学校１年から中学３年までの９年間を通して学習を考えるようになります。小中一貫教育を採用しなくても小中間でつながった教育（小中連携教育）をしなければならないのですが、現状としては職員、施設等が全く違うので難しさがあります。

さらに小中一貫教育を採用することで、決められた教科学習の時間数や内容を基準としながらも、その学校独自に学習計画を設定することができます。例えば英語は、表現活動、基礎学力などを取り上げ、教科学習とは別に９年間を通して集中的な学習を設定することも可能です。これは、小中一貫教育を採用した学校に特例として認められるものです。

もう一つの特徴として、特色ある教育活動の設定があります。学校生活の中には、教科学習以外にも総合的な学習、学校行事、クラブ活動、部活動、体験活動、読書活動、児童会・生徒会等の児童・生徒が楽しみにし熱心に取り組んでいる活動があります。これらは、教科の学習に比べたら時間数は少ないけれど、教育的な視点からは必要不可欠な活動として考えらています。義務教育を実施するための基準を謳う「学習指導要領」の中では、「特別活動」という分野の中で取り上げられています。

小中一貫教育では、特別活動についても９年間を見通した計画の下に取り組まれます。９年間の中で、子ども達の成長を考え、発達段階に応じた活動を位置付けなくてはなりません。例を挙げてみます。小学校から中学校まで、地域に出かけて体験的な学習が盛んに行われています。（遠足なども含みます。）毎年、前年の実績を参考にして小学校では担任が、中学校では学年会が計画します。内容が前年と同じものもあれば、先生の考えで変わることもあります。小中一貫教育では、９年間を通した教育目標があり、その目標に沿って各学年の活動が考えられています。しかもその活動は、学年を追うごとに範囲の広がりと内容の深まりが期待できるように計画されます。一貫教育を採用する学校では、自分たちの地域に関する学習をテーマにして、９年間をかけて深めていく学習テーマを採用する学校が増えています。南牧村の三校でも、それぞれ「地域」に出かけ地域についての体験学習が行われていますが、小中で関連性を持たせたり、９年間を見通して共同で計画を立

てるということはありません。あくまで個々の学校の責任で計画されています。

特別活動であるスポーツについて考えてみましょう。小学校にクラブがあり、社会教育として子ども支援センターでのスポーツ活動があります。中学校には部活動があり、これらの活動はそれぞれに運営組織が違い、活動のねらいも違います。年齢に応じたスポーツということで、それはそれでよいことですが、文科省が提唱するように生涯スポーツの基盤づくり、体力作りや競技力の向上を考えた場合、義務教育の９年間を見通したスポーツ活動の取組みがあれば無駄もなくなり、効率的な活動ができるようになります。このようなシステムが一貫教育では考えやすくなります。

昔のように兄弟姉妹が多い中で育ち、地域でも子どもの活動や生活がたくさんあった時代には、学校は勉強を教える場所でしたが、少子化が進み地域での子ども達の生活がなくなっている現状では、教科の勉強だけでなく人間として生きていくさまざまな力を身に着ける場所としての機能も果たさなくてはなりません。小中の共同行事や異年齢構成による学習活動等を通して積極的に世代間を超えた交流を図り、このような社会の要請に応える学校のあり方のひとつとして、小中一貫教育が考えられています。

Ｑ５　小学校と中学校が「同じ歩調で」とは、どういうことですか。

Ａ５　小学校と中学校は同じ義務教育で各自治体の教育委員会の管理下にありますが、独立した組織です。教員は同じ職種ですが、仕事上での相互乗り入れはありません。会合や研修を一緒にすることはありますが、学校での教育活動はそれぞれの学校長が中心となり、それぞれの責任であたります。小学校を卒業した子ども達は中学校に入学するので、必要な情報交換は小中学校間で行いますが、基本的には、小学校の教育が完結した上に中学校の教育があるという考え方で教育活動を行っています。これは、協力しないということでなく、情報交換以外に教育活動の内容に立ち入って関わり合うというシステムがほとんどないということです。

小中一貫教育においても、学習内容において、小学校分野、中学校分野という区切りはあります。それは、内容的な区切りであって、年数の区切りではありません。９年間の一体化した教育活動をする学校として説明されますが、これはどの先生も自分が中学生の分野を担当するか、小学生の分野を担当するかに拘わらず、一つの組織として同じ目線、同じ思いで子ども達の成長に関わりながら教育活動をするということです。同一の教育理念と教育カリキュラムで教育が行われるということです。このことが「同じ歩調で」ということです。

また、小中一貫教育では、学校関係者だけでなく、保護者、地域、教育委員会、行政間でも「同じ歩調で」関わることが求められます。今までは「学校のことは学校に任せる」、「教育に金は出すが口は出さない」、「保護者、地域は学校への理解と支援、教育は先生に」といわれることが多くありました。これでは、小中一貫教育は成立しません。学校への関わりの多少はあっても、「学校づくり」の当事者であることが求められるのです。「学校運営委員会」の設置や「信州型コミュニティスクール」の取組みなどは、その流れの中にあ

ります。さらに、地方教育行政の関係法令が改正され、「地域の子どもは地域の責任で教育する」という流れがはっきりと打ち出されたことにより、これからはより一層、地域全体で地域にあった学校を作っていく方向を明確にする必要が出てきます。「同じ歩調で」という言葉の中には、地域の学校づくりの責任は、地域で担っていくという意味もあります。

Ｑ６　小中一貫教育にメリットがあるならば、全ての学校を小中一貫教育にすればいいと思いますが、そうならないのはなぜですか。

Ａ６　小中一貫教育については、平成20年代の当初は一部の先進地で取り入れた学校教育法に規定されていない「特例」の制度という扱いでした。当時唯一「小中一貫教育全国連絡協議会」という任意団体が実践発表と情報交換をしているだけでした。本格化するのは平成24年のことです。協議会の実践発表の中で、小中一貫教育の成果が盛んに言われ、文科省の審議会で小中一貫教育の検討が始まったことがきっかけでした。平成26年に小中一貫教育の法的な位置づけが必要であるという審議会の答申が出され、27年６月に最終決定されたという経緯があります。学校教育法の内容が改正されたわけでなく、従来の学校制度に小中一貫を行う「義務教育学校」が付け加えられたという形です。

戦後70年、義務教育は小学校６年間、中学校３年間、校舎も職員も別々というシステムでずっとやってきました。今回法令を改正したからといって、従来の６・３制制度がなくなったわけではありません。それぞれの市町村で、どの学校制度を選択するかの判断がいりますが、全ての市町村が「いいから」という理由で義務教育学校を選択するわけにはいきません。校舎を作り直すなどの費用が掛かることはもちろんですが、大規模な小学校、中学校を抱える市街地で義務教育学校を導入するとなると、児童生徒数が多くなり過ぎ、別々の形よりもかえって非効率になり、日々の学校生活を動かすだけで大変なことになります。そういう地域でも小学校と中学校の施設を分離した形で、緩い結びつきの一貫教育を実施したり、より相互の連携を生かした教育を推進していますが、これも無理があるようです。義務教育学校の設置は、小さいサイズの学校を抱える地域で、これからの学校のあり方を考える上で有効であるといえます。

Ｑ７　小中一貫教育は小さい規模の学校間で採用すると有効とはどういうことですか。

Ａ７　どの地域でも子どもの数が少なくなり、学校のあり方を考えなければならない時期に来ています。まず考えられるのは、学校の統廃合で対応するケースです。複数校で運営するよりも、経費の節約と子ども達の数の増加は当然望めます。しかし、子ども達の数が増えても学校規模は変わらないというケースがあります。１学年１学級規模の２つの学校が統合しても、そのままというケースです。２学級にするほど子ども達の数が増えないということです。学級の数が増えなければ、当然先生の数も増えません。北小と南小の統合は、このケースになります。統合しても学校規模が変わらなければ無理に統合することはなく、１人ひとりの子ども達に指導の手が入る今の体制でよいのではないかという意見も出てきます。２校体制で、お金がかかっても少ない子ども達に十分手を入れて教育するか、１校

体制で経費を削減しながら、少しでも１学級の児童数を多くして、切磋琢磨できる教育環境を作るかのどちらかを選択することになります。

中学校についても同じことが言えますが、南牧には１校しかないので現状のままということになります。現在の国の基準では、南牧中は１学年１学級ですが、県基準によって５学級になっています。（３学年は11名ですので２学級という訳にはいきません。）さらに、特別支援の学級を入れて７学級になります。そこで県から配置される教員の数は９名です。中学校の教科は10教科ですので、それぞれに専門の免許を持った先生が必要です。一人で複数の免許を持つ先生がいればいいですが、ほとんどの先生は１種類の免許しか持っていません。そこで、３名の村費の先生をお願いしています。先生の数からいえばこれで全ての教科の先生を配置できることになりますが、２つの問題があります。１点目は、数学と英語はコース別授業をしていることです。この教科は、１時間の授業の中に２コースの授業が行われるので、２名の先生が必要になります。２点目は、教科により１週間当たりの授業時間の違いが非常に大きいということです。１週29時間授業がある中で、音楽と美術は１時間しかありません。音楽の先生が担当する１週間の授業は５時間です。残りの24時間は、他の教科のお手伝いをするか、免許は無いのですが特別の許可を得て他の教科を担当するということになります。技術も家庭科も１週当たり２時間ですので、状況は同じです。今後、生徒数が20名程度になり１学級となった場合は、先生の配置はもっと困難になります。このことから分かるように、少子化で学校の内容、システムの両面で厳しくなるのは小学校よりも中学校なのです。

小中一貫教育では、この点をクリアし、教育効果を上げることが可能になります。それは、音楽や家庭科のように授業時間の少ない教科の先生が小中両方で授業を担当することです。例えば音楽の先生は、中学の３学級で４時間、小学校で12時間の授業をすれば合計１週当たり16時間の授業時数になります。このように、工夫次第でいろいろな教科でも可能になります。その結果、小学校の先生の授業が減り、教育活動に余裕が出てきます。免許の無い先生が教えたりすることも無くなり、どの先生も活躍できる学校体制が出来上がります。上手く機能している小中一貫校は小規模校が多く、教育内容の充実ばかりでなく、無駄のない学校体制づくりができています。村費講師を大勢採用している当村では、なおさら効果が見込めます。

Ｑ８　「課題の把握」が大切だということですが、教育委員会として、南牧村の子どもたちの教育上の「課題」をどのように捉えていますか。

Ａ８　一般に義務教育では自校の子ども達の課題は何かと考えて教育活動を展開しますので、「南牧の子どもたちの教育課題は○×△なので、□×▽に力を入れて取り組まれたい」というような形で、学校に指示を出すことはありません。寄せられた保護者や地域の方の意見・要望、あるいは教育委員が学校訪問などした感想をまとめて学校へ伝え、教育活動の参考にしてもらっているのが現状です。一昨年、村が実施した地域創生の村民アンケートに「教育委員会としての教育ヴィジョンが見えてこない」との指摘もありましたが、教育

委員会として南牧村の子ども達の「教育課題」として考えていることは、次の２つになります。

（教育課題）

1. 保育園のころから同じ集団で過ごすことの教育的なメリット、デメリットを見極め、少人数の中で自立し、生きる力を備えた子ども達を育む学校教育はどうしたらよいか。

教育の場で、少人数の人間関係が固定化すること=デメリットではありません。少人数の安定した人間関係の中で安心して幼少期を過ごすことは、どの子にとっても大切であります。周りの大人に守られ、激しい衝突の無い環境で育つことは、幼少期に人間関係の基礎を身に着ける上で必要なことです。

しかし、子ども達の成長に合わせ自分の周りにいる人々と接し、その中で多様な人間関係を経験することが、将来、社会的に自立する基礎を作るために必要となります。地域社会に子ども達の姿が無くなっている現在では、この部分を学校教育が担っているのです。ですから、小学校に入学してから学年が上がるにつれて、そのことを意識した教育活動が行われなければなりません。学校ではその視点から、少ない人数の中で多様な人間関係を作り、経験させようと取り組んでいますが、期待するような効果が上がりません。その理由として、「子ども達の人間関係の固定化は大人が考える以上に強く、崩すことは難しい」のです。さらに、固定化した人間関係は安定しているので、波風が立つことも少なく平和です。子ども達だけでなく大人達も、この状態を良しとしてしまいがちです。

このような人間関係は、小学校低学年ではあまり問題は生じません。しかし、自我の芽生えと同時に見え隠れしてきます。この子ども達の関係を必要に応じて意図的に作り替え、多様な関係を経験させようとしますが、少数の同じメンバーに慣れてしまうと、そのような教育的意図はなかなか通用しません。なぜならば、子ども達にとって長年慣れ親しんでいる人間関係は最良のものであり、新しい人間関係を構築する苦労が無いからです。保護者にとっても、自分の子どもが所属する集団の中で安定していることが第一で、敢えて今までの人間関係を壊すかもしれない新しい関係づくりには必要性を感じないのではないでしょうか。その結果、学校生活の中で子ども達の関係性や役割分担が固定してしまうのです。

学校教育の中で、「社会性の涵養」は、義務教育の目的の一つとして学校教育法で定められています。学校現場では、社会性の涵養のためにどのような教育活動を考えているかというと、多種多様な人間関係を経験することや子ども達自ら必要に応じて集団や組織をつくり上げることを通して学習することになっています。この「つくり上げる」という経験が大切になります。いろいろな人がいる中で、子ども達自身で集団を作り、組織を作ることは並大抵のことではありません。しかし、そういう苦労を通じて人と人との関わり方や、集団の中で自立する術を身に付けていくのです。幼少期にできた安定した人間関係にぬくぬくと浸っていることは、社会性の涵養や自立という面から考えると、非常に厳しいものがあるでしょう。

小中一貫教育では、異年齢集団での学習や活動をより多く取り入れられるので、そのような視点に立った教育活動が可能になると考えられます。

2. 表現力、コミュニケーション力が十分に身に付いていない。

南牧村の子ども達の音楽会の合唱発表や絵画などの美術作品を見ると、総じて、まじめに取り組み、精一杯の表現をしており、内容も素晴らしいものです。芸術的な表現能力が低いことはありません。中学生の意見発表などを聞いても、まとまった文章が書けて国語的な能力も低くありません。

学校の先生が言う「表現力、コミュニケーション能力が弱い」とは、子どもたち同士がお互いに関わりあって、意見を述べ合い学習を深めていくような力が弱い、ということです。人と人は、言葉を通して理解し合い、合意を形成する関係にあります。家族のように多くの言葉を交わすことなく成立する人間関係もありますが、相手に向かい言葉で表現し、また相手の表現する言葉を受け止めることがコミュニケーションの基本です。しかし①と関係しますが、対人関係の経験が少なく、固定化した人間関係の中では、お互いが言葉を使って分かりあうという必要性は低くなります。繰り返しになりますが、言葉を使わないで分かり合える家族のような人間関係は、居心地はいいですがコミュニケーション力は身に付きません。どうしたら知らない人の中で自分を表現するか、また、相手の言うことを理解するかの立場に立った時は、やはりコミュニケーション能力が身に付いているかが問題になります。このことに高校に行ってから初めて気づく子どもたちもいるのではないでしょうか。

小中一貫教育の中では、言葉の学習として「聞く、話す、読む、書く」について、発達段階に応じて９年間を通して計画するので、より明確にコミュニケーション能力を身に付ける活動が可能になります。

Ｑ９　南牧村で小中一貫教育を具体的に考えるとしたら、どんな教育内容になりますか。

Ａ９　その点を住民や関係者で詰めることが一番大切です。小中一貫教育を採用している自治体や学校では、教育構想の原案を校長や教頭など学校関係者が中心になって作成しています。しかし、小中一貫教育というのは、戦後続いた義務教育の形を大きく変える試みです。学校現場はその制度に慣れていません。教職員のアレルギー反応もあることでしょう。そこで、「こういう子ども達を育てるために、こういう教育を考える」という部分が関係者で共有されていないと実現は難しいということになります。長野県下では、徐々に取組みが進んでいます。

そこで、教育委員や学校関係者と「南牧村の学校教育（試案）」と、現在行われている教育活動を系統化する形の具体例として「南牧村の学校教育（内容面より）」の２つを作成しました。

南牧村の学校教育（試案）

1．教育目標　「ふるさと南牧村」

—南牧村で育ち、南牧村を創造する人づくり—

2．学校教育の重点

南牧村を知り、南牧村で学び、南牧村に貢献する教育

3．具体的な教育内容

（1）南牧村を知り、南牧村で学ぶ学習（ふるさと学習）

① 地域で豊かな体験学習

② 地域の教材を取り込んだ教科学習

③ 地域住民と協同する学習作り

（2）社会に貢献する人材を育てる学習Ⅰ（ことばの学習）

① 日本語で聞く、話す学習

② 日本語で読む、書く学習

③ 英語で聞く、話す学習

④ 英語で読む、書く学習

（3）社会に貢献する人材を育てる学習Ⅱ（基礎学習）

① 基礎学力をつける学習（算数、数学/漢字）

② 体力をつける学習

4．具体的な取組み

（1）３つの教育について９年間を見通した各学年に応じた内容と学習時間を設定する。

（2）教科、生活科、総合的な学習との関連に配慮し、活動のねらいと内容が学年をおって進化するような計画を立てる。

（3）行事も３つの学習に位置付け、９年間の教育の流れの中で考える。

（4）学校、教育委員会、地域（保護者・PTA 含む）で組織する学校運営協議会が推進の支援にあたる。

（5）教職員は、小中に関係なく、南牧村学校職員として各学年の子供たちに関わり、組織として一体感をもって教育活動にあたる。

5．「南牧村を知り、南牧村で学ぶ学習」（ふるさと学習）の展開例

１年ー南牧の自然を知る活動

２年ー南牧の自然を楽しむ活動

３年ー南牧の産業を知る活動
４年ー南牧の産物を生産する活動
５年ー南牧の良さを追求する活動
６年ー南牧の良さを伝え広げる活動
中１ー南牧を見つめなおす活動
中２ー南牧の地域に貢献する活動
中３ー南牧の村づくりに参画する活動

６．「社会に貢献する人材を育てる学習Ⅰ」（ことばの学習）の内容
・「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」の内容について、国語の教科や英語学習、さらに「ふるさと学習」と関連させ、９年間を見通して多面的な表現活動として焦点化した学習を展開する。

７．「社会に貢献する人材を育てる学習Ⅱ」（基礎学習）の内容
・９年間を見通し、算数・数学の計算練習、国語の漢字練習をドリル的に取り入れ、基礎学習の充実を図る。さらに基礎体力の増進のために日常的な体力作りを位置付ける。

８．実施にあたって
（１）学校職員、保護者、地域住民、教育委員会、村長部局を交えた運営委員会を作り、全体の運営にあたる。
（２）教科学習は、学習指導要領の標準を遵守し、「ふるさと学習」と関連付けられる教科は積極的に取り入れていく。

南牧村の学校教育（内容面から）

1　教育目標　「ふるさと南牧」

—南牧で育ち、南牧村を創造する人づくり—

2　学校教育の重点

南牧村を知り、南牧村で学び、社会に貢献する人材を育てる

3　目標達成に向けての三本柱

（1）南牧を知り、南牧で学ぶ学習（学習を通してふるさとを知る）

①地域での豊かな体験学習とする

②教科学習（理科、社会、家庭科等）に地域教材を取り込む

③学習の中に地域住民の参加を求める

④学校教育活動へ村行事を位置づける

（2）社会に貢献する人材を育てる学習Ⅰ

（ことばの学習を通してコミュニケーション能力を高める）

①日本語で聞く、話す学習

②日本語で読む、書く学習

③英語で聞く、話す学習

④英語で読む、書く学習

（3）社会に貢献する人材を育てる学習Ⅱ（体力、学力の基礎をつける）

①基礎学力の充実（算数・数学/漢字）

②基礎体力づくりと健康増進

・小学校のパワーアップタイムを位置づける

・小学校のクラブ活動を位置づける

・中学校の部活動を位置づける

4　教育内容の設定にあたって

（1）目標達成に向けて９年間を見通して三本柱を位置づけ、各学年に応じた学習内容と学習時間を設定する。

（2）教科、生活科、総合的な学習との関連に配慮し、学習内容については学年が進むにつれて深化・発展する学習計画をたてる。

（3）行事も三本柱と学習指導要領の内容との関連で考え、９年間の見通しの中で焦点化し、精選したものを位置づける。

（4）学習指導要領の「特例校」の指定を受けるなど、従来の教科学習の時間とは別に総合的な学習と特設の学習時間の中で教育活動の展開を考える。

5　教育の推進にあたって

（1）小学校の5年時より、可能な限り教科担任制を取り入れ、中学校の教職員による教科指導を実施する。

（2）連学年、異年齢集団活動を取り入れ、年長者が年少者を指導しながら学習を進める場面を取り入れる。

（3）学習指導要領による教科学習（教科書中心）、独自・自主教材を取り入れた教科学習、特例による学習の3種類の教育内容を組み合わせた学習活動を考える。

6　具体的な学習内容

（1）南牧を知り、南牧で学ぶ学習」（ふるさと学習）の展開例

下記に示した教科の学習目標に合わせ、南牧にこだわった内容の教育活動を展開する。生活科や総合学習の内容も同じ視点で考える。具体的に、小学校においては教科書の扱いには弾力性を持たせ、教科書記載とは別に学習指導要領の趣旨に沿った自主教材や学習資料を作成し、授業での活用を図れるようにする。また、中学校においては、教科書を専門的に扱う教科学習の中に組み入れることは極力避け、主に総合学習や行事の中に位置づけた学習として展開する。

○小1－南牧の自然を知る活動

生活科（102）－自分と身近な人々及び地域の場所、公共物との関わり。
地域の良さに気付き愛着が持てるようにする。自分と身近な動物や植物などの自然とのかかわり、身近な人々、社会及び自然に関する活動の楽しさを味わう。経験した活動の楽しさを様々な形で表現する。従来行われている飼育活動、栽培活動なども焦点化した形で位置づけを図る。

○小2－南牧の自然を楽しむ活動

生活科（102）－1年と同じ内容についてより発展深化させた形での学習の展開を図る。

○小3－南牧の農業や自然を調べる活動

社 会（70）－地域の産業、地域の地理的環境、人々の生活地域の社会事象を観察・調査

理 科（90）－身近にみられる動物・植物

総 合（70）－社会、理科の学習を膨らませて

○小4－南牧の産業を知る活動

社 会（90）－ 3年に同じ

理 科（105）－動物の活動や植物の成長と環境との関り
月・星の位置の変化、季節、気温、時間と関連付けて

総 合（70）－社会、理科の学習を膨らませて

○小５－高原野菜づくりを楽しむ活動

社 会（100）－環境の保全や自然災害の防止の重要性
統計などの基礎的資料を活用し、社会的事象を考える、調べたことを発表する

理 科（105）－植物の発芽から結実までの過程
流水の様子、天気の変化を条件、時間、水量、自然災害などに目を向けながら調べ、問題を計画的に追及する

家庭科（60）－日常生活に必要な知識、技能を身に付け、身近な生活に活用。
自分と家族との関わりを考えて、家庭生活をよりよくしようとする実践的な態度を育成する

総 合(70)－ 社会、理科、家庭科の学習を膨らませて

○小６－高原野菜を生かす活動

社 会（105）－日常生活における政治の働き。社会的な事象を具体的に調査、調べたことや考えたことを表現する

理 科（105）－生物と環境、土地のつくりと変化の様子

家庭科（55）－ ５年と同じ

総 合（70)－社会、理科、家庭科の学習を膨らませて

○中１－南牧をもっと知る活動

総 合（50）－資料館での学習、農業体験・森林体験学習

○中２－南牧の魅力を体験する活動

総 合（70）－職業体験学習、地域体験学習（自然、観光）

○中３－村づくりに参画する活動

総 合（70）－中学生議会、村を発信する学習
（今までの教育活動の取組を整理、系統づけ、新たに工夫を加えていく）

（２）「社会に貢献する人材を育てる学習Ｉ」（ことばの学習）の展開例

○小１－たくさん聞いて、たくさん話す活動

国 語（306）－国語の教科として

生 活（102）－集団づくりの中で

○小２－たくさん読んで、たくさん書く活動

国 語（315）－国語の教科として

生 活（102）－体験したことを記録し、発表しよう

○小３－感じたこと、考えたことを表現する活動/英語の音声に慣れる活動

国 語（245）－国語の教科として

外国語活動（35）－単語や簡単な会話を音で覚えよう

○小４－意見を交換し合う話し合いの活動/身近な英語の表現に慣れる活動

国 語（245）－国語の教科として

外国語活動（35）－簡単な日常会話を楽しもう

○小５－豊かに表現する活動Ⅰ/簡単な英文を読んだり、書いたりする活動

国 語（175）－国語の教科として

英 語（105）－英語の教科として

○小６－豊かに表現する活動Ⅱ/まとまりのある英文を読んだり、書いたりする活動

国 語（175）－国語の教科として

英 語（105）－英語の教科として

○中１－意見文を書く活動

○中２－身の回りのことをデベートの形で論じ合う活動

○中３－故郷を英語で発信する活動

中学校では「ふるさと学習」とも関連させ、９年間を見通して多面的な表現活動として教科や総合で焦点化した学習を展開する。

英語については、教科のねらいを明確にし、「聞く・話す・読む・書く」をバランスよく学習する。

（３）「社会に貢献する人材を育てる学習Ⅱ」（基礎の学習）の展開案

９年間を見通し、算数・数学の計算練習、国語の漢字練習をドリル的にとり入れ、基礎学習の充実を図る。更に、基礎体力の増進の為に日常的な体力づくりを位置づける。

○小１年～６年－朝のランニングと算数の計算ドリル、漢字ドリル

・時間の取り方については日課の中に組み込む

・自主教材、ドリル帳などの活用

・「テスト」「自己採点」「記録」→練習というパターンで

○中１～中３－毎朝のランニングと数学計算ドリル、漢字ドリル

・ランニングについては個人目標を設けて

・数学、漢字のドリルについては小学部と同様に

・朝の部活動は原則的にやらない

望ましい教育環境の実現に向けて

Ⅰ．南牧村で小中一貫教育を実施する意義

（1） 小中一貫教育を目指すことで、学校や児童生徒の保護者だけでなく、保育所や園児の保護者、行政、さらに住民全体が、生まれてから中学校卒業までの15年間を通して、この村で子育てする意味を深め、連続して切れ目のない子ども達への支援が続けられる。

（2） ふるさと学習を学び通して南牧村は一つだという意識を持ち、自分が育った村に誇りを持てる子供を育て、進学のため一旦この村を離れても、将来村に戻って、この村を創造できる人材を育むことができる。

Ⅱ．南牧村が目指す教育

（1）南牧村の良さを活かす自然環境や地域の特徴を活用した教育
「ふるさと南牧村」の本物の自然の楽しさ、厳しさを学び、「集中力」、「観察する力」、「我慢強さ、たくましさ」が身につく教育

（2）地域社会の核として、保育園、小学校で少人数を活かしたきめ細やかな学習と生活

（3） 9年間に勉強やスポーツなど自分が集中してできるものを見つける教育

（4） 9年間の集団の中で「自立心」、「責任感」、「思いやり」を培う教育

（5） 行政、学校、保護者、地域が協力して村全体で取り組む教育

○ 課題と対応

① 南牧村の良い教育資源を十分生かし切れていない･･･ふるさと学習の深化、新たな学びの機会の創造

② 学校のことは学校に任せておけばいい･･･地域が積極的に参画する学校運営へ

③ 子どもの遊び、学びの規模の縮小と社会性、人間関係の力を育む難しさ

④ 外国語教育、冬季のスキー・スケート、登山など独自の教育活動として展開する

⑤ 9年間をとおして多くの先生が関わる成長の記録を作成する

Ⅲ．学童期の育ちと環境

①学童期における望ましい教育環境

・多様な教育活動と学習形態が実施できる環境

・子ども同士の適度な競争や切磋琢磨する機会がある環境

・地域社会において多世代や多様な人々とつながりがある環境

②南牧村の未来を担う人材育成

・地域が学びの場となり、地域全体の教育力の向上や学校づくりが新たな地域づくりに結びつくように

・進学のため一旦村を離れても、将来村に戻って、この村を創造していくような人材を

育てる。

Ⅳ．南牧村らしい魅力ある学校づくりに向けて

○さらなる少子化の進行が予測される中、南牧村が目指す子ども達の姿を実現し、より良い学校教育を発展させ、その結果が地域全体によい影響をもたらすという観点から、新しい学校づくりに向けた環境整備について具体的に検討する。

○地域の多様な人々が互いに学び合うような地域全体の教育力の向上と、地域住民が主体的に学校運営に参画し、学校と地域が支え合うための環境整備を図る。

・学校施設の複合化を図る。

・学校施設の弾力的な運用により学校が大人の学びの場として連携する。

Ⅴ．まとめ

単に少子化に対応するためだけでなく少子化を肯定的に捉え、将来に夢と希望のある南牧村の子育てと教育を実現していくことが重要である。そのためには、地域の活力の向上、地域の教育力の向上と子ども達を支えるネットワークの充実が強く期待される。

南牧村教育委員会

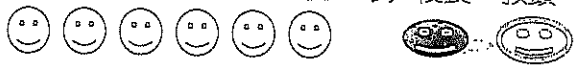
小中一貫教育（義務教育学校）とは

① 9年間の幅広い異年齢交流で、豊かな人間性を培います。
② 小中学校教員の協働による指導で学力の向上に努め、生徒指導を充実させます。
③ 小学校は6年間、中学校は3年間という基本的な枠組みの中で、9年間を見通した教育目標の明確化、系統立った教育活動を行います。
④ 地域と連携したふるさと学習などの特色ある教育活動や行事を取り入れ、地域と学校が一体となったふるさと南牧の教育を目指します。

□配置基準に基づく教員数□

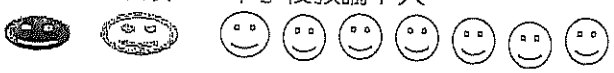
○小学校の教員数（全学年が1学級）

小学校教諭6人（学級担任のみ）校長　教頭



○南牧中学校

校長　教頭　中学校教諭7人



○小中一貫教育（義務教育学校）の教員数

小学校教諭7人（学級担任＋1人）　教頭　校長　教頭　中学校教諭7人

〈メリット〉

・校長1人分の配置枠を教諭として配置することで、教員1人分のゆとりが生まれます。この1人を適切に活用することで授業の準備や個別指導などの充実が図れます。
・中学校の音楽や美術、家庭科などの担当教員が小学校の指導に当たることも可能です。それにより時間の余裕ができた小学校教員が中学校の授業に入り、学習の個別指導に対応することもできます。
・同じ学校にいる教員が小学校から中学校卒業までを継続して指導することで、1人1人の生徒を良く知っている教員がいて、生徒指導や生徒の相談を充実させることができます。
・小学校の教員も理科や英語、体育などで中学校教員の専門的なアドバイスを受けて授業の準備をすることができます。
・小中学校の教員が一緒に授業の研究をしたり研修することで、それぞれの教育内容を共通理解し、小中の学習指導の継続性が高まります。

◇9学年が同じ校舎で学習する効果◇

・中学生に小学生の模範として行動しようとする自覚が生まれ、小学生には中学生に憧れる気持ちが芽生えます。
・中学生に低学年と接する機会ができることで、小さい子どもにやさしく接しようとする気持ちが生まれます。
・幅広い異年齢交流が、将来的に地域の繋がりを強くします。

☆特色ある教育活動☆

・全国の先行事例では、学校独自の特色ある教育活動の推進で成果が上がったとの報告がある。

例）合同行事：運動会、音楽会
例）部活動：小学校5年生から参加し、小学校教員も指導に当たることができ部員が増えた。
例）地域学習：総合的な学習を小中学校が継続したテーマで進め、地域に根差した学習が深まった。

◈小学校統合の課題と留意点◈

小学校統合の大きな課題として、「現状の小学校規模の良さと各校の特性の確保」、「児童の通学手段の安全の確保」、「現小学校区において小学校が果たしている地域コミュニティ機能の確保や地域の核としての小学校の存在」が上げられる。以下のアからエを「統合の課題と留意点」として整理した。

ア．小規模校・少人数の良さを継承した学校づくり

南牧村の小学校の統合では、将来の児童数の推移から見て複数学級となることは見込めない。基本的には、少人数の良さや特徴、現在の各校で大切にしてきた教育内容は、統合による新たな小学校における創意工夫の中で、十分に維持・継承していくことができると考える。統合後も小規模校の良さを生かした学校づくりを目指し、きめ細やかな個別指導と目の行き届く環境を一層充実させていくため、またある程度の学級規模を維持し、独自に教員採用する等の方策を前向きに検討していく。

イ．通学手段と安全確保のあり方

小学校の統合により遠距離通学となる児童に対しては、その負担を最小限にするとともに、円滑かつ安全に通学ができるように、通学手段としてのスクールバスの保障と充実が必要である。また、放課後、児童の過ごし方が多様になることから、児童クラブのある地域間を移動できるような仕組みを合わせて検討する必要がある。

ウ．現小学校区の地域とのつながり及び地域コミュニティの核としての小学校の存在

小学校は地域社会を形成してきた長い歴史の中で、教育施設としてだけでなく、地域コミュニティのシンボル的な役割を持つものであり、その意義は極めて大きい。したがって、これまでの地域とのつながりを生かしつつ、小学校と地域との関係性や、小学校の持つ地域コミュニティ機能を確保するための新しい仕組みづくりが不可欠となる。統合によって子どもたちの教育環境が向上することに加え、統合を契機として地域社会の新しい学びの拠点づくりや地域づくりという観点から、地域の活性化が図られることが重要である。例を次に挙げる。

◎住民と児童生徒の交流の場、歴史・伝統文化の伝承の場、社会福祉施設や健康づくり、公民館・図書館など生涯学習施設との複合化を図り住民の学びの場と地域づくりに結びつける。

エ．合意形成の重要性、統合の時期

「保護者意向調査」では、小学校の統合の検討は必要とする意向が多く伺えた。これは、小学校の規模縮小に対する保護者の危機感の表れであり、将来の姿が具体的にイメージできるものを示してほしいという意向でもある。一方、学校は教育施設としてだけでなく、地域コミュニティ施設や防災拠点などとして存在することから、統合の検討にあたっては、学校の持つ地域的意義に配慮し、保護者をはじめとする住民の理解と協力を得ていくことが必要であり、丁寧な合意形成を図っていくプロセスが求められる。

「学校づくり委員会」では、統合の時期と建設場所の検討をしなかった。これは、今後の少子化の推移や住民の合意形成の状況を十分に考慮しながら設置者（村長）が総合的に判断すべきと考えたからである。

資料

H29.8.28 佐久穂小・中学校視察に出された質問と回答

(Ans. 佐藤元校長、小澤係長)

○井出教育長:

Q. 教科担任制·乗り入れ授業について、1年度ごとに重点目標が違うのはなぜか？

Ans. 毎年教員の異動があり、その年により教員の考え方、免許の違いがある。
家庭科、算数、理科、体育を行っているが、基本的には学校長の考え方に任せている。
中学の正規教員による実施は難しいので、講師（県費・町費）により実施している。
（教科担任制と言っているが、実際は乗り入れ授業やTT指導のこと。【確認済】）

○新海一禎委員

Q1. 学年の区分け、例えば 4-3-2 がよいシステムだと思う。義務教育学校でしかできないと思っていたが、小中一貫型でもできるのか？建設に当たって、いろいろな対応ができ得るレイアウトにしていきたい。

Ans. 施設一体型の小中一貫教育であればやりやすい。

Q2.中学生の精神年齢について、小中一貫だと中学生が幼稚化？高1ギャップ？

Ans. 小学生が幼いまま中学生になる（小6が成長しない）との意見もあったが、小6で卒業式・中1で入学式、児童会・生徒会の別、制服等の切り替えなどがあり、小学校と中学校は別の物。高校での挫折も聞いていない。

Q3. 部活動に5·6·7年のカテゴリー

Ans. 部活動は完全に中1からでないと参加できない。体験、憧れ、興味はあるだろうが。
但し小学生時からの競技経験は明らかに有利である。

○江川尚友委員

Q. 佐久穂町は今後、義務教育学校へ移行するのか？

Ans. 現状継続であろうと予測する。義務教育学校は教員の負担増の問題や免許制度の課題がある。義務教育学校については信濃小中を参照されたい。

○林崇介副会長

Q. 地域における学校サポートの様子を伺いたい。

Ans. 学校応援団を結成（１６０人。登下校の安全見守り、本の読み聞かせ、登山等行事随行、学習支援など）
【地域の力が一つになって、自分たちの学校を担う・育てるの意識が結集した】

補足（小澤係長）：統合後３年間加配教員の配置を受け、教員全体が各校で摺合せ等を行った。多かった課題；通学手段（スクールバス）運行面の細かい部分

○上村和加子委員

Q. 建設地決定の経過は？

Ans. 学校づくり委員会で場所（茂来館付近）を答申（提言）。
その後、行政サイドが茂来館付近での課題があることから佐久中学校敷地に変更する決定をした。

○今井澄江委員

Q. スクールバス通学の最長時間は？

Ans. 概ね 30 分

Q. 小中一貫教育の良かった点、たいへんだった点は？

Ans. 小学校の統合に子ども達が馴染めるか、中学生と一緒にいられるのか、心配だった。
統合前に、全教員による教育計画づくり、合同行事の開催、同じテスト、一緒に遊ぶ、部活の合同練習、小中一貫だよりの月２回発行、同じ制服、同じ校歌、、、

（まとめ）・統合される学校、新しい小中一貫教育に対し保護者からの苦情・クレーム　・・・無し
・児童、生徒の様子は？　小中学生が一緒にいることでのトラブル　・・・無し
・小→中への切り替えができない、いじめが継続するなど保護者の心配　・・・無し

↓

それぞれが自覚を持ちながら、それぞれがいい関係で存在できている

資料1

学校建設に充当可能と思われる財源について

【負担金】

○小中学校等の統合校舎等の新増築

趣　　旨：公立の小学校、中学校を適正な規模に統合しようとすることに伴って必要となり、又は統合したことに伴って必要となった校舎又は屋内運動場新築又は増築に要する経費の一部を国が負担することにより、これらの学校の施設の整備を促進し、その教育の円滑な実施を確保する。

負 担 率：1／2

【交付金】

○へき地教職員住宅等

趣　　旨：へき地教職員住宅、へき地集会室及びへき地寄宿舎の新増築に要する経費の一部を国庫補助することにより、へき地における義務教育の円滑な実施及び教育の水準の向上を図る。

算定割合：1／2

○屋外教育環境施設の整備

趣　　旨：子ども達の最も身近にある学校の屋外環境を様々な体験活動の場として活用し、たくましく心豊かな子ども達を育成するため、屋外教育環境の一体的な整備充実を図る。

算定割合：1／3

○木の教育環境整備

趣　　旨：我が国の伝統的な建築材料である木材を利用した温かみと潤いのある教育環境の中で、たくましく心豊かな児童生徒を育成するため、木の教育環境を整備する。

算定割合：1／3

○太陽光発電等導入事業

趣　　旨：太陽光発電設備、風力発電設備、若しくは太陽熱利用設備、又は蓄電池を設置する際に必要な経費の一部を国庫補助し、地域の実情に応じた地球温暖化対策の推進や環境教育への活用を図る。

算定割合：1／2

【地方債】

○教育・福祉施設等整備事業（学校教育施設等整備事業）

対象事業：義務教育諸学校の校舎、屋内運動場、水泳プール、給食施設の新増改築事業

充当率：75～90%

交付税措置率：7.5%～60%

※事業内容によっては教育・福祉施設等整備事業（一般補助施設整備等事業）の対象となり、この際の充当率は75%

交付税措置なし

○辺地対策事業債

対象事業：スクールバス、教職員住宅、学校給食施設・設備の新増改築事業

充当率：100%（辺地区域外の割り落としあり）

交付税措置率：80%

資料2

A．施設一体型小中学校の施設配置の特色

①小中が共同利用しているケースが多い（学校規模により程度が異なる）

昇降口・校長室・職員室・図書室・音楽室・理科室・図工室・家庭科室・コンピュータ室・放送室・会議室・グラウンド・体育館（バスケットゴールなどの調整が必要）・プール（深さの調整が必要）（トイレの便器、机（椅子）などは高さ等の発達段階に応じた配慮が必要）

②新たに追加することが多いスペース

異学年交流スペース・地域（保護者）交流スペース・多目的スペース（教室）・ランチルーム

B. 地域と共にある学校施設の整備

①保護者や地域住民との連携を進めるための活動の拠点づくり

・ロビーや地域交流スペースにおいて、談話・休憩等のための空間スペースを計画

・防犯対策を講じ安全性を確保した上で、地域に開放する施設や部分をゾーニングし、地域住民と協同利用できる施設として計画する

・旧校舎の写真や資料等を保存するための歴史コーナーを計画する

②他の施設との複合化

・放課後を豊かに過ごす施設（自習スペース、放課後学童クラブなど）

・生涯学習関連施設（図書館・公民館など）

・一般健康（娯楽）施設との併設（プール、フィットネス etc）

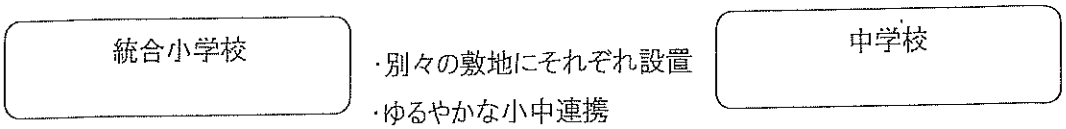
【参考】既存小・中学校の敷地面積　（単位：㎡）

北小	南小	中学校
28,521	30,935	20,110

※建物敷地+運動場+その他敷地（教職員寮含む）

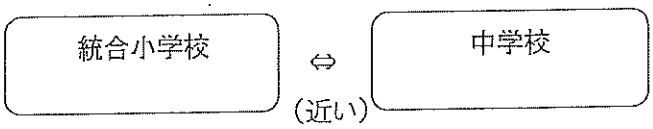
南牧村における小中一貫教育の姿

1．施設分離型



・別々の敷地にそれぞれ設置
・ゆるやかな小中連携
例）現在のいずれかの小学校と中学校に設置

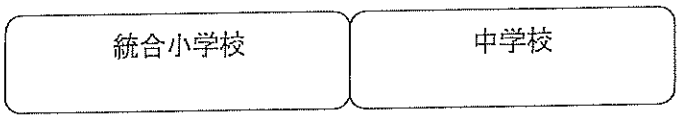
2．施設隣接型



・同一敷地あるいは隣接する敷地にそれぞれ設置
・限定的な小中一貫教育または小中連携

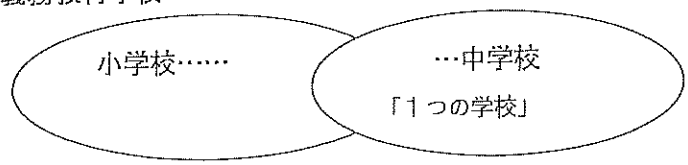
3．施設一体型

① 小中一貫型小・中学校



・同一敷地
・9 年間一貫した教育目標、系統性の確保
・小・中別組織による学校運営
（将来、義務教育学校に移行することも可能）

② 義務教育学校



・同一敷地
・9 年間一貫した教育目標、系統性の確保
・1つの組織、1 人の校長による学校運営
・乗り入れ授業、教科担任制、学年段階の区割りなど柔軟に実施できる

③建設地、建設時期の協議

・建設候補地としては　①北小　②南小　③中学校　④新しく用地を取得する

・建設の時期は　①可能な限り早く　②児童数が減少するのを見極めて

☆候補地それぞれのいい点、悪い点★

①北小

☆いい点：比較的温暖、駅・役場・郵便局が近い

★悪い点：敷地が狭い、西側が高い山林で造成が困難、すでに変形地である

②南小

☆いい点：平坦地、敷地が広い、雄大な八ヶ岳が見れる、ショートスケート場が近い、徒歩通学の児童が多い

★悪い点：冬季の厳しい自然環境、駅・役場・郵便局などが遠い、教職員は佐久地方からの通勤が困難

③中学

☆いい点：山麓に囲まれ静かで穏やかな気候

★悪い点；敷地が狭い、北・東・西側が山林で造成が必要、高低差がある変形地形

④新しく用地を取得する

☆いい点：理想的な施設設計ができる

★悪い点：場所によっては用地取得までに長い期間や高額な取得費用が必要

学校建設候補地の課題

1．南小

・既存体育館の取り壊し or 再利用の可否

・教職員寮等の建設用地の確保

・工事中の仮設校舎設置 or 完成まで北小か

2．海ノ口／湊地区

・私有地の買収（地権者 24 名）、建物買収（1 件）

・道路、用水路付替え、盛土造成

・農業振興地域の指定解除（1 年程度）

3．中学校

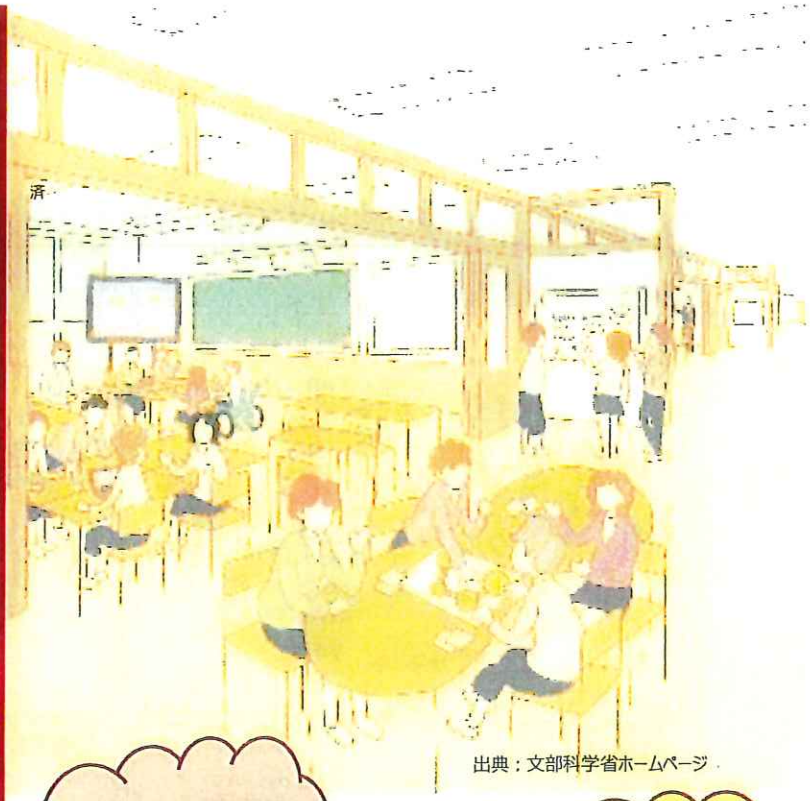
・山地の造成工事

・用地買収（3 件）建物買収（1 件）

南牧村の学校教育や新しい学校について保護者・村民の皆様と一緒に考えていきたい！だれでも参加できるワークショップのご案内です

これからの南牧村の学校

～みんなで自由に話そう～



出典：文部科学省ホームページ

3回シリーズ

~~第1回7月24日（月）18:30～~~ 済

第2回9月20日（水）18:30～

第3回11月25日（土）14:00～

会場　南牧村中央公民館

大会議室

個性を伸ばしてもらいたい

人数が少なくなってきて心配

子どもは卒業したけど話し合いたい

村の将来の事を一緒に考えたい

小中で9年間を通した教育ができるといい

ワークショップ内容

☆これからの学校像
　～どんなことを大事に考えたらいいの～

○学びの場としての学校
○子どもの生活の場としての学校
○村民が集える場　○安全面　○環境面

☆新しい学校の形態
　～今はどんな形の学校があるの？～

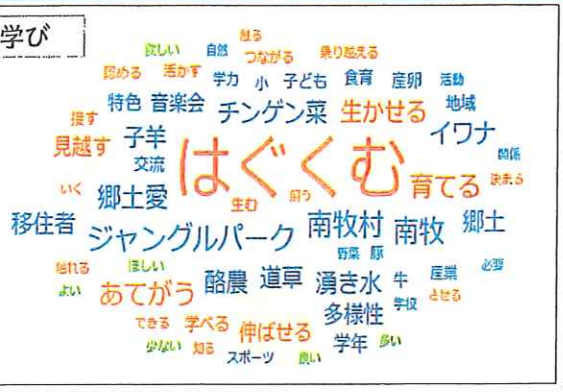
毎回参加も、途中からの参加も可能です。
電話申し込み：南牧村教育委員会
0267－96－2104
スマートフォン・パソコン両方から申し込み可能です。

スマートフォンからの申し込みはこちらから

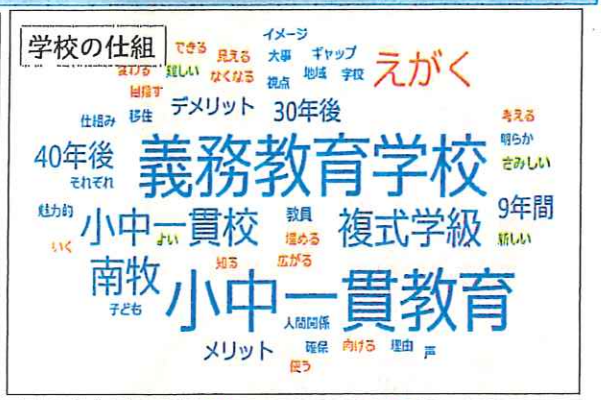
南牧村教育委員会では、長年に渡り南牧村の課題になっている小・中学校の在り方を検討してきました。現在はICTの導入・令和の日本型学校教育の構築等、今までの学校像から大きく変化しています。これから南牧村で育つ子どもたちにとって、南牧村の教育はどうあったらよいか、新しい学校像を皆様と探っていきたいと思います。学校は村民皆様の大切な教育施設です。この機会に村の学校教育についてお考えを聞かせてください。　（南牧村教育長　髙見澤　岡治）

7月24日に行った第1回ワークショップに出された意見を「ワードクラウド」でまとめてみました。

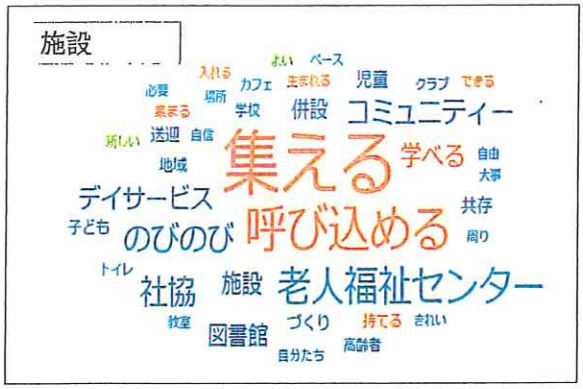
学び



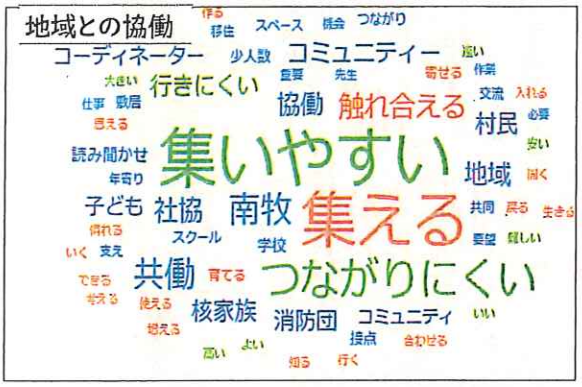
学校の仕組



施設



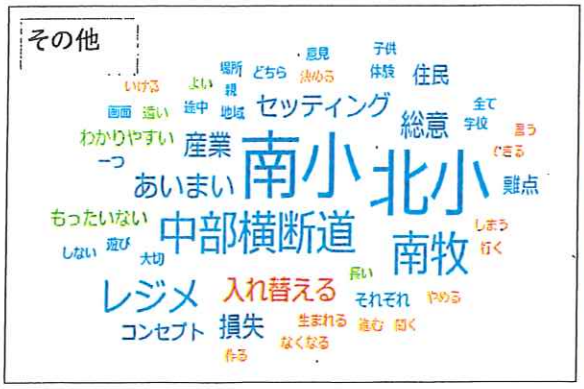
地域との協働



環境・安全

教職員

その他



第2回ワークショップの内容

☆ご質問の多かった「義務教育学校のメリット・デメリット」について教育委員会からご説明します。

☆特にテーマは決めませんが、第1回で出されたワードから、これからの南牧村の学校像をご自由に語ってください。

南牧村の学校教育や新しい学校について保護者・村民の皆様と一緒に考えていきたい！だれでも参加できるワークショップのご案内です

これからの南牧村の学校

～みんなで自由に話そう～

3回シリーズ

~~第1回7月24日（月）18:30～~~ 済

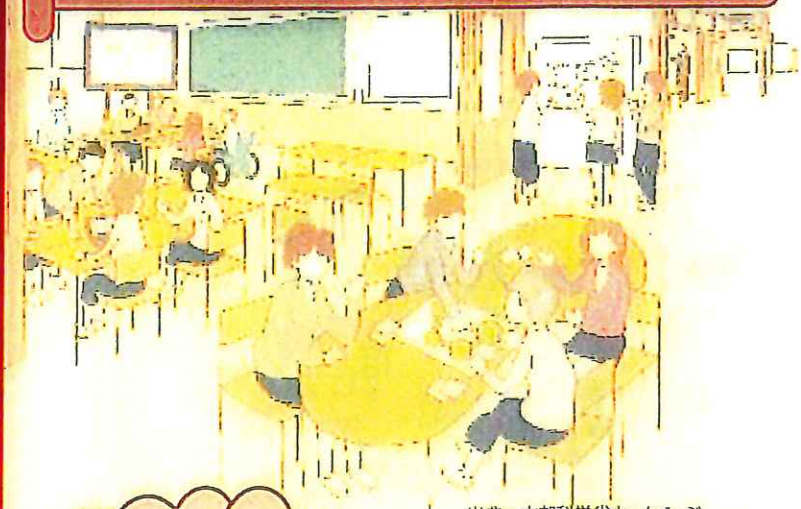
~~第2回9月20日（水）18:30～~~ 済

第3回11月25日（土）14:00～

会場　南牧村中央公民館

大会議室

【ウクライナ支援】ウクライナのダンサーによる民族舞踊観賞会（13：15～）をワークショップ前に開催します。どなたでも鑑賞いただけますのでお出かけください。



出典：文部科学省ホームページ

個性を伸ばしてもらいたい

人数が少なくなってきて心配

子どもは卒業したけど話し合いたい

村の将来の事を一緒に考えたい

小中で9年間を通した教育ができるといい

ワークショップ内容

☆これからの学校像
～どんなことを大事に考えたらいいの～

○学びの場としての学校
○子どもの生活の場としての学校
○村民が集える場　○安全面　○環境面

☆新しい学校の形態
～今はどんな形の学校があるの？～

毎回参加も、途中からの参加も可能です。
電話申し込み：南牧村教育委員会
0267－96－2104
スマートフォン・パソコン両方から申し込み可能です。

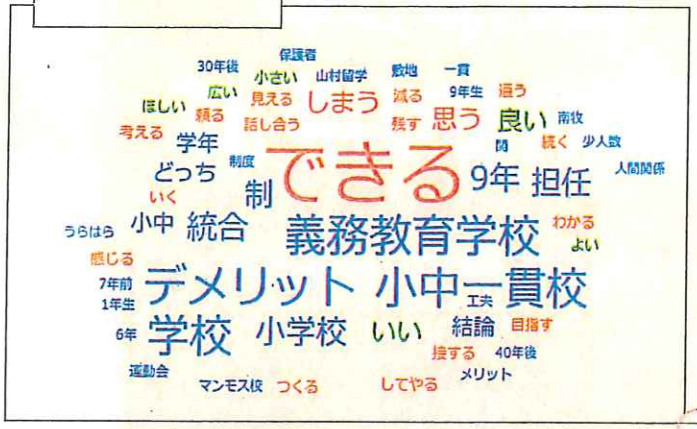
スマートフォンからの申し込みはこちらから

南牧村教育委員会では、長年に渡り南牧村の課題になっている小・中学校の在り方を検討してきました。現在はICTの導入・令和の日本型学校教育の構築等、今までの学校像から大きく変化しています。これから南牧村で育つ子どもたちにとって、南牧村の教育はどうあったらよいか、新しい学校像を皆様と探っていきたいと思います。学校は村民皆様の大切な教育施設です。この機会に村の学校教育についてお考えを聞かせてください。　（南牧村教育長　髙見澤　岡治）

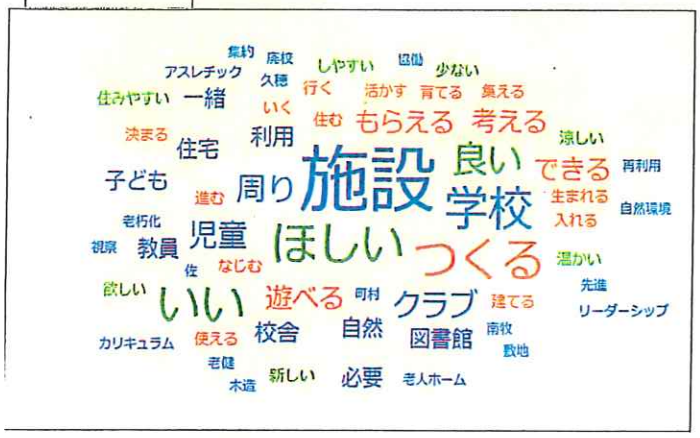
9月20日に行った第２回ワークショップに出された意見を「ワードクラウド」でまとめてみました。

学び

学校の仕組み



施設



地域との協働

環境・安全

その他

第３回ワークショップの内容

☆アンケートには、これから学校にあがる若い人たちの考えも聞いてほしいというご意見が多数ありました。第３回は土曜日の昼間に開催します。お時間がありましたら、ご参加ください。

報告

これからの南牧村の学校

～みんなで自由に話そう まとめ～

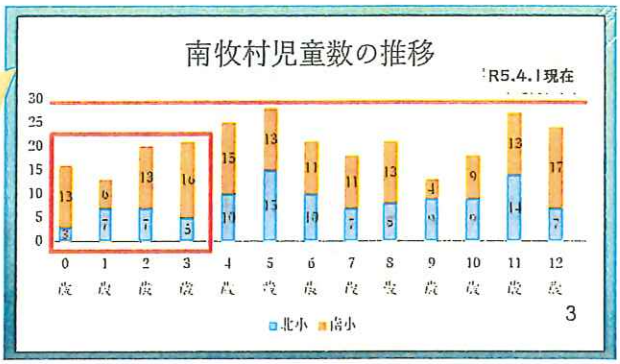
多くの村民の皆様にワークショップに参加していただきありがとうございました。

ワークショップ内容

☆これからの学校像
～どんなことを大事に考えたらいいの？～
○学びの場としての学校
○子どもの生活の場としての学校
○村民が集える場　○安全面　○環境面
☆新しい学校の形態
～今はどんな形の学校があるの？～

ワークショップでは、このようなことを自由に話してもらいました。（内容については裏面をご覧ください）

南牧村では、今後子どもの数が減っていきます。中学も単級になると職員配置に支障が出てきます



このような様々な課題はありますが、未来を担う子どものために、何を大切にしてどのようにしていくのかを考えていきたい。

「村民が集える複合型義務教育学校」の実現に向けて、さらに研究を進めてまいります。

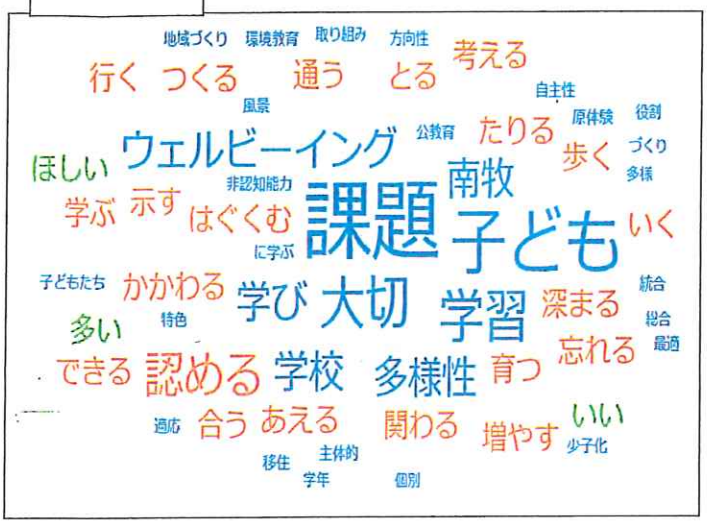
今後の予定
未来の学校施設づくりを支援する『CO-SHA Platform』の支援を受け、「CO-SHA アドバイザー」に専門的な相談をしながら、進めていきます。
専門家を招いての講演会・ワークショップ
先進校への視察　などを計画していきます。

討論をとおして、参加者の皆様の南牧村の学校に寄せる期待に触れることができました。地域における位置づけをはっきりさせてほしい、特色ある教育を通しての魅力ある村の創造を期待するなど、郷土への夢と希望の大きさを知ることができました。「これからの学校」の夢を実現できますよう、村民の皆様とともに研究を重ねて、より具体的な学校像を求めてまいりますのでご協力をお願いします。

（南牧村教育長　髙見澤　岡治）

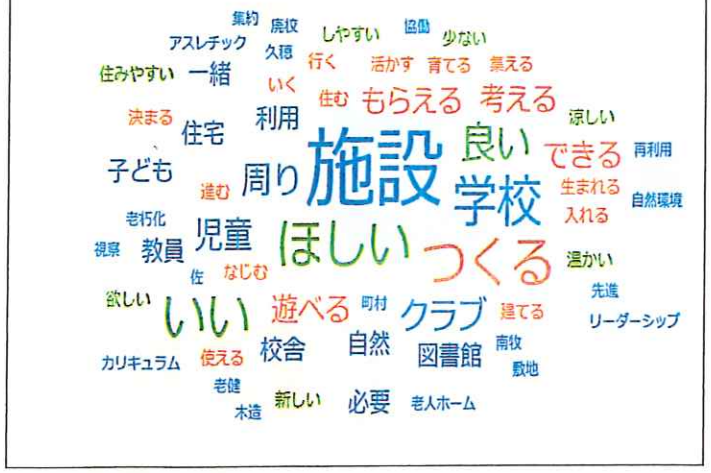
11月25日に行った第３回ワークショップに出された意見を「ワードクラウド」でまとめてみました。

学び

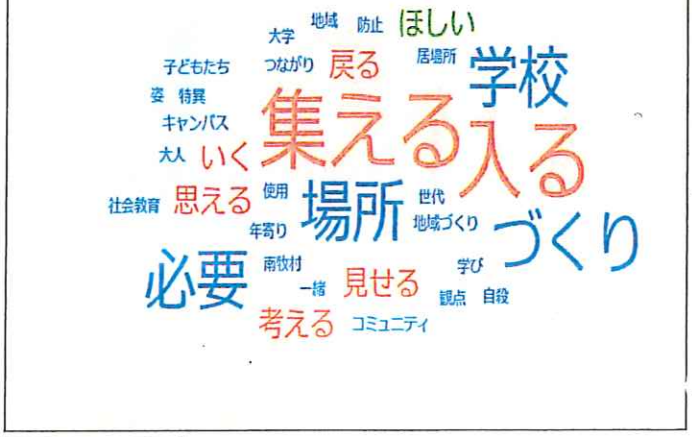


学校の仕組み

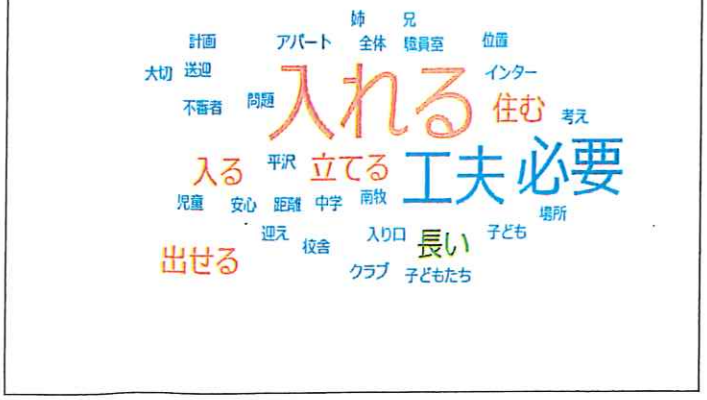
施設



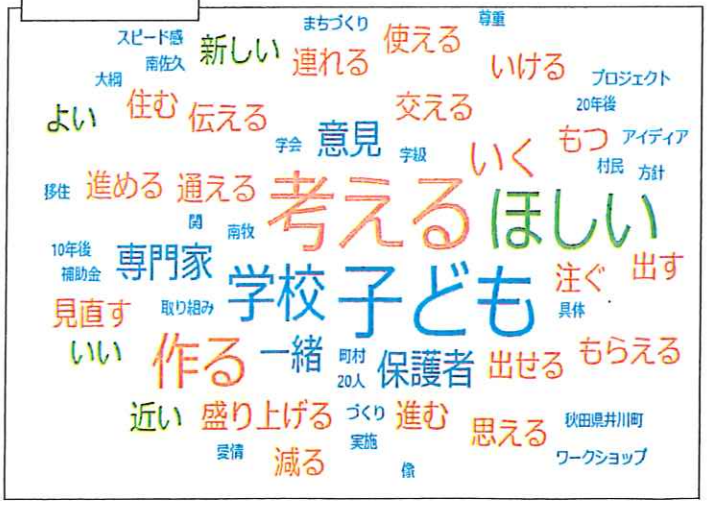
地域との協働



環境・安全



その他



表紙より

学校統合に係る懇談会について

５月20日から小中学校ごとに学校統合にかかる保護者懇談会が開催されました。また、翌週27日からは村内の各地区公民館へ会場を設け、地域住民の皆様を対象にした学校統合・地区懇談会も開かれています。懇談会へは総勢224名の方にご参加いただいて、たくさんのご意見を頂戴しています。今回、この誌面で懇談会の村長挨拶と、教育委員会からの説明内容を掲載します。

「みんなのみなみまき（８月号）」では懇談会で頂いた保護者・住民の皆様からのご意見を掲載する予定です。

学校統合に係る地区懇談会　挨拶

村長　有坂 良人

本日は、学校統合に向けた地区懇談会を開催したところ、夕飯時のお忙しところ、大勢の皆様にご参加いただき、感謝申し上げます。私が村長に就任してから早半年が過ぎようとしています。これまでの６か月間は、選挙など機会を通じて、村民の皆様へお話させていただいた施策を実現させるべく、がむしゃらに駆けて参りました。そうした中にあっても、まだまだ、掲げた施策が実現しないものもあり、私は今後ともそういった施策の実現に真摯に取り組んで参りたいと思っています。

さて、本日、お集まりの地域の皆様が関心をもって頂いている施策のひとつに「学校統合」がございます。私も、「学校統合」は南牧村の将来を展望するときに取り組まなければならないと思っている施策のひとつです。「学校統合」は平成16年頃、市町村合併の論議以降に一度、熱く議論されました。しかし、その時は村内で学校統合についての意見がまとまらず、棚上げとなってしまいました。今から８年前の平成28年５月に「学校づくり委員会」が立ち上げられ、都合９回の会議を経て、その年の12月に「学校づくり委員会」から当時の大村村長へ答申されました。

答申内容は、

【1】　**小中一貫教育を目指すこと**

【2】　**統合にあたっては、新しい学校施設を建設すること**

【3】　**建設場所は最も適切な場所を選定すること**

です。

そして、翌年5月に「小中学校建設検討委員会」が設置され、前年の答申書を踏まえて、更なる検討が行われました。

建設検討委員会はその年の12月までに8回の会議が行われて、中間報告書を大村村長へ提出しています。

中間報告書では、建設候補地を南小学校敷地と中学校敷地周辺に絞られています。

その後、建設検討委員会では候補地を1か所に絞り切れず、平成30年3月、10回目の建設検討委員会で解散する道を辿ります。現在も最終的な結論を得ていません。

南牧村も他の市町村と同じように少子化や人口減少が進んでいます。世界に目を向ければ、AI（人工知能）の出現によって、私たちの生活スタイルや、仕事などが急速に変わりつつあり、国内を見渡しても先行きが不透明で不確実な社会となっています。20年後、30年後の日本の社会はどのようになっているでしょうか!?私たちの南牧村はどうなっているでしょうか!?大変革期を迎えた今、私は次の時代へ残すべきは人材ではないかと考えています。私たちの子どもや、孫です。これまでの「学校統合」議論では学校の形や学校建設の場所が最初に論じられてしまい、その先へ進むことができませんでした。私は「学校統合」を考えるとき、初めに考えるべきは【20年後、30年後の子どもの未来像】だと思っています。目指すべき子どもの未来像があって、建設する学校の形が定まってくると思うのです。私たちは「学校建設」において、大黒柱となるような理念・理想を掲げるべきです。

それが、【子どもの未来像】です。

私が願う南牧村の「子どもの未来像」は『次の時代を生き抜くことのできる子ども』です。

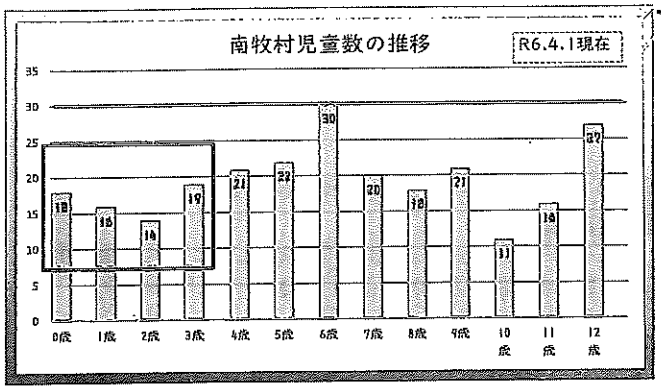
そのため、私が願う南牧村の目指すべき「子どもの未来像」をテーマにして、教育委員会で議論していただきました。

私からの挨拶の後、教育委員会での議論の内容を説明させていただいてから、ご参加いただいている皆様と懇談させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

学校統合保護者・地区懇談会 内容

教育長の今井です。

私から今回の懇談会に先立ちまして、学校統合についての直近の状況と経過を申し上げ、村長から示されました南牧村の「子どもの未来像」について、教育委員会で議論した内容をお話させていただきます。



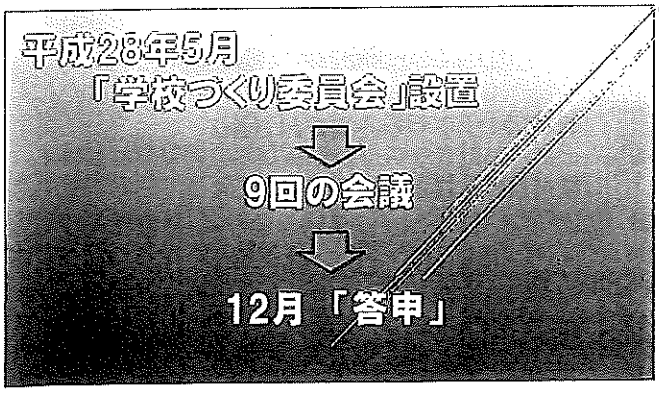
1 南牧村の児童、生徒数の推移

現在の南牧村の児童・生徒は、令和６年４月１日現在、北小学校54名、南小学校61名、中学校73名の総勢188名です。

南牧村の子どもの数は減っています。

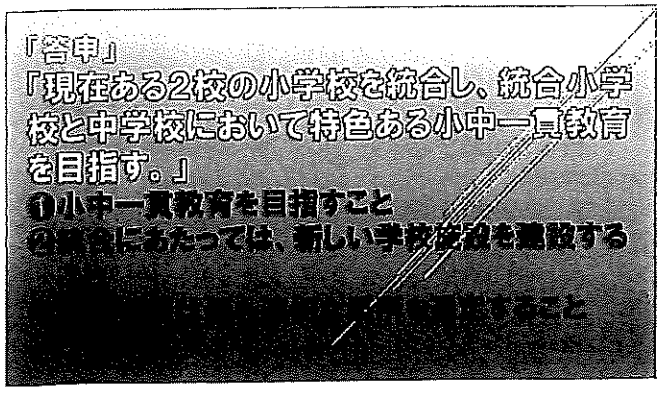
左図は令和６年４月１日現在、０歳から12歳までの子どもの数を表したグラフです。令和８年度の入学者は、北小、南小２校合わせても21人、その後を20人を切る年が多くなります。

中学校では、「こまやかプラン」という特区申請で、31人以上の生徒で２学級にすることができますが、昨年の中学３年生を最後に、今後30人を超えることはなくなる可能性が高くなります。



2 今までの経過

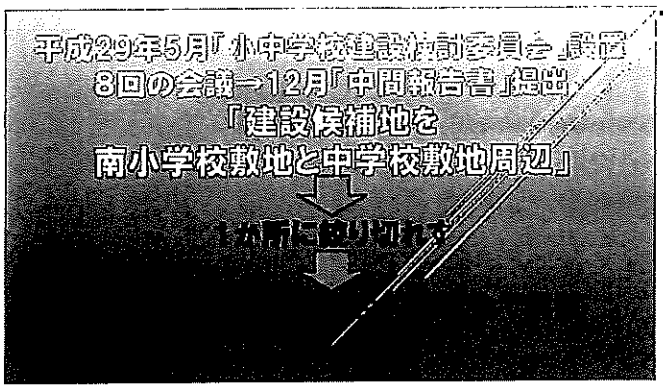
平成28年５月に「学校づくり委員会」が設置され、その後、９回の会議を経て、12月に「答申」が村長へ提出されました。



3 答申内容

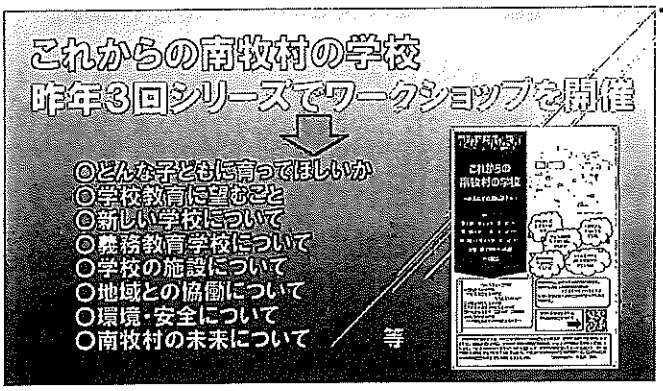
「現在ある２校の小学校を統合し、統合小学校と中学校において特色ある小中一貫教育を目指す」

❶小中一貫教育を目指すこと
❷統合にあたっては、新しい学校施設を建設すること
❸建設場所は最も適切な場所を選定すること



4 小中学校建設検討委員会　中間報告書

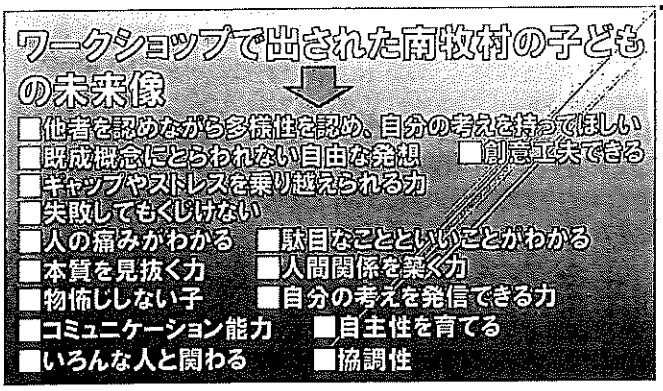
平成29年５月に「小中学校建設検討委員会」を設置し８回の会議を経て、12月に「建設候補地を南小学校敷地と中学校敷地周辺」とする中間報告書を村長に提出しました。しかし、候補地を１か所に絞り切れず、平成30年３月、10回目の同委員会で解散となりました。



5 最近の学校統合についての経過

昨年度、村民の有志の方に集っていただき、３回に渡って、「これからの南牧村の学校」というタイトルでワークショップを行いました。

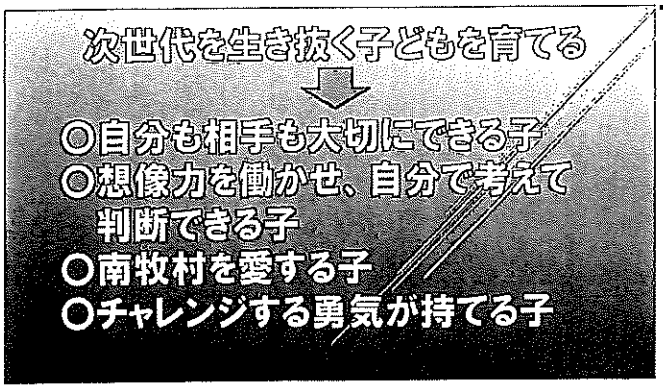
ワークショップでは、「どんな子どもに育ってほしいか」「学校教育に望むこと」「新しい学校について」「義務教育学校について」「学校の施設について」などが話し合われました。



6 ワークショップで出された南牧村の子どもの未来像

ワークショップでは「南牧村の子どもの未来像」が話し合われており、次のような意見が出されました。

他者を認めながら多様性を認めて、自分の考えを持ってほしい　既成概念にとらわれない自由な発想　創意工夫できる　ギャップやストレスを乗り越えられる力　失敗してもくじけない　人の痛みがわかる　ダメなことといいことがわかる　本質を見抜く力　人間関係を築く力　物怖じしない子　自分の考えを発信できる力　コミュニケーション能力　自主性を育てる　いろんな人と関わる　協調性



7 南牧村の「子どもの未来像」（案）

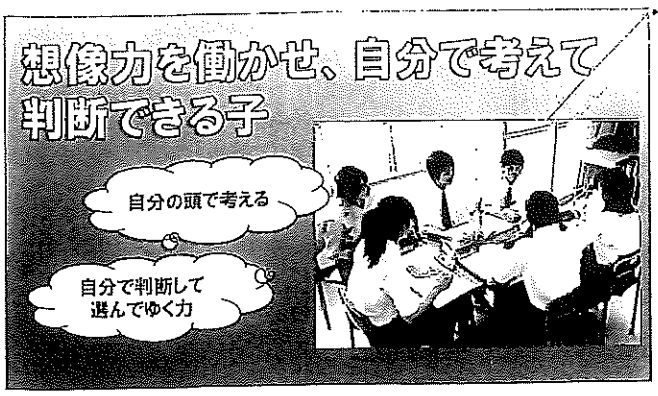
そういったワークショップでのご意見も踏まえ、有坂村長から提示された南牧村の「子どもの未来像」、『次世代を生き抜く子ども』について、教育委員の皆さんと『次世代を生き抜く子ども』とはどういった子ども達なのか、検討してきました。

それが左図です。

8 １つ目、「自分も相手も大切にできる子」です。

自分に自信がもてて、自分を大切に思える、自尊感情をもった子ども。一方、他人を認め、尊重できる子どもです。

いじめなどが頻繁に耳にする現代に自分も相手も尊重できる子どもは次世代を生き抜くための要素と言えます。



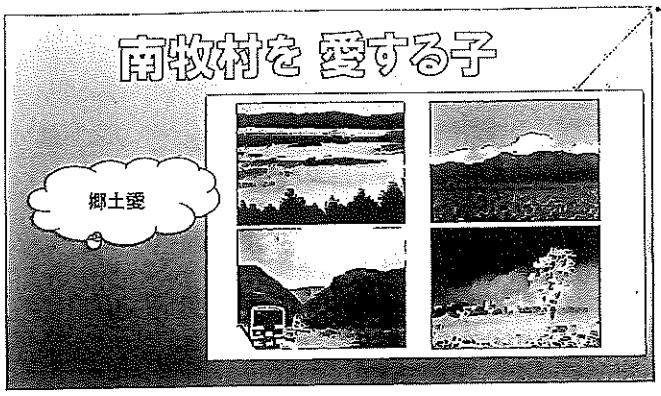
9

2つ目、「想像力を働かせ、自分で考えて判断できる子」です。

現在、AI、いわゆる人工知能が急速に社会へ広がっています。まさに人口知能時代の到来です。

脳科学者の茂木健一郎さんは、人工知能が社会に浸透して、誰しもが手軽に利用できるようになったら、人間はどうなるだろうか。そうなったら「人間は考えなくなる」と言っていました。つまり、何でも問いかければ、答えを出してくれる人工知能に人間は頼ってしまって、自分の頭で考えなくなってしまうと話しています。

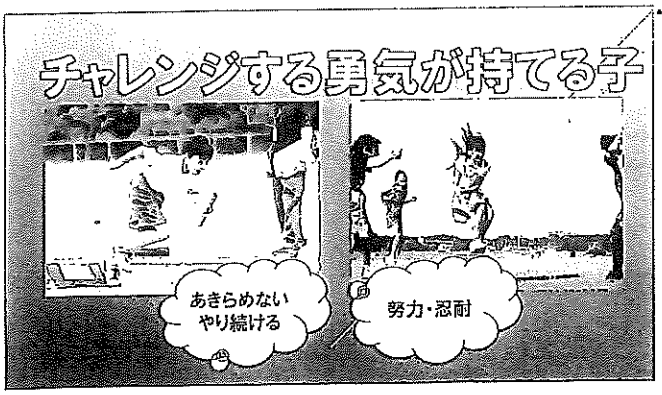
茂木さんは子ども達に将来、何が必要なのかということに、「自ら判断して、選んでゆく力」と言っていました。そういうお話を聞いて、教育委員会では、2番目に掲げた「想像力を働かせ、自分で考えて判断できる子」はこれからの時代に必要な資質と考えました。



10

3つ目は、「南牧村を愛する子」です。

郷土愛をもった子ども、そのものです。

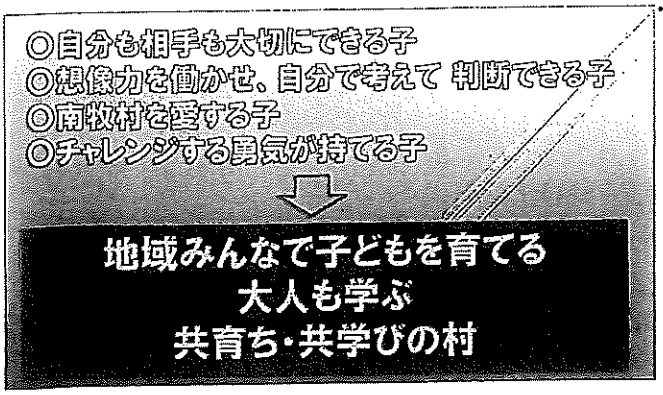


11

4つ目は、「チャレンジする勇気が持てる子」です。

「チャレンジ」の言葉にはいろいろな意味を込めて使っています。人間は、成長し社会で生きていく上で様々な経験をします。人生は順風満帆とは言えず、苦難に耐える時期もあります。様々な困難にも遭遇します。

我が身に降りかかった苦しい時に、「あきらめず」、「やりつづける」といったことが必要になると思います。「努力」や「忍耐」といった言葉も連想できます。あきらめずに、やり通すことで幸せはやってきます。そういった子どもたちが幸せを掴むためにも「チャレンジする勇気を持てる子ども」をあげました。

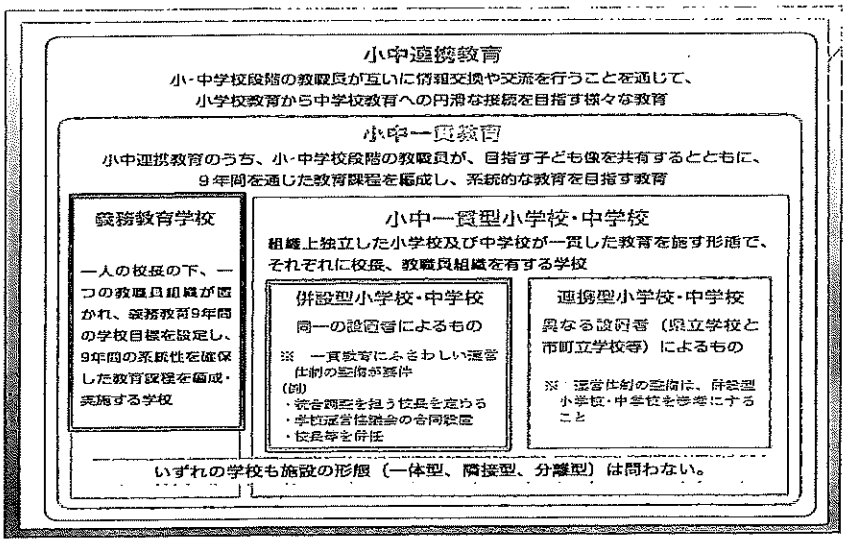


12

4つの子ども像を実現するために

4つの具体的な子ども像を実現するためには、どのようにしたらよいのか。

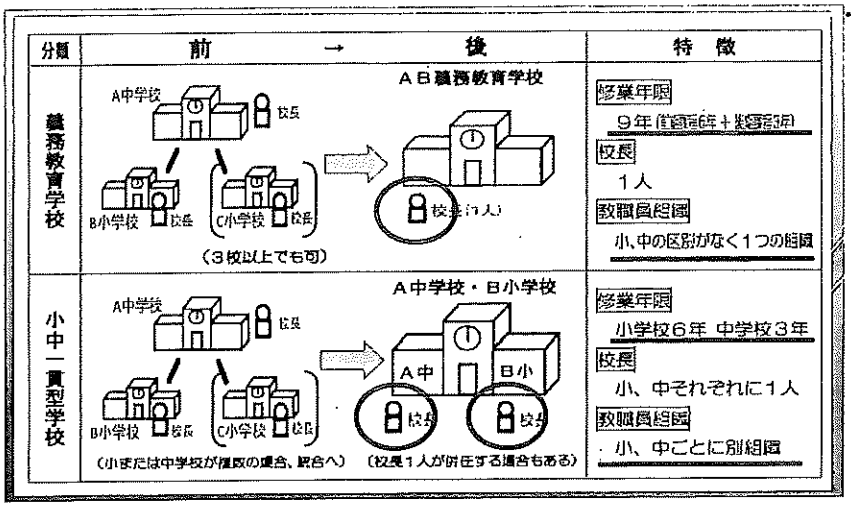
現代は両親の共働きが当たり前のようになり、祖父母に子どもたちの面倒を見てもらうといった家族の形は減少しています。学校が終わってから、放課後児童クラブへ通う子ども達も増えています。家庭と学校に頼ってきた、小・中学校の義務教育へ新しい力が必要と考えました。それは、地域住民の皆さんの力です。地域住民の皆さんの力もお借りして、地域みんなで子どもを育てる。大人の皆さんも子どもと共に学び、共に成長する村、『共育ち・共学びの村』を目指したいと考えています。



13 複合型義務教育学校

「地域みんなで育てる　大人も学ぶ　共育ち・共学びの村」づくりには、新しい形の学校が必要です。

令和３年に国の教育指針が大きく変わりました。現在は「個別最適な学び」と「協働的な学び」が導入されていて、昭和・平成時代の授業風景から様変わりしています。情報通信技術を使ったタブレットによる授業も取り入れています。地域の皆さんにも子どもたちの教育へ関わっていただくには、学校へ住民の皆さんに利用してもらえる施設も必要です。そのため、新しい学校の形は、複合型の義務教育学校が良いのでないかと考えます。



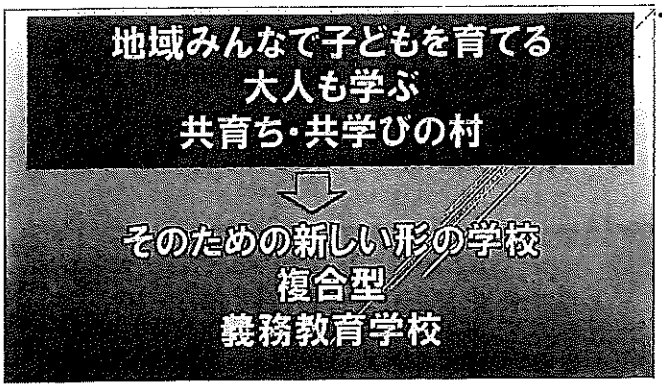
14 義務教育学校とは

義務教育学校について、説明します。

小中一貫教育には、義務教育学校と小中一貫型小学校・中学校の２つがあります。義務教育学校は平成28年に制度化された、新しい学校の形です。

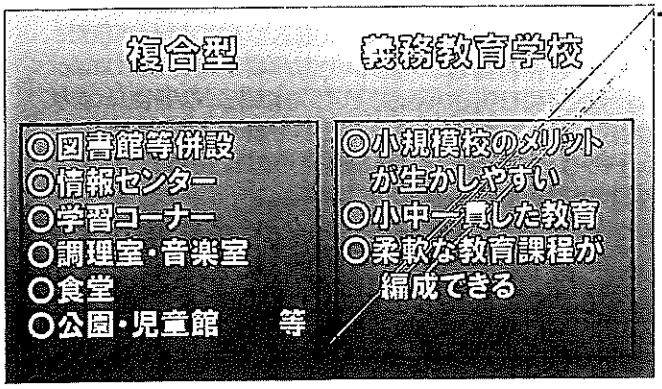
義務教育９年間で子ども達の心身の発達に応じて、一貫した教育をすることが目的で、９年間のつながりを考えた教育課程を編成し、実施していくことが可能となります。

学校運営では一人の校長先生の下、一つの教職員組織が設けられ、PTAも小学校・中学校を合わせたひとつの組織となります。



15 複合型とは①

複合型義務教育学校と申し上げましたが、複合型とは、住民の皆さんも利用できる施設を学校へ備えるということです。



16 複合型とは②

例えば、住民の皆さんも利用できる図書館、情報センター、学習コーナー、調理室や音楽室、食堂です。公園や児童館があってもよいかも知れません。

義務教育学校は小中の一貫した教育できること。そして、柔軟な教育課程が編成できることから現時点では小規模校のメリットが生かしやすいと考えられます。

8 館報&広報 No.779 2024

みんなのみなみまき

学校統合にかかる保護者懇談会Q&A

5月20日～22日までの３日間、村内小中学校で行われた保護者懇談会であがった質問や意見を掲載しました（地区懇談会の質問や意見は来月以降、順次掲載します）。

前向き

先日、初めてバラの苗を購入しました。比較的育てやすいバラを選んだつもりでしたが、花が咲く直前に病気になってしまったり、雨に当てすぎて弱ってしまったりと、バラ一本育てるにもとても手がかかり、悪戦苦闘の毎日です。

他にも数種類の野菜やハーブ・果物なども栽培していますが、あまり手がかからず順調に育つものもあれば、大きくなり過ぎてしまうなど思うように育ってくれないものもあります。また、順調に育っても鳥や鹿などに実や葉を食べられてしまうこともあり、この歳になって改めて植物を育てる難しさや苦労を実感しているところです。

それでも、植える場所や日当たりなどの条件や、自分の手のかけ方ひとつで成長に差があるなど、新たな発見がとても新鮮で楽しいです。趣味の範囲で育てているのであまり沢山はできませんが、自分で苦労して育てたものを収穫して食べることができた時の幸せを感じるために、日々頑張っています。

ちなみにバラは観賞用ではなく、ジャムやお茶にして美味しくいただく予定です。（S.Y）

01 北小学校 懇談会

◎男性▷児童・生徒数を増やしていく方法はないのでしょうか。

→教育長▷Iターンで人口の流入を見込むということも一つの考えですし、特色ある学校づくりを目指して子どもたちを南牧に招くということも一つと考えています。そのためにも、核となるべき南牧の子ども像を皆さんと作っていきたいと考えています。

◎女性▷義務教育学校と小中一貫校の違いがよく分かりません。義務教育学校の方がより自由にできることが多いということでしょうか。

→教育長▷義務教育学校は一人の校長先生のもと、一つの教職員の組織になりますが、小中一貫校は校長先生が二人で、小学校・中学校の教職員は別の組織になります。また、義務教育学校は小中９年間を通した教育課程の編成ができ、子どもの発達や学校の特色にあった編成をすることができます。

◎男性▷平成28年度から導入されている義務教育学校は県内にありますか。

→指導主事▷県内には４校、信濃町学園・塩尻市楢川小中学校・根羽学園・美麻小中学校があります。

◎男性▷平成29年の建設検討委員会に参加し、義務教育学校の説明を聞きました。中学校周辺に建設した場合、義務教育学校でないと、補助金が出ないと聞きましたが、今も変わっていませんか。建設検討委員会の頃から随分、時間が経ってしまいました。現在までの経緯を説明してください。

→教育長▷平成28年に建設予定地が２か所挙げられました。村は、南小学校周辺の用地確保に向けて動いた経緯がありましたが、用地確保は思うように進みませんでした。それと合わせて、中部横断道のICの建設場所によっては、学校の建設場所も影響を受けるとの理由から議論が進みませんでした。教育委員会では学校統合の議論を進めるべく、昨年ワークショップを開かせていただきました。有坂村長が就任して、学校統合は喫緊の課題なので、その先へ進めるべく、この度の懇談会を開催することになりました。

補助金については、詳しく研究しているところです。現在の校舎を再利用するのか、新しく違う場所にリニューアルするのかは、まだ議論していません。

◎男性▷議論が進んだとき、何かしらの組織を立ち上げて進めていくことが理想だと思うので、そういった体制づくりをお願いします。

→村長▷長年、学校問題については議論されてきましたが、急速に人口減少や少子化が進んでいます。皆さんにご意見をお聞きしてスピーディーにこの問題を進めていきたいと思っています。これまでは学校の形や建設場所がまず出てきて、なかなか結論に至りませんでした。初めに考えるべきは20年後、30年後の子どもの未来像をしっかりと描いて、子どもたちのためにどういう学校がいいのかということを、皆さんの意見を聞いたり、教育委員会で研究したり、視察したりして深めていきたいと思います。

◎女性▷どんな子どもに育てていきたいかということを考えていくのは、すごく素晴らしいと思います。南牧村は自然をはじめ、良い環境が整っています。他の地域にも発信できるし、子どもたちも、郷土愛をすごく持っていると思います。この地域の特色を生かしたような学校を作ってもらえればと嬉しいです。

◎女性▷私の子どもは小学２年生です。畑がすごく楽しみで、鹿に食べられないようにするためにはどうすればいいかと考えることを、すごく楽しみにしています。新しい学校を作るにあたって、畑や田んぼの授業は残していただきたいです。星がとてもきれいなので、星を見る授業もいいかと思います。

◎女性▷私が一番気になるのは、子どもが少ないことです。今、私の子どもは10歳ですが、村に11人しか同級生がいません。本人は同年齢の友達が少ないことがとても寂しいと言っています。新しい学校をつくるというのはすごくいいことだと思いますが、村内の児童数が減っており、子どもが少ないのに新しい学校を作ることが果たしてよいのか疑問に思っています。近隣町村と連携して学校を作るとい

う話はあるのでしょうか。

→村長▷郡内の町村長が集まる機会に、様々な話をします。少子化の問題や将来の展望の話も多く出されます。今のところ学校統合を近隣町村で一緒にやろうという話は出ていません。それを見越して、小学校だけ統合して、中学校は他町村へ行くという考えもありますが、そういうことを含めて、皆さんにいろいろ意見をいただければと思います。

◎女性▷建物について質問です。小学校・中学校の耐用年数というのは、どのくらいか教えてください。もし、既存の校舎を活用すると、あとどのくらい使用できると考えているのが教えてください。

→教育長▷建築年数は中学校が約50年、小学校が42、3年経過していると思います。今後の使用年数について学校は鉄筋コンクリート造りなので、修繕をかければ20年以上は利用できると考えます。ただ、設備的に40年以上経過しており、不具合を直さなければ利用できないと思います。

◎女性▷新設して既存の学校を処分する場合と再利用する場合、コストがかかるのはどちらでしょうか。

→教育長▷コスト面については今後検討していかなければいけない大きな課題だと思います。

◎女性▷中学校周辺が候補になっていますが、今回中部横断道のICが中学校の上となると、交通量が多くなるので、子どもの通学が心配になります。

◎男性▷今年度、佐久市に英語教育に特化した学校ができたと聞きました。私立だからできて、公立ではできないということはあるのでしょうか。

→教育長▷文部科学省から示されている学習指導要領があるので、それを超えた授業は難しいと思っています。

◎男性▷できる範囲の中で特色ある学校づくりができれば、他地域から通わせたいという人がいるでしょう。公立だと南牧村に住まないと通えないというのは、村的にはメリットがあると思うので、何か人を呼べることができればいいと思います。

→教育長▷今いただいたアイディアを形にできるように考えていきたいと思います。

◎女性▷児童数が減っており、学校づくりと並行して団地を造成したり、集合住宅を建設する予定はありますか。

→村長▷人口増加が非常に大事だと思っています。一番の手立ては、結婚していただくことです。今年も予算化して、婚活支援事業をやっていく予定です。

◎女性▷休日に子どもが他の子どもと遊べなくなっています。放課後や休日に学校とは別に遊び中心の場所があるといいと思います。

→村長▷何か取り入れていけるものがあれば良いと思っています。例えば、図書館も学校に併設されていれば、村民の皆さんも集まってきますし、子どもたちとの交流もできると思います。村営の給食センターがあって、社協に来る皆さんが、子どもと一緒に給食を食べ、そこで色々な人と触れ合うことで、子どもに多様な考えも生まれ、学校の授業で学べないことも学べるのではないかと思います。色々な施設を学校の近くに集めることで、子どもたちにいい影響が与えられると考えています。

◎男性▷複合型の学校は、平成29年の時も議論しました。地域住民との触れ合いは、子どもたちにとってすごくいい影響になると思います。村民が集まる中央公民館も老朽化し、避難所にも適していないと聞きます。大変でしょうが、前向きに進めてほしいです。また、アレルギーに対応できる給食センターも作ってもらいたいです。ハード面とソフト面と両方で進めていくことが重要と考えます。

→村長▷小中学校の保護者懇談会やこれから各地区で開催する予定の地区懇談会の意見を聞きながら、方向性を出して、スピーディーに進めたいと思います。

02 南小学校 懇談会

◎男性▷佐久穂小中学校は小中一貫校と聞いています。統合したことによる長所・短所を教えてください。

→岡村校長▷施設一体型小中学校は子どもの数が多くなり、活動も増えます。小・中学校がひとつになると、1校分の予算でいろんなことができるというメリットがあります。佐久穂では、支援員の先生が多く入ってもらっていて、子どもにかかわる職員が多く確保された点が、子どもたちにとってありがたいです。デメリットは学区が広く、スクールバスの数がたくさん必要です。始業・終業のチャイムを同じ時間帯にならせない。小学生は給食の準備をしているけれど、中学生はまだ勉強をしているところなど、いろいろあります。

◎女性▷佐久穂は小中一貫校ですが、南牧村で進めようとしているのは、複合型の義務教育学校と伺いました。日本で複合型の学校というのは現在あるのでしょうか。

→教育長▷北海道の安平町では、複合型の義務教育学校がスタートしています。図書館や調理室など、地域の皆さんも子どもたちも同じ施設を使えるそうです。今回、そういった地域の皆さんが子どもたちとのかかわりを持てる共用施設の形を複合型と表現させてもらいました。また、義務教育学校は一つの教職員の組織なので、例えば、中学校の英語の先生が、小学校5年生、6年生を教えることもできます。このような点でも義務教育学校のメリットがあると思います。

◎男性▷北小は地域の方と学校の関係が近く、コミュニティスクールの活動ができていますが、南小は地域住民との関係が薄かったと感じています。地域の中に学校があることの意味を考えたとき、合併して学校が一つになると、地域の中に学校がなくなってしまうことが、住民にとってどうなのかと思います。複合型のいろんな施設が入った学校があるのはすごくいいと思いますが、今まで身近にあった学校がなくなってしまって、遠くになってしまった学校に来れるのか、そういうことについて、どのように考えていますか。

→教育長▷地域から子どもの声が聞けなくなることで少しずつ活気が失われていくのではないかという心配だと思います。どちらの候補地に学校を建てても遠く離れた地域が出てしまいます。とても大事な意見だと思います。今、私が考えていることは、学校が統合しても保育園や児童クラブといった子どもたちの声が聞けるような施設は地域へ残して、整備していくべきでないかと考えています。

→村長▷この村は、市場坂を挟んで上と下に分かれており、どちらの地区の方も近くに学校を残したいという住民感情があることから、なかなか結論が得られなかったのが正直なところだと思います。施設的には、新しい学校を作れば子どもたちが快適に過ごせるということにもなりますが、村民の皆さんがこのままの形でいきたいという意見が圧倒的ならばこのままでいくという選択肢もあると思います。小学校だけ統合するという選択肢もあると思います。義務教育学校を作るという選択肢もあります。皆さんのいろんな意見を聞いて筋道を作っていきたいと思っています。

◎男性▷新しい学校を作ると、今の学校は使われなくなります。施設の後利用について村や教育委員会はどう考えていますか。

→村長▷地域の皆さんが集えるようなコミュニティホールを作るとか、子どもが勉強できる図書館や合宿施設に利用するとか、有効利用ができればと考えています。

◎男性▷統合が前提で話が進んでいると思っていましたが、これまで通り3校でずっとやっていくという意見が多ければそういう可能性もあると聞いて驚いています。初めてこういう場に参加した者としては、私たちの意見もまだまだ聞いてもらえる機会があると感じました。教員住宅も老朽化してきているので、先生方が住みやすい、生活しやすい環境を前向きに整備してほしいです。

→教育長▷教員住宅については、いろいろな方から指摘をいただいています。学校統合の方向性を見定めながら進めていきたいと考えています。

→村長▷私は、皆さんの意見をお聞きすると言ってきましたが、学校づくり委員会や建設検討委員会から出された答申などがありますから、それを全然失くしてしまうということでなく、芯としてあります。答申を尊重しながら、皆さんの意見を聞いていきたいということです。

◎男性▷私が中学生の時は、生徒数が150人くらいでしたが、今の生徒数は74人ということです。どこでも少子化は進んでいて、統合は致し方ないのかと思っています。ただ、みんな気にしているのは、どこに作るのかが一番の関心事だと思います。広瀬分校も平沢分校もなくなってしまいましたが、分校の跡地には学校があったというものが残っています。何らかの形で残していくこともできるので、統合が悪いこととは思いません。複合型の義務教育学校は、北海道にしかありませんか。

→教育長▷義務教育学校は、長野県に４校あります。

→村長▷国で平成28年度から制度化されたので、そのタイミングで合併や新築を進めた自治体で義務教育学校にしていると思います。今後増えていく傾向になると思っています。

→教育長▷子どもの数が減ったから統合という話もありましたが、一番大事なのは、子どもの学習の仕方が変わったということです。教室でみんな一緒に同じ内容の授業ではなく、ICTを使い、子ども一人一人の進み方で学ぶようになってきています。このような学びを実現するためには、今の校舎では不都合が出てきているのではないかと思います。

◎女性▷当時の建設検討委員会では、いろんな方に参加していただいて、何度も会議を重ね、検討していました。今は、児童・生徒の人数が少ない弊害で、人間関係で困っているとか、中学に行って環境になじめないとか、このような課題も一貫校になれば少なくなるのではないかと思います。今の校舎では修繕費も多くかかっています。子どもたちにとってどうするのがいいか、私たち大人が一番考えなければいけないし、そのために大人も変わらなくてはいけないとすごく思っています。私は早く学校ができればいいなと思っています。

◎男性▷義務教育学校に関わりのある方を南牧村へ招いて、義務教育学校になってどうだったのか、学校がなくなる地域の子どもたちはどのように通っているのか話を聞く機会をつくってほしいと思います。

→教育長▷いろんな方法があるので検討したいと思います。

◎男性▷学校統合という道筋が見えてきたときは、途中で消えてしまわないように村長の力で引っ張って、早いうちに結論を出してほしいと思います。

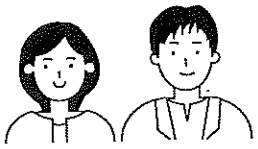
→村長▷来年の３月までには道筋をしっかり出していきたいと思います。

◎男性▷「夢見る学校」という映画に、南信の義務教育学校が出ているので、その映画も見てみたいと思っています。昨年、村議会で秋田県井川町の義務教育学校を視察しました。100mの廊下に９学年までの教室があって、とてもいい雰囲気で子どもたちは生き生きとしていました。南牧で一つの学校にすると、小さい子どものバスの長距離送迎が心配になりますが、複合型にすることで、一般の人もバスに乗れたり、先生方も乗ってくれるかも知れません。バスの使い方も工夫できると思いました。

◎女性▷新聞で野辺山の駅舎を村が購入する予定という記事を読みました。駅に図書館ができるのですか。

→村長▷野辺山駅舎については、まだはっきり決まっていませんので、皆さんにお話しできる段階ではありません。

03 中学校保護者 懇談会



◎男性▷８年前に建設検討委員会で議論したことはすべて白紙となってしまったのですか。村はいま、説明のあった義務教育学校と小中一貫学校の二つで検討を進めていくという理解でよいですか。

→村長▷建設検討委員会で出された中間報告の内容は生きています。ただ、あれから時間が経っているので、皆さんの意見を聞いて方向性を出していこうと考えています。

◎男性▷有坂村長が就任してからスピーディーに統合に向けての話が進み出しました。村長が変わるとよく、進めてきたことが白紙に戻されることがあります。行政としては統合を決めたら、後戻りすることなく前進するということでよろしいですか。

→村長▷そういうことです。

◎男性▷私が軽井沢の中学校に行ったとき、その学校はホテルのような外観で、グランドは人工芝。サッカーができて、野球ができる内野には砂がきれいに敷き詰められていました。こういう素晴らしい環境で子どもたちに思いっきりスポーツをさせてあげたいと思いました。新しい学校を作るにあたって、学習環境だけでなく、スポーツのできるグランドや体育館の整備もとても大切だと思います。村の図書館も放課後、子どもたちが歩いて行って、本を読んだり、勉強できるようであったらよいと思います。児童館も学校の近くにほしいです。学校は公共の交通機関が近くにあるほうがいいと思います。中学校は部活を南佐久でやっていて、中学生の移動にはJRを利用しています。高校生もJR駅の近くに図書館があれば、そこで勉強もできるし、親の送迎も楽になると思います。南牧の教育は周りからすごいと思われるぐらいのことをやってもらいたいです。

　これからはAIの時代で、この時代を生き抜いていくためには、いろんな人とかかわっていくことが大事だという話を聞きました。複合型施設を作って、いろんな人が集まる環境を整えれば、結局のところ子どもの成長につながると思います。これからは高齢者と子どもの関りも今まで以上に大事なことだと思っています。そのためにも学校の近くに高齢者施設を作ってほしいです。南牧の教育がすごいとなれば、Iターンも期待できます。

◎女性▷20年以上ずっとこういう話をしていると聞いて、こんなにも話が進んでいないことにびっくりしています。私は20年後、30年後を考える気はありません。子どもを育てているママとしては、懇談会が始まる18時という時間は大変忙しいです。お昼の時間帯やぴよぴよサロンで話を聞ける時間を設けてもらえたらうれしいです。それと、私は統合には賛成ですが、統合の賛成意見や反対意見が分からないので聞いてみたいと思います。

→教育長▷20年前は全国で市町村の大合併が行われた時でした。南牧村も川上村との合併について真剣に議論されました。当時は、川上村との合併には至りませんでしたがその後、子どもの数が減ってきて、学校統合についての議論が起きました。学校の建設場所はどこにするのかで、村を二分する大きな出来事となってしまい、統合できないまま現在に至っています。学校の場所が最初に議論されるのではなく、子どもたちにとってどのような学校が必要なのかを考えることで、議論が深まるのではないかと考え、教育委員会で示した資料を作成しました。お母さんが集まる場所や時間帯については考えていきたいと思います。

◎男性▷義務教育一貫のところには、補助金が３分の２つくという話を聞いたことがあります。国からの補助金はどうなりますか。

→教育長▷補助金が付くように検討していきます。補助金をできるだけ使って、村の財政に負担がかからないような形で建設したいと思っています。

◎女性▷次の懇談会は決まっていますか。3か月に1回とか定期的にやってほしいです。子どもが少なくなってきている状況でこの村に二つの小学校が必要なのかと思います。20年後、30年後ではなく、小学校の統合を早急に進めてほしいです。

→教育長▷農繁期を避けて、次回どういった懇談会を開くか検討していきたいと思います。今年は、二つの小学校が連携し合う「小小連携」に重点を置いて、北小と南小の子どもたちが一緒に学習する場を増やしていくようにお願いしています。

→村長▷学校を作るのが20年後30年後ではなく、そこを見据えて子どもたちをどう育てていくかを考えていきたいと思っています。学校統合の道筋を今年度中に皆様へ示し、スピーディーに取り組んでいきたいと考えています。

◎女性▷2・3年後だと希望を持って応援して、私たちも努力したいと思います。

→教育長▷来年3月までに統合に向けた行動計画を出して、設計、建物の確認申請、用地の造成などもすれば早くて4年後からの建設ではないかというのが私の考えているスケジュール観です。

◎女性▷以前、北小の校長先生から今の児童数だと複式学級なんですよと教えてもらいました。私は1学年で一人の先生が当たり前に思っていました。行政でもそういったことをしっかり発信してもらえば、統合もスピーディーに進むと思います。

◎男性▷以前の検討委員会では、用地の取得が困難で立ち消えてしまった記憶がありますが、どうダメだったのでしょうか。

→教育長▷南小の東側の土地だと思いますが、その地域は地図混乱地域で、その土地を取得するには土地所有者全員の了承を得てから土地の整理をする必要がありました。しかし、全員の方の了承を得られず、土地の整理が進んでいません。

◎男性▷その話でいくと、今回もまた、用地取得が困難な状況になることはみえています。そうであれば、村は用地のめどを立てておくべきでないですか。

→教育長▷南小の校庭自体がかなり広いものです。工夫すればあの周辺でも建設は可能ではないかと思います。用地取得については当時の板橋財産区の皆さんにもお骨折りいただいたのですが、どうにもなりませんでした。現時点で新たに土地を取得することについて考えていません。

→村長▷学校建設の用地については現在、検討中です。南小の敷地へ決まったわけではありません。

◎男性▷南牧は南北に起伏があって建設候補地が南・北とで議論になってしまったことは分かりました。用地取得が前回の白紙理由だったのでしょうか。

→教育長▷用地取得ができなかったのも理由の一つですし、中部横断道のICの場所によって、学校の建設場所も影響受けるので、慎重に取り組みたかったという理由もあります。

◎男性▷ある程度ICの場所が決まってしまって、それを見据えてこれから用地の場所を決めていく方向性も考えられるのですか。

→教育長▷そうです。

◎男性▷用地取得に向けて、地主さんとか、検討地は特に上がっていないということですか。

→教育長▷基本的に前回議論いただいた、南小敷地又は中学校周辺がベースになってきます。

学校統合に係る地区懇談会

5月27日～6月5日の期間に村内6地区で行われた懇談会の質問や意見を掲載します。

海尻地区懇談会　5月27日(月)

◎男性▷義務教育学校や小中一貫校にすることで教育の質は良くなるといっても過言ではありません。南牧村を知る学習を行って、20年、30年経っても、誰も南牧の昔を知らないということがないようにしてほしいです。

また、少子化が進んだ将来、近隣の町村とも学校が一緒になる時期かもしれませんが、今回思い切って学校建設を進めてほしいです。

→教育長▷「総合的な学習」といって、子どもたちが自分で考えて地域の学習を行う授業が本格的にスタートする段階にきています。教育委員会としても現代の学習に合った形に変えていくことが必要ではないかと思っています。

◎男性▷小学校、中学校の保護者懇談会で出た意見を教えてください。

また、子ども・PTA・行政・地域の意見がしっかり審議された中で進んでいけば一番いいと思っています。

→教育長▷学校統合に向けてスピーディーに議論をして結論を出してほしいといった学校建設に前向きな意見が多かったです。一方で学校統合に時間がかかっており、どうして進まないのかといった厳しい意見もありました。また、北小学校の保護者懇談会では畑や自然を愛する授業に取り組んでほしいとの意見もありました。こういった意見の内容は今後、公民館報等に載せていきたいと思います。

◎男性▷概ね反対意見がないとすれば、今度は（学校統合に向けて）しっかり進めてほしいです。人口が減ってきていることなど将来的な部分も見ながら、組合立学校など学校のタイプを考えてもらいたい。

→教育長▷組合立学校と言われましたが、川上村で統合小学校の建設が始まっていますので、現段階では南牧村は義務教育学校がいいのではないかと考えています。

○男性▷学校統合の理念を掲げて肉づけしていく手法を取られるのは分かりました。しかし、タイム・スケジュールをある程度しっかり提示した上で議論を進めていくといいのではないか。

→教育長▷20年後、30年後の子どもたちの姿を理念・理想としてしっかり掲げることによって、学校の形が決まり、最適な学校建設の場所が決まってくるものと思います。スケジュールについて、現段階ではなかなか具体的なことは申し上げられませんが、来年3月までにスケジュールをはっきりさせたいと思います。

→村長▷スピーディーに進めたいと思いますが、早くてもここ2～3年はかかってしまうと思います。しかし、それに要した時間も無駄にすることがないよう、子どもたちの交流を進めて統合した時にはすぐになじめるような形を作っていきたいです。

○男性▷私は昨年のワークショップへ参加しましたが、そこで先生たちから小学校中学校ともに老朽化が進んでいて、あちこちで雨漏りするといった話ばかりで不安が大きくなってしまいました。学校統合を進める上でプラスの意見を聞かせて下さい。

→教育長▷今回の懇談会を持たせていただいたのは、子どもの未来像を皆さんで共有して同じ方向を見て頂くためです。それに向かって学校の形や建設予定地が決まってくると思います。今回は情報共有

を図らせて頂きたいと思っています。

◎男性▷行政のほうでビジョンは全然ないのですか。

→村長▷ビジョンが全然ないということではありません。答申が出されてから８年が経過していますので、ここで丁寧にもう一度皆さんの今の意見等もお聞きした上で、今年度中にしっかりとした方針を出したいと思っています。建設場所等も検討に入ってはいます。土地交渉もありますので、ここでこの場所というのは避けたいと思います。

○男性▷児童生徒の数を見ると、そんなにでかい学校でなくても各学年１クラスで十分な状況ですので、早めに学校をつくればいいと思います。

→村長▷人口動態も注視しながら、それに見合った学校の大きさというのも考えていきたいと思っています。また、全国から注目されるような魅力ある学校をつくりたいと思っています。

○男性▷これから学校を建設するのと一緒に人口増加対策にも取り組まなければなりません。最近、スケート留学で他地域から当村へ移り住む生徒も現れていて、新しく良い学校を作ることによって、他地域から人が来ることも期待できると思います。

○男性▷今日は村長さんに大分突っ込んだ発言を言ってもらって、非常に心強く思っています。学校にはやはりしっかりした先生に来ていただくとうまく運営されます。立派な学校を作っていただくことも必要ですが、学校を支える先生たちが生き生きとして生活できる住空間、教員住宅も併せて考えていただけたら嬉しいです。新しい学校建設については一歩でも二歩でも早く進めていただきたいと思っています。

○男性▷学校の建設費用や土地の取得費用はどのくらいになりますか

→教育長▷学校の建設の費用、または学校用地の取得費用については、現在のところまだ積算されておりません。今後、そういった案もお示しできるように進めていきたいと思います。

→村長▷学校建設に備えて学校づくり基金をつくり、今年度から基金の積み立てをしたいと思っています。

○男性▷教員住宅の話が先程ありましたが、私の知り合いの息子さんが南牧村の学校へ勤めることになって、村内でアパートを探そうとしましたがアパートがないとのことでした。これから村に移住する人を増やす施策にもしっかり取り組んでほしいです。

→村長▷学校の建設と併せてしっかりとした教員住宅を作っていきたいと思っています。また、移住してくる皆さんのために村営住宅等もしっかり計画していきたいと思います。

◎女性▷学校を建設する上で問題なのは、建設場所だと思います。市場の坂がどうしても南牧村を二分してしまっている気がします。坂より下の人は下がいい、上の人は上がいいという考えが多いと思うので、村民の人たちが納得するような場所を選んで頂けたら嬉しいです。

→教育長▷これまでは建設場所のことに終始してしまいました。多分どちらにしたとしても異論がある方はいると思います。そのためにも、南牧村の子どもの未来像を皆さんで共有して、学校の在り方を定めて、その先に進んでいきたいと思います。

海ノ口地区懇談会　5月28日㈫

○男性▷これまでの答申や中間報告を踏まえて、小中一貫校をしっかり進めてほしいです。また、昨年開いたワークショップで新年度になったら小中一貫校の専門家の先生をお呼びして、講演会を開きたいと言っていましたがどうなっていますか。

→教育長▷現在、CO-SHAプラットホームという国の制度を使って、東京電機大学の先生をお招きして今後の学校の在り方について検討を始めるという段階にあります。本日の懇談会を経て、今後講演会

を開くようであればその準備を進めていきたいと思います。

◎男性▷平成18年の時、小学校の統合を進める中で建設場所の話になってしまい、話が壊れたような気がします。お互いに教育のことをしっかりと考え、譲るべきところは譲るというような話し合いを持っていただくようお願いします。

→教育長▷平成18年からの経過も踏まえ、学校建設の場所に焦点が当たってしまうと、地域の対立を生んでしまいます。まずは、南牧村の子どもの未来像を皆さんで共有して、それを柱にして新しい学校建設に向かっていきたいと思います。

◎男性▷大体、何年後を見据えて考えていますか。

→村長▷今年度中に方針を示し、来年度には決定をして準備に取り掛かっていきたいと思います。そうすると、用地買収や設計、補助金申請などの手続きを進めたとしても早くて2、3年の期間は要します。できるだけスピーディーに取り組み早く良い学校をつくりたいと思っています。

◎女性▷統合学校が完成したら、子どもたちの通学方法や通学時間が母親としては気になります。急いで学校のことを決めたいのであれば、今回（建設場所を）示してほしいです。今後どのように進めていくのか教えてください。

→教育長▷学校統合の議論をしていく中で、最初に建設場所の問題になってしまうと地域間の綱引きになってしまいます。最初はこれからの子どもたちの未来像を考えていきたいと思います。ただ、通学が遠距離になる子どもが心配だという保護者の声は承知しています。本日のような懇談会で皆さんのお話を聞いて、持ち帰って検討していきたいと思います。

→村長▷通学にあたって、市場坂が一番危惧されるところです。そこは安全性をしっかりと重視して色々な方法を考えていくつもりです。

そういう中で私はこういう考えで、ここがいいというようなことがあれば、皆さんからも是非お聞きしたいです。

◎男性▷私は子どもたちのために、是非いいことを考えていただいて、住民も子どもたちと一緒に生活でき、学び合えるような学校をつくっていただけたらと切に願っています。

◎男性▷いずれ保育園も小学校も人数が少なくなっていく中で、早急にどちらかの校舎で教育していくような形になったほうがいいと思います。一貫校の建設には数年かかると思いますがそういった形も教えてもらいたいです。

→村長▷保育園は、なるべく2か所でやっていきたいと思っています。

学校は、統合したい考えを持っています。しかし、小学校をすぐに統合して、さらにその先、一貫校にすることはなかなか難しいところもあります。そこで、南小学校と北小学校の子どもたちが一緒に行事等を行ったりして、触れ合いを重ねるような取り組みを行っていこうと思っています。

→教育長▷南小学校、北小学校の児童が一緒に社会科見学に行ったり、授業をしたりといった小学校同士の連携「小小連携」の取り組みもスタートしています。

◎男性▷お母さん方の都合を考えた時間に懇談会を開催してもいいのではないですか。

→村長▷ほかの懇談会でも、お昼の時間帯とか、ぴよぴよサロンの時だったら出席しやすいという意見を頂きましたので参考にさせていただきます。

○男性▷これまでの学校づくり委員会の話し合いを聞かせてもらっていますが、今回の議題と全く似たような感じで始まったと思います。これまでの話し合った内容が今回の懇談会へ反映されているのか、それともまた一からスタートしているのか気になります。

→村長▷一からスタートということではありません。小中一貫校教育を目指すこと、新しい学校施設を建設すること、建設場所は最も適切な場所を選定すること、これが学校づくり委員会で出された答申です。その後、建設検討委員会で建設の候補地を南小学校の敷地と中学校敷地周辺の2か所にすると

の中間報告が出されました。それは生きています。答申や中間報告が出されてから8、9年経っていますので、皆さんにもう一度話をお聞きして、決定していこうと思っています。

◎女性▷子どもたちが北小学校の芝校庭でサッカーをするのはとても気持ちいいという意見をすごく聞きます。学校を統合して小中一貫校になったときも是非校庭が芝だったらいいのかなと思います。

→村長▷私もそれは非常に感じています。近隣町村の人たちが南牧村に是非行ってやりたいと思うような、いい環境をつくっていきたいと思っています。

○男性▷小中一貫校ということで進むということであれば、どういった学校づくりをしていくかというアイデアや意見を皆さんに伺ったらいかがかでしょうか。

→教育長▷また、考えていきたいと思います。

○男性▷若い人たちが村から外へ出て家を建てるというようなことから、現状のままでは人も増えないし、子どもも増えないので、何年後かに校舎は建てたけれど人がいないというような状況になってしまうのでないかと心配です。どのくらいの規模の校舎を望んでいますか。

→村長▷子どもの人数も十分視野に入れてやっていきたいと思っています。

○男性▷村に人を呼び込むということに関して、他業種から農業に携わる際に1,000万円を出すという施策もあるようです。そういう補助金等を活用して人を呼び込むことをしてほしいです。

→村長▷現在、移住して農業を始めるという人に補助金を出してやっていただいているという例もあります。また、これからも進めていきたいと思います。

広瀬地区懇談会　5月29日(水)

◎女性▷小さい子どもから中学生までが一緒になる義務教育学校というか、小中一貫校にしていっていただきたいです。

○男性▷学校の建設場所は南小が広くてよいと思いますが、登記、分筆ができないと聞きました。その点について教えてください。

→教育長▷現在、登記所で管理している公図上の所有者と現地を占有している者が違うため、該当する地域の土地所有者を新たに割り振る計画を進めました。しかし、それについて同意できない方がいて、進んでいません。

→村長▷南小はグラウンドが広いので、今の敷地内で学校を作ることも可能ではないかと思います。

○男性▷私は小中一貫教育、義務教育学校に反対です。小学校（の統合）は避けて通れないかもしれないが、中学校まで（統合する）必要ないと思います。

反対の理由は、①村長選の時に統合を進めるとは言っていないのでルール違反です。②3校にエアコン設置するのと統合するということと整合性がとれるのか。③統合すると一か所に集中してしまい、バランスが偏ってしまう。④小中一貫がいいというのなら全国でやると思うが？（やってない）⑤小中学校は災害の避難場所の役割も果たしているが、統合したらその場所だけが避難場所になってしまう。

→村長▷村長選の時、小中学校の統合について触れています。例えば、小学校を統合して大規模改修を行うとか、色々な選択肢があることを話しました。

○男性▷学校統合の場所は、中学校のそばがよいと思います。山を崩して地盤を上げれば災害に強くなります。市場坂を上がるのが嫌だという先生の声を聞きます。先生だって、通う場所は選びます。先生の環境を整えるのも大事です。

小中学校を合わせても、昔の1校分にもならない児童・生徒数です。都会から留学生を呼び込み、村の発展に結びつけてほしいです。

→村長▷学校づくり委員会や、建設検討委員会の答申を踏まえ、現在の皆さんの意見をお聞きし、しっかりとした道筋を立てていきたいと思います。

◎男性▷平成16年に学校統合の話しがあり、平成28年に学校づくり委員会が設置され会議が開かれましたが、その後の委員会が解散したので、学校建設については白紙になったということでしょうか?

→村長▷白紙になったということではありません。中部横断道のICの場所がはっきりしないことや、教育方針が変わったこと等でまとめ切れなかったと思っています。

板橋地区懇談会　6月3日(月)

◎男性▷南牧の少子化や人口減少に踏まえた協議とともに、村の人口増加に向けた取組も必要と考えています。都市部に集中する人口の中で、インターネットや高速通信の普及により、場所を選ぶことなく仕事に従事することができるようになりつつあります。そのような中、このような自然の中でオフィスを構えたいという会社も少なくはないと聞いています。そのような企業を誘致し、これからの南牧村の子どもたちに仕事の選択肢を増やし、よい学校教育を受けた子どもたちがそこで仕事をでき、郷土愛とともにこの村を支えていっていただけるような教育をしてほしい必要性も考えています。そこで、これからの学校教育については、ITやAIなどデジタルといったものと全く逆の森や自然、水など、AIではかなえられないアナログの両者を学習することで、多様性に富んだ人材を育成することができるのではないかと考えています。最後に統合、校舎のことですが是非、八ヶ岳を一望し、いろいろな施設を併設できる、拡張性に富んだ現在の南小学校の跡地に建設をお願いしたいと思います。

→村長▷貴重な意見をいただきまして、ありがとうございます。十分参考にさせていただいて、今後学校をつくっていく考えにしっかりと取り入れてやっていきたいと思います。人口増加の取組については今、私も真剣に考えています。南牧村へ引っ越しされて、こちらで働いていただいて、子どもたちをこの南牧村で育てたいという人たちに応えるための村営住宅の建設を考えています。現在、この村の学校に通わせてスケートをやらせたいという親御さんとお子さんを受け入れて、野辺山にある住宅を提供した一例もあります。また、企業誘致についても、南牧村には広大な土地もありますし、今後、高速道路のＩＣも２か所できることからしっかりと進めていきたいと思っています。

→教育長▷ただ今、どういった子どもに育ってほしいのか、どういう教育が望まれるのかということで『自然』というキーワードをいただきました。北小学校の保護者懇談会でも、そういった自然について発言された保護者もいます。そういった願いについて、これから教育委員会でも十分に議論していきたいと思います。学校の建設場所については、今後の子どもの未来、どういう学びが必要なのかという観点からも考えて、適切な場所の選定をしていきたいと思っています。

◎男性▷以前に話し合って、統合して小中一貫校をつくるという話でした。でも、それはコロナ以前のことです。コロナは小規模のほうがいいんじゃないかというものも出てきて、密になれば、それだけ危険が集中してしまうので分散したほうがよいということを学びました。だから、もう一度そういうほうを考え直したらいいじゃないかなと思います。

→教育長▷新型コロナウイルス感染症を通じて、学校もいろいろな対応をとらせてもらって、いろいろな学びもありました。ただ、私たちの村では学校統合をしても、小規模校です。これまでに経験したことを踏まえて検討を進めていきたいと思います。

◎男性▷統合は白紙に戻して、もう一度話し合ったらいいんじゃないかと思います。

→教育長▷答申や中間報告が出されてから大分時間が経過しています。現在の状況で、住民の皆さんがどのように学校統合について捉えているか、意見を伺いたいので、懇談会を開かせていただきました。今まで議論したものを全く白紙にして、進めるのでなくて、これまでの答申や、中間報告の内容も踏ま

えながら検討していきたいと思っています。

◎女性▷私は、南小の保護者と話をする機会が多くあります。その時に学校建設の候補地のひとつである南牧中学校周辺は軒並み自然災害危険区域に指定されていて、南牧中学校自体も急傾斜地に指定されていて、その周辺をただ平らにして用地を確保すれば、それで大丈夫なのかといった話になります。今まで中学校周辺の地盤調査を行ったことはありますか。

→教育長▷2019年、長野市周辺の堤防が決壊した台風19号では千曲川が大増水しました。それから長野県では、洪水時の浸水区域を示したハザードマップを作成しました。そのハザードマップでは、中学校の一番奥にある校舎の地面まで浸水するように示されています。私たちも初めて洪水時の影響範囲を知ったところです。ただし、その想定した洪水時の災害の浸水区域は、1,000年や2,000年に一度の大洪水といわれていて、先の台風19号は100年や、200年に一度、起こる程度の洪水といわれています。そのため、これからハザードマップを十分に精査し、検討していきたいと思います。

◎女性▷検討や考えるのではなくて、調査しないと答えが出ないと思います。

→教育長▷調査というのは、地質調査のことを言っていますか。

◎女性▷はい。

→教育長▷これまでに地質調査をした経過はございません。

◎女性▷今、いろいろな自治体で浸水のおそれがある場所だとか、土砂崩れが起こるような崖の下には、条例をつくって人が住まないようにするとか、公共のものなどを建てないようにするとか取り組んでいます。しかし、なぜかそういう危険な箇所に老人ホームや学校が結構建っていて、被害に遭っています。1,000年単位だ、100年単位だ、でも明日来るかどうかは分からないのに、それを1,000年は大丈夫でしょうということで進めて、ボーリング（調査）は別にやってもいいんじゃないのでしょうか。（学校建設の）候補地にするからには、安全性がある程度担保できるところでないといけないと思います。そのためにやはり山を１つ崩して、安全性を確保して、それに係る経済性、もしそんなにかからないよと、南小を潰すほうにお金がかかるということなら、またそれは検討の余地があると思います。もし山を崩して、平らにして広大な土地を開くお金があるのだったら、子どもたちに直接いい学習環境を整えたり、先生を増やすなど、教育費に使ったほうが、地面を平らにするお金を使うよりは私は有効だと思います。

→村長▷ご意見はごもっともです。私もこういう学校の在り方や子どもたちのためにどういう学校が良いのかという議論をしていくことと併せて、洪水時の対策を考えています。1,000年に一度の洪水災害が発生したときは、役場、中央公民館、社協、診療所などはすべて浸水してしまいます。また、海尻地区、森下地区、海ノ口地区、広瀬地区は川沿いに多くの民家も抱えていることから同様のことは起こってしまいます。そういうことを踏まえて、将来的に役場の移転や老朽化した中央公民館を新たにどこに造ったらいいのか、社協をどのようにしたらよいのかなどを考えています。学校問題に限らず、公共施設を含めた施策を推進する上でボーリング調査なども実施していく過程で学校の候補地も、おのずと決まってくるのではないかと思っています。

◎女性▷そういうことのなかで、新設校をつくるメリットも１つはあると思います。３校の子どもたちがずっと生活していて、新設校ができれば、そこにぽんと次に行ける、自分たちの環境をそんなに変えずに新しいところに入っていけるので、それはメリットと思います。しかし、そうなると、村内に廃校が３つできてしまいます。県内の廃校問題というのは結構大きな問題になっているようで、今後考えていかなければいけないと思います。ただ、南小の体育館だけは以前、耐震基準を満たさなかったので新設しています。多分20年たっていないと思います。だから、そういうものを活用できるのならば活用していったほうがよいと思います。それとやはり子どもたちがずっと長い時間過ごす場所なので、安全性は確保してほしいです。

→村長▷どの地区も学校を統合するとなれば、廃校される学校ができます。例えば、小海町では、北牧小学校は廃校になりましたが、その後、地域のコミュニティセンターとして大いに利用されていて、町民の皆さんは喜んでいるそうです。南牧村ではそういったコミュニティーの場所が少ないので老朽化している建物は別として、使える建物は廃校後も有効活用していきたいと思っています。

◎男性▷村の子どもの数が減ってきていて、小規模な学校にならざるを得なる状況は分かりました。北相木村は山村留学を取り入れています。南牧村でも全体をまとめて義務教育学校にしていく上で山村留学などを取り入れていく考えはありますか。

→教育長▷今のところ、南牧村で山村留学や南相木村の親子留学を行うことについて議論されていません。ただし、村長はこれからの新しい形の学校、南牧村の学校に憧れて、他市町村から南牧村へやってきてくれる子どもたちがいたら、家族そろって村へ呼び込めるような形にしたいと話させていただいています。

→村長▷今、教育長からの話のとおり、今のところ、山村留学を取り入れていく予定はありません。しかし、本当にみんなが憧れるような、この学校で子どもたちを学ばせたいと思えるような学校をつくりたいと思っていますから、移住してくる方たちもいるのでないかと考えています。そういう方たちも呼び込めるような学校をつくりたいと思っています。また、現在、小諸市にある特別支援学校は南牧村から遠距離にあります。この特別支援学校の分教室を新しい学校につくることも考えられます。近隣の町村からも児童・生徒が安心して通え、学べる施設にしたいと思っています。

◎男性▷私は「次世代を生きる子どもたちのために」という、これが一番大きなテーマだと思います。地域みんなで子どもを育てる、学校を応援していく、そういう姿勢が一番大事ではないかと思っています。今、話を聞いていると、あしたにでもすぐ学校ができてしまうように感じますが、そうではなくて、南牧の子どもたちをどのような大人にしていくのか、育てていくのか、そこを村長や、教育委員会には一番考えてもらいたいと思います。南牧の子どもたちだけでなく、これからの子どもたちが一番身につけていかなければならないのは、世の中に出たとき、即応できるような教育だと思います。

　それと、どういう学校にするとかという前に腰を据えて、どういう子どもたちを育てるとか、といった理念をしっかり練ってほしいと思います。今までの学校づくり委員会や建設検討委員会では学校の先生、教育委員会、保護者、他にもいろいろな方々が集まって議論し、10年近く経っています。これからはＡＩ問題もあり、専門家の委員も招いて研究会や検討委員会をさらに進めてほしいと思います。幸いなことに、軽井沢や佐久穂町にはモデルになるような学校があります。そういう学校を十分踏まえても、本当に特徴のある、日本にここしかないような、そういう学校をつくってもらいたいです。子どもたちを南牧のこの学校へ来させたいような。それによって波及効果が生まれ、人口が増えると思います。

◎男性▷自分たちでも地域のみんなで子どもを育てる、大人も学び、共育ち、共学びの村というのは理想としたところです。南牧村にはコミュニティスクールが南小、北小、中学校でそれぞれにあって、地域の皆さんの力を借りて運営されています。先ほどから地域のみんなで地域の子どもを育てようと言われているけれど、それはやはり地域に住む皆さんのボランティアが一番大事だと思います。そのボランティアは大体70歳後半か、80歳で、すごいなと思うおばあちゃん達が見守り隊をしたり、朗読をしています。これからは今の60代、50代、40代の皆さんが参加するようなしてほしいです。学校の中にいろいろな施設をつくるのはすごく賛成です。そして、年寄りがいつでも学校へ遊びに行ける形になればもっといいことだと思うので、できればそんな学校にやってほしいと思っています。

◎女性▷学校を考えるときに一番大事なのは、子どもを中心に置くことだと思います。大人がこういう子どもに育てたい、こんな子どもをつくりたい、こんな大人にしたいという理想は大事だと思いますが、やっぱり子どもはすごく多様だし、こういうふうに育てようと思って簡単にそう育つものでもな

いと思います。子どもがどんなことを望んでいるか、何が必要か、そこをほったらかして大人が先にこういう子にするということだけを考えると、危険な感じもします。これが望ましい子どもで、そのほかは駄目ということではないと思います。先ほどの方が言われたように、専門家を交えて検討するというのもすごく大事なことだと思います。ただし、どういう専門家なのか、これがまたいろいろあると思うので、私はみんなが納得できる、上のほうから降ってきたような人ではなくて、教育に関する様々なジャンルの本当の専門家、そういう専門家の話を１人だけではなく、一方向だけではなくて、いろいろなタイプの人の聞く機会を持ったり、教育、市民の方とかを中心にしっかり学んでいくことがすごく大事だと思っています。もう一つは、前村長のときに、今の南小の敷地へ何となくぼんやり決まってきたような話を聞いた気がします。途中で立ち消えになっているようですが、どうして立ち消えになってしまったのでしょうか。そういうことはきちんと経過を説明されているのでしょうか。

→教育長▷前村長が、信濃毎日新聞で南小学校周辺というような発言をした記事が掲載されました。しかし、それは役場も、議会も、そして教育委員会でも、（学校の建設地が）南小学校に決まったということを前村長から一切聞いていません。南小学校の周辺に建設するにあたって、当時の大村村長は、南小学校の東側に新たに土地を取得して、そこを建設用地として学校を建てたい考えを持っていたようです。ただし、その南小学校の東側の土地については、地図混乱地になっています。その地図混乱地を解消するためには、板橋地区の土地関係者全員の同意が必要で、その同意を取り付けるために板橋財産区議員が奔走しましたが、結局のところ、全員に同意してもらえませんでした。そのために土地の取得ができなかったということです。

◎男性▷当時の板橋財産区議員は南小の敷地周辺には泉があって、森があって、八ヶ岳がある、こんないいところはないということで（新しい学校を）つくりたくて、プレゼンまでしています。しかし、その土地問題はなかなか難しくてできないことも事実です。

→教育長▷この板橋地区は、南小学校の周辺だけではなくて、この集会施設が建っている場所もそうですが、明治時代にできた法務局備え付けの公図と、大正時代にできた（土地の）図面の２つが存在していて、現在は大正時代にできた（土地の）図面をもとにして土地の占有が行われています。地図混乱地ということで、この地域は法務局にある公図と現場が相違していて、その土地問題を解決するのにすごく苦労している地域です。そのために進められないでいるということです。

◎女性▷私が言いたいのは、土地をどこに選定するかということももちろん大事ですが、ここが駄目だからあそこがあるよというような安易なことではなくて、本当に統合して１つにしてしまうのがいいのか、いろいろな形態も含めて、じっくりとどういう学校があるべきかを考えるべきです。もちろん答申をまとめてということは分かりますが、答申は答申であって決定事項ではないので、もっと柔軟にいろんな人や、子どもの意見も聞いて、場所も、そういう難しい問題をどうやってクリアするか、本当にそこしか可能性がないのか、安易な選び方はしないでほしいと思います。

→教育長▷まさにそのとおりです。やはり場所が先に先行してしまうと本末転倒になってしまうと思います。どういう教育が望まれるのか、子どもたちはどういうことを望んでいるのか、または親たちや、地域はどういうことを望んでいるのかという理念・理想をしっかりみんなが共有したうえで、さて、どういう学校がいいのか、それにはどういう場所がいいのかを決めていかなければいけないと思います。ですから、先ほどお話しいただいたように、そのためにはいろいろな方面の方の意見も聞きながら、冷静に検討していく必要があることは分かりましたので、そういった点も踏まえながら、これからの議論に参考にしていきたいと思います。

◎女性▷立地に関して、これからの少子化を考えれば、南小の敷地内ででかい学校は要らないという考えも出されています。教員住宅や給食施設も学校の敷地内になくても、不便でないと思います。南牧中学校周辺も整地をして、こんな学校が建てられるというようなA案、B案、南牧中学校周辺ではこうい

う教育ができる、南小跡ではこういうようなことができるといった具体的モデルがあれば皆さんが理解しやすいと思いますが、いかがでしょうか。

→**教育長**▷そういったこともあると思います。ただ、先ほどから用地のことについて発言いただいますが、子どもの未来像についてはどのように考えますか。

◎**女性**▷一例として、小海の今の小学校はあんなトンネルの向こうのへんぴなところにあります。片道40分かけて通ってくる子どももいるそうです。私は（小学校を建てた当時の小池町長さんに）どうしてあの場所へ小学校を建てたのか、お話を聞かせていただくことができました。彼は「ビオトープのある学校がつくりたかった」といっていました。田んぼの脇に小動物や昆虫が集まって、自分たちが稲を作って、お餅つきをしたりして、そういう体験ができる場所だから、あの場所を選んだというのです。周辺のPTAや、歩いて通っていたような保護者からは大反対、「何であんなところに」「あんなへんぴな通いづらいところにするんだ」といって猛反対されたそうですが、それを押し切ってつくったということです。だから、コンセプトがあって、そこでなければ駄目という学校もあると思います。南小なら農村らしく畑の学習を拡充させるとか、南牧中学校だったら野山の森林の様子を観察できるとか、何でもかんでも場所ありきというわけではなくて、そういうコンセプトも関係するのではないかと思います。

→**教育長**▷コンセプトが大切なことは分かりました。貴女様の言葉で、どういう子どもであってほしいと考えますか。

◎**女性**▷私の子どもは南小に通ったので「南小店」の活動を続けてきました。伝統的な農村としての活動がなくなってしまうのは悲しいので、やはり農村らしさを出した学校にするのはいかがかなと思っています。

→**村長**▷私も、皆さんの意見をしっかりと聞いて、コンセプトもしっかりと示して、こういう学校を、こういう理由で、ここにつくりたいとしっかりと示していきたいと思います。

◎**男性**▷私は村の皆さん、学校の先生たちにまず、子どもたちのためにということをしっかり考えてもらいたいです。特定の専門家でなくても多様に富んだ、いろいろな意見を持った方が必要ではないかと思います。これからの子どもたちは対人関係や世の中、そして、世界の仕組みや、多様性が物凄く課題になってきていると思います。その多様性などに対応できる子どもたちになってもらいたい。先ほどの発言者の方が、大人がレールを敷くのはどうかという意見がありました。もっともなことだと思います。ただ、子どもたちに「あなたはどんな勉強をしたい?」「どういうふうになりたい?」と言ってもなかなかそれは（子どもの口から）出てくるものではないので、それを手助けできるような雰囲気の持った地域のシステムになっていってもらえればいいなと思います。

→**村長**▷学校の運動会へ行かせていただくと、子どもたちで考えた、自分たちで手作りする運動会や、中学校では自主性を持たせる教育など、子どもたちを中心に据えられたな教育が見られます。小学校の児童会や、中学の生徒会も本当に積極的に活動していますから、児童会や生徒会の意見もしっかり聞いて、生かしていきたいと思います。

◎**女性**▷私は学校問題を考える上で「上と下」という概念で話が進んでしまうことがとても嫌です。私は当初、広瀬に住んでいて、その後、野辺山に引っ越しました。私の子どもも北小から南小へ行って、北小、南小の良いところがいっぱいあることを感じています。私はやはり子どもを第一に考えて、どういう学校にしていくかを考えて、建設場所はまたその後で、どこがいいかを検討していただければいいことでないかと思っています。皆さんに理解してほしいと思います。

→**村長**▷この村はやはり「上と下」という意識がありますから、学校を統合する上でどうしても上にするのか、下にするのかということが最終的には出てくると思います。しかし、どういう形が子どもたちの将来に望ましいのかということを皆さんからご意見もいただいていますので、そういう点も踏まえて

しっかりとコンセプトを示して、ここにこういう学校をつくりたいというものを出していきたいと思います。

◎女性▷学校給食だけでなく、独り暮らしの人やデイサービスへの配食サービスもできる、大きな給食センターをつくってもらえれば、そこで働ける人たちも増えて、学校にも附属しないで、学校と村全体がよくなるのでないかと思います。

それと、どうせ学校をつくるのであれば、大きな体育館を１つ造ってほしいと思います。この村では大会を開くにしても、中学校の体育館と社会体育館が離れているので大会運営が大変です。もう少し近いところに大きな体育館が２つあったら、大会をスムーズにできるからです。今、南小、北小の子どもたちはすごくいい子たちです。だから、この環境で育つ今の子どもたちが新しい学校になったからといって悪くなるとか、良くなるとか、そういうことではなくて、今までの南牧村の子どもたちのような子を育てられるような学校にしてほしいと思います。それと子どもたちが成長してここに住むためには、村に仕事がないと出ていってしまいます。その先を考えて、村の中に仕事をつくっていってほしいです。

→教育長▷村長も複合型の義務教育学校の給食センターでは高齢者への配食サービスができたり、学校のランチルームに村民がご飯を食べに行ったり、自由度を広げるような形がいいのではないかといっています。また、図書館にしても、今までの図書館は学校が管理していますから村の方が借りに行けません。その管理を学校から切り離して、学校の児童・生徒も使える、村の方も使えるような図書館をつくるのもよいでしょう。調理室も同様です。調理室も併設型にして、村民も使える、学校の生徒も使えるようにならないか検討しているところです。体育館も、大きいものが必要ですよね。災害があったときにはどうしてもそこを皆さんの避難先とするし、今の時代ですからスポーツ大会のときには、大きな体育館でないとなかなか運営も進まないと思います。それと今、学校では「個別最適の学び」が取り組まれていて、子どもの一人一人に合った学習が進められています。今までのように先生が一律に板書して、これを勉強しなさいということでなく、子どもたちが学習を通じて自分は何が好きなのかと考えられるような授業となっています。ですから、自分が好きなこと、自分の得意なことを見つけられるような、今の子どもたちをもっと伸ばしてやれるような南牧村の教育をつくっていきたいと思っています。

平沢地区懇談会　6月4日㈫

◎女性▷複合型の学校施設は防犯の問題がありませんか？　危険はありませんか？

→教育長▷複合型の施設とは、例えば一つの調理室を児童・生徒が家庭科の調理授業で使用し、一般の村民も料理教室で使えるようになるということです。図書館についても、児童・生徒、住民の皆さん全員が利用できます。

給食についても、子どもたちだけの給食ではなく、村民の方も食べられるような共用スペースがあります。複合型施設は、建物の省略化、地域交流の場として有効です。防犯の面については心配な面も残りますので、今後研究したいと思います。既に北海道安平町では複合型の義務教育学校を運営していますので、そういった施設も研究してみたいです。

◎男性▷学校の建設場所について、海ノ口だと水害等の災害の可能性が高いので、災害の可能性の低い野辺山とか市場になるのではと思いますが、どうですか？

→教育長▷数年前の台風19号は200年、300年に一度の災害でした。長野県は1000年に１度の割合で起こりうる洪水のハザードマップを作成しました。そのマップでは洪水時に中央公民館の屋根の上まで浸水することとなっています。しかし、洪水だけではなく、八ヶ岳の硫黄岳も今もなお活動している

ことから、どこに安全な場所があるかなかなか言えません。そういったことを踏まえながら、進めていかなければならないと考えます。

◎男性▷「次世代を生き抜く子どもたち」をつくるために直ぐに進めてほしいです。

→教育長▷「20年後、30年後の子どもの未来像」の理念を皆さんで共有することにより、「どんな学校がいいか」を考えるようになり、学校統合が進むと考えます。

→村長▷今の学校教育は、多様性のある子どもを育てるということで、色々な経験を通して学んでいます。

◎女性▷複合型の学校施設が平沢から遠く離れた場所へ決まってしまうと、平沢は不便になってしまいます。平沢地区の住民全員が反対しても他の地区の住民が賛成すれば（学校施設を）海ノ口に建設してしまいますか?

→教育長▷仮に中学校周辺に学校施設ができてしまったら、平沢の皆さんが不便に感じない施策を行い、補完していくべきだと思っています。

→村長▷学校に限らず住民の皆さんがなるべく公平に利用できる施設を考えていかなければならないと思っています。

◎女性▷義務教育学校だと校長先生が１人になってしまうと聞きましたが、他の先生の数も増減ありますか?

→教育長▷義務教育学校になったからといって教員の数を減らすことは考えていません。ただし、今教員になりたいという若者が減っていて教員の確保は年々難しくなっています。義務教育学校とすることで、小学校・中学校の教員の配置を柔軟に取り組めるようにしたいと思います。

◎女性▷教育費を減らさないでほしいです。その子に合った支援をしてほしいです。先生の住む宿舎を改善してほしいです。

→教育長▷先生たちの住環境の改善を図りたいと思っています。

◎女性▷学校が統合されたら、ほっとルームや児童クラブはどうなってしまうのですか。チャレンジする勇気を持てる子というけど、心が折れてしまった子どもや休息が必要な子のケアはどうなってしまうのでしょう。

→教育長▷児童クラブ・保育園は、南と北に２つあったほうが良いと思います。中間教室など、学校以外で子どもたちを支援する施設は維持していきたいと考えます。

◎女性▷仮に中学校周辺に学校ができたとして、平沢からの通学時間が長くなり、朝早く、帰りは遅くなってしまいます。その点についてお聞きします。

→教育長▷スクールバスを増便して、きめ細やかな運行を行い、平沢から学校までの直行便をつくっても良いと思っています。皆さんからたくさんの知恵をお借りして、そういった課題を解決していきたいと思います。

◎女性▷村民の皆さんが乗れるバスが運行できれば、村民も地域経済も回っていくと感じます。

→村長▷きめ細やかな対応をしていくように考えています。

◎男性▷今までの学校統合の議論を見ていても、理想や要望は結構でますが、やはり土地問題が一番根本的な問題だと思います。何年かかろうとも住民の皆さんへの説明を十分にして理解してもらえるように努めてほしいです。

→村長▷ここ20年来進んでこなかった学校問題をスピーディーにやっていきたいと思っています。

野辺山地区懇談会　6月5日(水)

◎男性▷今日、中学校の校舎の中へ入る機会がありました。空いている教室もあり、生徒と村民が一緒に利用できる施設が必要と思いました。

◎男性▷これまでの学校統合の議論で学校建設候補地が２か所に絞られているが、それについて村長はどのように考えていますか。

→村長▷答申された２か所の学校建設候補地を前提に考えています。

◎男性▷答申された２か所の学校建設候補地に限らず、本当に良い場所があるのなら、そちらも検討してほしい。危険な場所へ学校を建設しないでほしい。

◎男性▷PTAの皆さんへ「どういった学校を作ったらよいか」アンケートをしたらどうでしょうか。学校建設にあたっては、設計業者の選定をプロポーザル方式として、PTAの意見が反映できるようにしたらどうでしょうか。

→教育長▷吟味して検討したいと思います。

◎男性▷教育長から説明のあった「目指すべき子どもの未来像」は今、南牧村にある３つの学校で目指すことができないのでしょうか。私は学校統合せずに今日からでも取り組める内容だと思います。複合型の学校施設でないと「目指すべき子どもの未来像」が実現できないという発想は視点が違います。「目指すべき子どもの未来像」を今の学校で実現できないから学校統合するということであれば、もう少し分かりやすく村民に説明する必要があるのでないでしょうか。

→教育長▷私たちが、かつて教室で受けていた授業から現在は子どもの考え方に寄り添った自主的な学びが行われ、それとともに仲間と協働しながら教え合う、協働の学びも行われています。そういった中で今の学校施設的には、昔のように教室と廊下が仕切られ壁もなくなってしまった学校もあるようです。また、タブレットによる授業も進み、学校でも情報通信設備も兼ね備えたものでなければいけません。学校の先生方の働き方の見直しもあって、先生たちもどんどん少なくなっていきます。そういうなかで、義務教育学校と申し上げたのは、義務教育学校とした場合、小学校・中学校の先生方を融通しながら、子どもたちの教育にあたれるようになります。また、PTAもいま、小学校に２つ、中学校に１つあるものが１つのPTAとすることができます。親御さんたちの負担も軽減されます。学校の子どもたちだけでなく、学校を取り巻く関係者の在り方も変えられるのでないかと考えて、義務教育学校を挙げさせてもらいました。ここにお集まりの皆さんは、子どもたちがどうあってほしいのかと尋ねられれば、最終的には自分の子どもは幸せになってほしいということが最終目標であると思います。子どもたちが幸せになるには学校で基礎学力を身につけることも大切だけれども、それ以上に子どもたちが自分の得意なこと、何が好きなのかを探してあげることがこれからの学校の姿でないかと思います。今、国で言っている「個別最適な学び」や、友達といろいろ協力して学ぶ「協働の学び」でないかと考えます。

◎男性▷具体的なことは分からないが、平成16年だったと思うが、16年じゃないな、2016年か。文科省がいわゆる学校の在り方についてのガイドラインが示されました。それと同じくして、総務省が全国の自治体へ公共施設の今後の管理の在り方について計画しなさいといってきた。南牧村でもこの計画は作りました。文科省の出したガイドラインと、総務省が各自治体へ作りなさいといった公共施設計画にはどういった狙いがあったかというと、地方交付税の削減や、教職員の数の削減だったわけです。そういうそれぞれの思惑があって、義務教育学校とか、施設一体型の学校の統廃合が進んできたという現実があると思います。これが良いのか悪いのかということは、私たちがこれから判断しなければいけないのだけれども、背景として、国の合理化が市町村合併と同じように学校に向けられて、現在に至っていることを私たち一人ひとりが認識しておく必要があると思います。その上に立って、南牧村

はどうするんだと。学校の統廃合についても最終的に住民の皆さんの意思をきちんと聞き入れて、方向を出していく方向を取らざるを得ないと思います。これからみんなで検討していく大事な時期だろうと思います。国の方針の良い悪いはともかくとして、そういった背景があって、現在に至っているということを私たちは認識しておく必要があると思います。

→村長▶私は国の教育方針は必ずしも合理化だけで出したものとは思っていません。やはり、子どもたちにとってどういう形にしていったらよいのか、そういったことを踏まえて、(国の教育方針は) 出されたものと思っています。南牧村の状況を見れば、平成16年ころ、あるいは８年前からいろいろな議論を重ねてきましたがなかなか結論を得るに至っていません。私は議論だけされて結論を得ないままにしておくわけにもいきませんので、各学校の保護者の皆さん、地域の皆さんのご意見をお伺いし、また新たに建設検討委員会のようなものも立ち上げ、その中には専門家も交えてしっかりとした方向性を導きたいと思います。そのうえでまた、皆さんにもその内容をお伝えし、議論していただいて、決断していきたいと思っています。

◎女性▶保護者が今、どのように考えているのかがとても大切です。そのため、建設検討委員会へ保護者はどのくらいの割合で参加しているのでしょうか。また、これからの学校には地域住民の協力、共学びが必要といっていますが、いろいろな方が学校へ入ることによって、子どもたちを守ること、警備の面で大丈夫なのでしょうか。

→教育長▶建設検討委員会は総勢47名、そのうちPTAの皆さんは27名入っています。それに加え、保育園の保護者にも入ってもらっています。２つ目の安全面について、私どもで調べたところ、北海道安平町に複合型の義務教育学校があって、図書館を生徒・住民がともに利用している事例があります。その図書館にはセキュリティーがかかるようになっていて、そういった先進地の例を見ながら、皆さんと知恵を出し合って可能にしていきたいです。

◎女性▶図書館を２つに分けているということですか。

→教育長▶図書館は１つです。学校が管理するのでなくて、村が管理する図書館を１つ作って、そこへ子どもたちも入ってきて、本を借りる。住民の皆さんもそこへ行って本を借りるということを考えています。

◎女性▶(図書館の) 利用時間は同じですか。子どもたちと会ってしまう心配はないですか。

→教育長▶それは、住民が学校の中へ入る。それで共に協働していくことだと思います。大人の皆さんが子どもたちと関わる。子どもたちもまた、大人と関わっていく。今、中央公民館には調理室があります。子どもたちは学校の調理室で家庭科の授業として料理を作っていますね。一方、村では大人の皆さんを対象とした料理教室があって、中央公民館の調理室を使っています。しかし、これからは大人も子どもたちも利用できるしっかりした調理室を１つ造って子どもたちもその調理室を借りにくる、大人もその調理室へ行って、料理するような、そういった複合型、共に利用できる施設があってもよいのでないかと思っています。また、板橋地区懇談会では学校の食堂、いわゆるランチルームで村の皆さんに配食できるサービスや、ランチルームで村民が食事を摂れるようになってもよいといった意見も出されました。たくさんいろいろな施設を作ればよいというものでなくて、村の皆さんも利用できる施設があれば、学校と共用していく考え方が複合型の義務教育学校と考えています。

◎女性▶いずれにしても安全面は大切だと思います。そこはまた、皆さんでいろいろな知恵を出し合っていかなければならないと思います。

→教育長▶子どもたちの安全についてはしっかり考えていきたいです。

◎女性▶新しい知識の導入という点ではどうやって行くのでしょうか。

→教育長▶私たちはこれから子どもたちと一緒に学ぶことによって高い教養が得られる。そういったものを目指せばよいのでないか。

◎女性▷私は自分の子どもや孫により良い教育、高い教育をつけてあげたいと思っています。しかし、時代が進み、私の価値観とはだいぶ違っていくなかで、今の保護者がどのように考えているのかがとても大切だと思います。

◎女性▷保護者の意見を聞いたほうが良いといわれましたが、もちろんそう思います。いろいろな意見を聞くことが大事で、自分の意見を持つことも大切だと分かってきました。保護者の意見を聞くことはもちろんですが、この村で育ち、高校・大学へ進学し、就職した20代の子どもたちがどう思っているのか、アンケートをとってもらえたら参考になるのでないかと思いました。

→教育長▷検討します。

○男性▷先ほどからいろいろな話が出ていますが、要は村長が言ったように10年先、20年先をどうするのかということだと思います。(子どもたちは) 今の国際情勢も含めて、南牧村から巣立って出て行ったときにその先々でたくさんの事柄に遭遇します。今までは単一民族のなかで同じ言語を話し、理解していたけれど、やがて他国の人間と関わるようになると言語の問題だけでなく、文化の問題にも直面するようになります。そういう意味で、これからは自分も相手も大切にできることが非常に大事になってきます。そういったものを育てるには、どういう環境を子どもたちに与えてあげたらいいのかということです。その点をしっかり捉えて、南牧村でなければできないようなやり方、あるいは環境の良さを生かしてもらえば、子どもたちが経験するであろう原体験の幅の広さは、他の地区に比べてはるかに大きいと思います。私は他国で９年制の学校の子どもたちと交流したことがありますが、年齢差のある子たちが、小さい子たちを見ている環境は非常に良い環境づくりです。その環境では、知らないこと、能力の高い低い、文化の違いなど触れ合う地盤が作られます。(子どもたちの)人数が少ないわけですから、人数で処理できることも自ずと制限されます。そうなると、どのような環境を与えるべきなのか考えた学校づくりをすべきでないかと考えます。

◎女性▷長く学校の問題は時間がかかっていますが、その中で少子化も進み、中学校の現状も相当変わりました。中学校では部活動の地域移行が始まり、中学生が近隣の地域へ移動することの不便さをすごく感じています。その辺の説明をしっかりしてほしい。学校を建設するにあたっては、JR駅のそばとか。部活動の話について、中学生は現在、どういうところに不便さを感じているのか聞いていただきたいです。

→教育長▷部活動の地域移行は、この南佐久地域が全国的にも先進的な取組をしています。先行しているとはいえ、まだまだ試行錯誤しながら進めている状況です。送迎の問題については近隣町村の教育長さんたちとも相談しているところです。

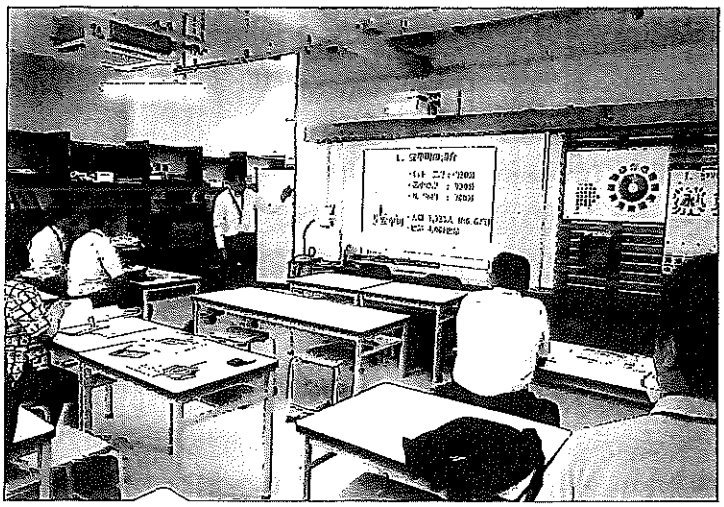
○男性▷全国的にも少子化は進んでいて、どの自治体でも人口減少は大きな課題となっています。人口減少を前提とするのでなくて、人口を増やす政策を打っていただきたいと思います。人口流入するような政策があれば、魅力的な村づくりとなって、積極的な移住者も増えて、活気ある学校づくりができると思います。

→村長▷住居は本当に大事だと思っています。村では今年度、単身者住宅を1棟建設いますがその他にも世帯住宅の建設も考えています。また、空き家対策や宅地供給など、皆さんのアイデアもお聞きしながらいろいろと考えていきたいと思います。

◎女性▷私は安平町を知らなかったものですから、調べました。人口7,000人、令和５年４月に開校した義務教育学校があるようです。その他にも小学校が１つ、中学校が１つ、そして高校も１校あるようです。ゴルフ場も５か所あって、スキー場も１つあります。ちょっと南牧村との差を感じました。

早来学園の視察を終えて

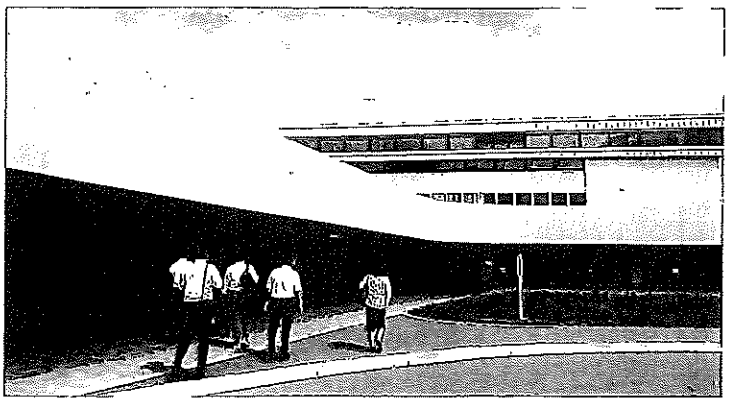
南牧村教育委員会　教育長　今井　力



視察の様子

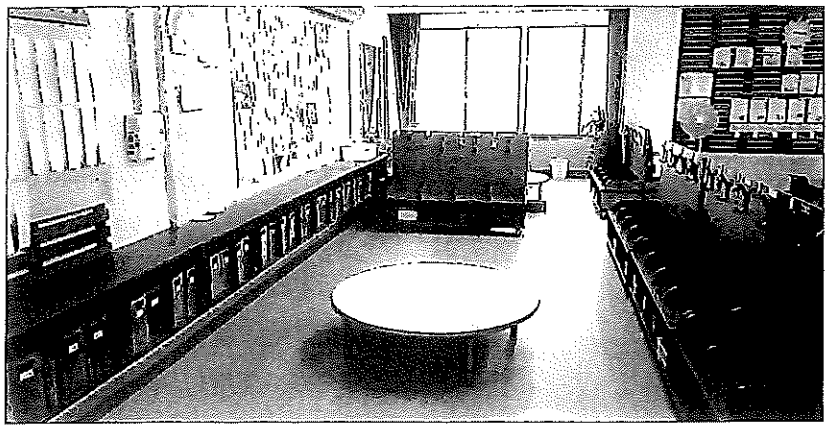
7月30日、北海道勇払郡安平町にある安平町立早来学園の視察へ有坂良人村長と私、そして村役場職員5名で行ってきました。

安平町は北海道の南西部に位置し、千歳市や苫小牧市に隣接する人口7,339人、世帯数は4,061世帯(2024年6月30日時点)の町です。町の面積は233.16キロ平方メートル、南牧村の1.8倍の広さがあります。平成18年3月に旧追分町と旧早来町の2町が合併してできた、比較的若い町です。市町村合併当時、旧追分町には1中学校、1小学校があり、旧早来町では1中学校と3小学校がある状況でした。安平町でも急速に進む少子化により児童生徒数の減少が深刻化し、5つの小学校のうち、3校において複式学級が導入されて学校が運営されるようになり、さまざまな支障が生じていたとのことです。そうしたなかで町では保護者や地域住民と学校統合について検討が進められていたようです。平成30年9月6日に発生した北海道胆振東部地震は震度6強の揺れで安平町を襲いました。その後2か月間にわたって、安平町では震度4以上の揺れが9回、起こったそうです。ご想像のとおり、学校への被害も確認され、特に早来中学校ではグラウンドはひび割れ、校舎の壁には亀裂が走り、体育館の屋根は押しつぶされてしまうといった惨憺たる状況だったそうです。こうした危機的な状況のなかで安平町は学校再建の決断をします。学校再建にあたって、①地域に開かれた学校であること、②未来に向けた復興のシンボルであること、③特色ある教育プランの実行、④子どもにやさしいまちづくりの実践の4つのキーワードを念頭に取り組まれたそうです。折しも安平町では平成29年度から旧追分町の地域の学校で小中一貫教育が試行されていたことから、被災した地域の旧早来町地区の学校再建を「義務教育学校」とすることで準備が始まったそうです。

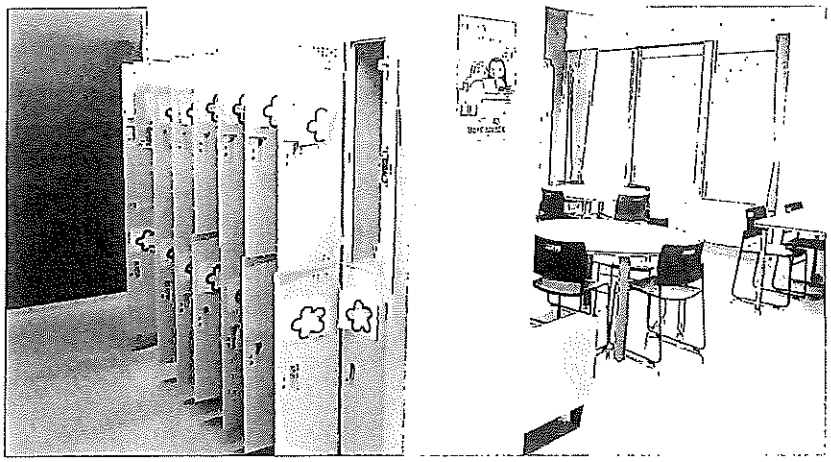


外観

今回、視察した早来学園は、令和5年4月に開校した義務教育学校です。地震で被災した早来中学校の再建と、老朽化が進んだ近隣の3小学校が統合したもので、新校舎には地域の公



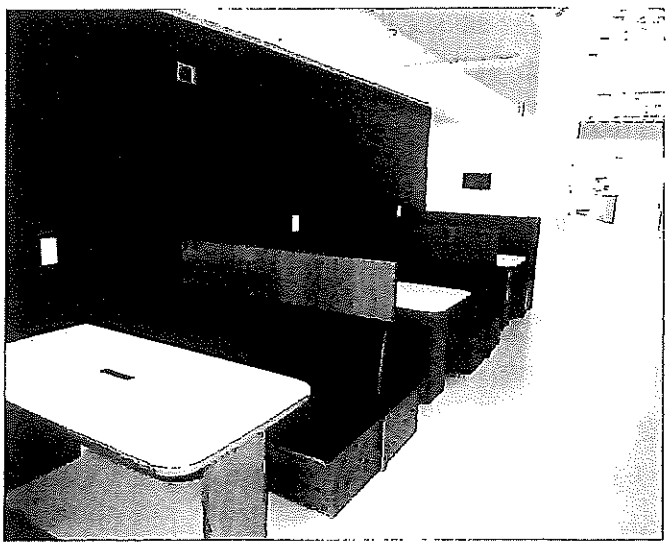
低学年の教室のランドセル置き場



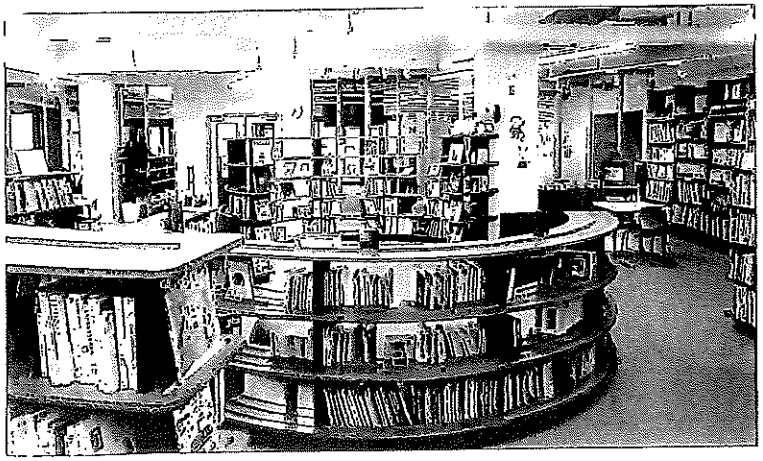
7～9年生の拠点「ホームベース」

民館図書館としての機能を持たせていて、学校と地域が一体となった、まちのコミュニティーとなる学校ができました。この学校施設は、地域住民が自由に使うことができる「開放エリア」、学校が使っていないときに地域住民が利用できる「共用エリア」、学校が主として使う「専用エリア」に分かれています。この施設一体型の義務教育学校には、さまざまなデザインを取り入れた教室がありました。1年生から6年生までの前期課程の教室は、各学年の成長段階に合わせたデザインが採用された造りでした。後期課程となる7年生から9年生は特定の教室を持たず、教科ごとに教室を移動して授業するようになっていました。教室がない代わりに拠点となる「ホームベース」と呼ばれる空間が用意されていました。7年生の拠点となるホームベースは5･6年生の教室の隣りに配置されていて、『中1ギャップ』が生じないような取組がされていました。教科教室や普通教室は通常の学校の約2倍の広さの教室になっていて、子どもたちの発達段階に合わせた最適な家具が並んでいました。黒板の代わりに可動式のホワイトボードやプロジェクターを使って、教室の前後の向きを固定しない、柔軟な授業形態ができるようになっていました。

「開放エリア」には地域住民が自由に利用できる図書館があります。図書館には広い空間の中にさまざまな家具が配置され、5万冊の蔵書が取り揃えられていました。（南牧村の図書館はしばみは、6万1千663冊所蔵）9:00～21:00までの利用が可能で、地域住民が利用する入口には「まちのリビング」と呼ばれている多目的スペースがあり、イベントにも利

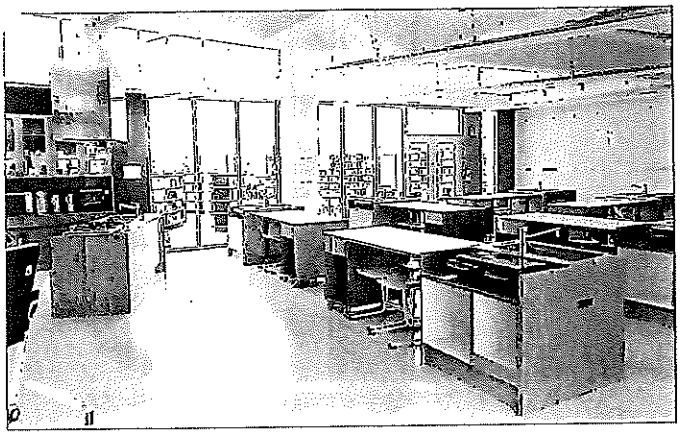


子どもたちのくつろぎスペース（廊下）

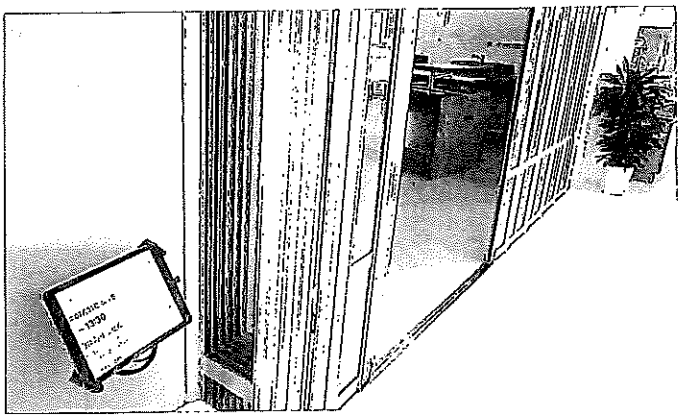


図書館

用されているそうです。そこにはWi-Fi機能や電源を完備していて、オフィスワークや保護者の待合スペースとしても使われたり、子育て中のお母さんが赤ちゃんを連れて利用するなど、世代を超えて子どもたちと地域住民が自由に利用できる場所となっていました。学校が利用しない時に地域住民が利用できる「共用エリア」には家庭科室(キッチン)、美術室(アトリエ)、音楽室(スタジオ)、体育館(大アリーナ)などの特別教室があります。児童・生徒と地域住民の入口は分られていて、住民が体育館などを利用したい場合、スマホを使って簡単に予約できるシステムとなっています。学校の授業で利用するときは、地域住民が利用できないように自動制御されます。また、体育館などの共用エリアの各特別教室の扉には予約システムと連動したスマートロックシステムがあり、学校が利用しているときは地域住民側の入口が施錠され、地域住民が利用しているときは学校側の入口が施錠される仕組みとなっています。ICT技術を使った学校施設の開放は先生たちの労力に頼らず、負担を軽減して教育に専念できる管理運営が行われているとのことです。



家庭科室（キッチン）



スマートロックシステムと家庭科室（キッチン）

この早来学園は設計から工事の完成までに5年の歳月を要し、総工費37億4千1百万円。この事業の財源は文部科学省から交付される学校施設整備費交付金が10億8千2百万円、地震災害による災害復旧費国庫負担金が1億3千8百万円、コロナ臨時交付金　4千万円、過疎債　20億3千万円、復興支援金　8千万円、ふるさと納税　2億8千3百万円、町の一般財源は8千8百万円とのことでした。町の一般財源からの持ち出しが総工費の2.35パーセントです。安平町の学校関係者の苦心が想像できます。

今回の視察では最先端の学校施設のひとつを視察できて大変、勉強になりました。当村の学校統合に向けた糧となれば、幸いです。